

宮貝戸遺跡

宮貝戸遺跡

上信自動車道祖母島箱島バイパス建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

上信自動車道祖母島箱島バイパス建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一八

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



2018

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

宮 貝 戸 遺 跡

上信自動車道祖母島箱島バイパス建設事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2018

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

渋川市を起点に吾妻川沿いに吾妻郡東吾妻町等を経て長野県東御市に至る上信自動車道は、県央地域と県北西部の吾妻地域を結び、交通渋滞緩和や救急医療対応、産業振興等への貢献が期待される自動車道であり、一部では供用も開始されております。そして建設予定地では甲^{よろい}を着た古墳人の出土した渋川市の金井東裏遺跡や、遮光器土偶の出土した吾妻郡東吾妻町の唐堀遺跡など、全国的に注目される遺跡、遺物の発見が相次いでおります。

東吾妻町箱島で発掘調査いたしました宮貝戸^{みやがいと}遺跡も、そうした上信自動車道建設予定地にある遺跡の一つであり、平成28・29年度に発掘調査を実施いたしました。同遺跡では奈良・平安時代から江戸時代頃までの時期の遺構を調査し、数量は少なかったものの出土遺物を得ております。発見された遺構は中世を中心とした時期のものでありましたが、11世紀の所産と判断される二つの竈^{かまど}を有する竪穴建物や、中世の竪穴状遺構を伴う掘立柱建物などを調査し、様々な知見を得ることができました。

この度、宮貝戸遺跡の発掘調査成果をまとめ、埋蔵文化財発掘調査報告書として上梓することとなりました。ここに発掘調査から報告書作成まで、ご指導、ご協力を賜りました群馬県中之条土木事務所、群馬県上信自動車道建設事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、東吾妻町教育委員会をはじめ、本事業にご尽力賜りました関係各位に心からの感謝を申し上げます。そして、本報告書が当該地域、特に埋蔵文化財に関する知見の少ない東吾妻町(旧吾妻郡東村)箱島地区の歴史を知るうえで広く活用されますことを願ひまして、序といたします。

平成30年11月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野三智男

例 言

- 1 本書は、平成28年度並びに平成29年度上信自動車道祖母島箱島バイパス建設事業に伴い埋蔵文化財の発掘調査された、宮貝戸遺跡^{みやがいと}の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 宮貝戸遺跡は、群馬県吾妻郡東吾妻町大字箱島1125・1127・1129-1・1129-2・1129-3・1130・1138-1・1138-2・1139・1140・1141-2・1147-1・1148-1・1150-1・1150-2・1152-1・1152-2番地に所在する。
- 3 事業主体は群馬県中之条土木事務所(平成28年度)、群馬県上信自動車道建設事務所(平成29・30年度)である。
- 4 調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
- 5 発掘調査の期間と体制は次の通りである。

調査期間 (平成28年度)平成29年1月1日～平成29年1月31日
(履行期間：平成28年4月1日～平成29年3月31日)
(平成29年度)平成29年7月1日～平成29年8月31日
(履行期間：平成29年6月1日～平成29年10月31日)

調査担当 (平成28年度)調査部調査課 主任調査研究員 山本光明
(平成29年度)調査部調査課 調査研究員 山本直哉 専門調査役 飛田野正佳

遺跡掘削工事請負：瑞穂建設株式会社(平成28年度) 山下工業株式会社(平成29年度)

委託 地上測量：株式会社測研 空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル
土器洗浄・注記作業：株式会社測研
- 6 整理事業の期間と体制は次の通りである。

整理期間 平成30年4月1日～平成30年9月30日(履行期間：平成30年4月1日～平成30年11月30日)

整理担当 資料部資料1課 主任調査研究員 齊田智彦 資料部資料2課 専門調査役 石守 晃
- 7 本書作成の担当者は次の通りである。






編集 石守 晃
デジタル編集 齊田智彦

本文執筆 第4章第1節は山本光明が執筆し、株式会社火山灰考古学研究所の火山噴出物分析業務報告書を遺構、
図番号等一部加筆の上転載した。その他は石守が執筆した。

遺物観察 縄文・弥生土器：石坂 茂(専門調査役) 石器・石製品：津島秀章(資料第2課長)
土師器・須恵器・陶磁器：大西雅広(専門調査役)

遺物写真撮影 津島秀章・石守 晃
- 8 石材鑑定は飯島静男氏(群馬地質学研究会会員)に依頼した。
- 9 発掘調査諸資料及び出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 10 発掘調査及び本書作成に当たり諸氏、機関よりご協力、ご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表します。
群馬県中之条土木事務所、群馬県上信自動車道建設事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、
東吾妻町教育委員会文化財保護課

凡 例

- 1 宮貝戸遺跡の遺構平面図は世界測地系国家座標(座標第IX系)を用いて測量した。遺構図の中で使用した北方位はすべて座標北で、真北方向角は $+0^{\circ} 32' 23.10''$ である。
- 2 遺構図の中で使用した北方位は、すべて座標北を示している。
- 3 遺構の方位は、座標北を基準として主軸角度等の傾きを計測した。
- 4 遺構平面図の縮尺は、原則として以下を使用した。但し遺構によっては異なる縮率を用いたものもある。
 竪穴建物 1/60、竈・炉 1/30、掘立柱建物 1/60、堅穴状遺構 1/60、柵 1/40
 溝(平面) 1/80、(断面) 1/40、土坑・ピット 1/40、畠 (平面) 1/80、(断面) 1/40
- 5 遺物図の縮尺は以下の通りである。
 土器 1/3、石器・石製品 1/2
- 6 遺物番号は出土遺構ごとの連番で、番号は本文・挿図・表・写真図版ともに一致する。
- 7 図中で使用したスクリーンパターンやマークは、以下のことを表す。
 遺構  焼土  粘土  カクラン  炭
 遺物  赤色塗採
- 8 本書では必要に応じて、浅間A軽石(As-A)、浅間粕川テフラ(As-Kk)、浅間B軽石(As-B)、浅間C軽石(As-C)、浅間板鼻褐色軽石(As-BP)などの主要テフラを略号のみで表記した。
- 9 土層や土器の色調観察は、原則として農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。
- 10 第1図は昭和59年度の国土地理院の指示に基づいて、国土地理院20万分の1の地勢図「長野」・「宇都宮」を使用した。第2・6・7図は、昭和59年度の国土地理院の指示に基づいて、国土地理院2万5千分の1の地形図「金井」を使用した。

目次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

写真目次

第1章 宮貝戸遺跡の発掘調査とその経過	1	5 短冊形・長方形・溝形の土坑群	21
第1節 調査に至る経過	1	6 円形・楕円形・方形の土坑群	26
1 上信自動車道	1	7 10号土坑	28
2 試掘調査	4	8 4・37号土坑と1・2号谷	28
3 発掘調査に至る経過	4	9 ピット	29
第2節 発掘調査の経過	5	10 11号溝	29
第3節 発掘調査の方法	6	11 16号溝	30
1 調査区の設定	6	12 耕作遺構群(1～10・12～15号溝)	34
2 グリッドの設定	6	13 1号畠	36
3 発掘調査の方法	6	14 2号畠	36
4 発掘調査の記録	7	15 3号谷	36
第4節 基本土層	7	第3節 2区の遺構と遺物	42
第2章 宮貝戸遺跡を廻る環境	8	1 2区の遺構	42
第1節 地理的・地質的環境	8	2 長方形の土坑群	42
1 地理的環境	8	3 楕円形・方形の土坑群	43
2 地質的環境	9	4 ピット	43
第2節 歴史的環境	9	5 19号溝	46
1 縄文時代	9	6 耕作痕	46
2 弥生時代	10	7 遺構外の出土遺物	46
3 古墳時代	11	第4節 3区の遺構と遺物	50
4 奈良・平安時代	12	1 3区の遺構	50
5 中・近世	12	2 1号掘立柱建物・1号竪穴状遺構	50
第3章 発見された遺構と遺物	13	3 2号掘立柱建物	53
第1節 本遺跡の調査概要	13	4 3号掘立柱建物	55
1 遺跡の立地と調査区	13	5 2号竪穴状遺構	56
2 調査した遺構	13	6 長方形の土坑群	57
第2節 1区の遺構と遺物	15	7 円形・楕円形・方形の土坑群	57
1 1区の遺構	15	8 ピット	61
2 2号竪穴建物	15	9 17号溝	62
3 1号柵	20	10 18号溝	62
4 7号土坑	20	11 耕作痕	65

12 遺構外の出土遺物	67	(2) 1号谷	70
第5節 縄文時代の遺物	68	3 テフラ検出分析	71
1 本遺跡と縄文時代遺物との関係	68	(1) 分析試料と分析方法	71
2 本遺跡出土の縄文時代遺物	68	(2) 分析結果	71
第4章 自然科学分析	69	4 考察	71
第1節 自然科学分析の委託	69	5 まとめ	72
1 自然科学分析資料	69	第5章 まとめ	73
2 自然化学分析の目的	69	第1節 遺構、遺物の概要	73
3 自然科学分析の委託	69	1 遺構の時期的制約	73
4 委託の成果	69	2 遺構と遺物の概要	73
5 所見	69	第2節 若干の考察	73
第2節 宮貝戸遺跡火山噴出物分析業務	69	1 奈良・平安時代	73
1 はじめに	69	2 中世	74
2 土層の層序	70	3 3区の段差遺構	74
(1) 試掘トレンチ	70		

挿図目次

第1図	上信自動車道と遺跡位置図	1	第28図	1区南耕作遺構群(1~10・12~15号溝)と出土遺物	37
第2図	宮貝戸遺跡位置図	2	第29図	1区北1号畠、1区南2号畠	39
第3図	上信自動車道祖母島箱島バイパス箱島地域の試掘調査	3・4	第30図	2区全体図	42
第4図	調査区と国家座標軸	6	第31図	2区52・56~60号土坑と出土遺物	44
第5図	基本土層観察位置と土層断面	7	第32図	2区53~55号土坑	45
第6図	宮貝戸遺跡周辺地質図	8	第33図	2区38~40号ピット	45
第7図	宮貝戸遺跡周辺遺跡分布図	10	第34図	2区19号溝と出土遺物	47
第8図	宮貝戸遺跡調査区と調査遺構全体図	14	第35図	2区耕作痕	49
第9図	1区全体図	16	第36図	2区遺構外の出土遺物	49
第10図	1区南2号竪穴建物と出土遺物	17	第37図	3区全体図	51
第11図	1区南2号竪穴建物竈と竈1土層断面	18	第38図	3区1号竪立柱建物	52
第12図	1区南2号竪穴建物竈2土層断面	19	第39図	3区1号竪穴遺構と出土遺物	53
第13図	1区南1号柵	20	第40図	3区2号竪立柱建物	54
第14図	1区南7号土坑と出土遺物	21	第41図	3区3号竪立柱建物	55
第15図	1区北1号土坑、1区南2・3号土坑	22	第42図	3区2号竪穴遺構	56
第16図	1区南5・6・8・17・19号土坑と3号谷	23	第43図	3区36~40号土坑	58
第17図	1区南9・11~13・18号土坑	24	第44図	3区41~46号土坑	59
第18図	1区南14~16・20・21・24・27号土坑	25	第45図	3区47~51号土坑	60
第19図	1区南28・29・34・35号土坑	26	第46図	3区17・19・20・23・25・27・28号ピット	61
第20図	1区南22・23・25・26・30・31号土坑	27	第47図	3区32・34・37号ピット	62
第21図	1区南32・33号土坑	28	第48図	3区17・18号溝	63
第22図	1区南10号土坑	28	第49図	3区耕作痕と出土遺物	66
第23図	1区北4・37号土坑	30	第50図	3区遺構外の出土遺物	67
第24図	1区北4・37号土坑と1・2号谷	31	第51図	縄文時代の出土遺物	68
第25図	1区北1・2号ピット、1区南3~11号ピット	33	第52図	試掘トレンチ・9号土坑断面の総合地質柱状図	70
第26図	1区南12~14号ピット	34	第53図	1号谷の地質柱状図	70
第27図	1区南11・16号溝と出土遺物	35			

表目次

表1	周辺遺跡一覧	11	表11	2区土坑一覧	49
表2	宮貝戸遺跡遺構数量一覧	13	表12	2区ピット一覧	49
表3	1区南1号柵ピット一覧	40	表13	3区土坑一覧	67
表4	1区土坑一覧	40	表14	3区ピット一覧	67
表5	1区ピット一覧	40	表15	1区南深掘地点南壁におけるテフラ検出分析結果	71
表6	1区溝一覧	40	表16	宮貝戸遺跡遺構一覧	73
表7	1区南A群耕作痕(1~6・13号溝)サク間一覧	40	表17	遺物観察表(古墳時代以降)	75
表8	1区南B群耕作痕(7~10・12・14・15号溝)サク間一覧	40	表18	遺物観察表(縄文時代)	76
表9	1区北1号畠サク一覧	41	表19	土師器選り非掲載遺物集計表	76
表10	1区北1号畠サク間一覧	41	表20	縄文土器非掲載遺物集計表	76

写真目次

PL. 1	1	1区航空写真	5	1区南1号柵ピット4	
	2	1区航空写真	PL. 5	1	1区北1号土坑全景
PL. 2	1	1区南2号竪穴建物全景	2	1区南2号土坑全景	
	2	1区南2号竪穴建物遺物出土状況	3	1区南3号土坑全景	
	3	1区南2号竪穴建物全景	4	1区北4号土坑、2号谷全景	
	4	1区南2号竪穴建物竈1・2	5	1区南5号土坑全景	
	5	1区南2号竪穴建物竈1・2	6	1区南5・6号土坑、3号谷全景	
PL. 3	1	1区南2号竪穴建物竈1掘り方	7	1区南7号土坑全景	
	2	1区南2号竪穴建物竈2掘り方	8	1区南7号土坑遺物出土状況	
	3	1区南2号竪穴建物ピット1	PL. 6	1	1区南8号土坑全景
	4	1区南2号竪穴建物ピット2	2	1区南9号土坑全景	
	5	1区南2号竪穴建物ピット3	3	1区南10号土坑全景	
	6	1区南2号竪穴建物ピット3~6、炉	4	1区南11号土坑全景	
	7	1区南2号竪穴建物掘り方全景	5	1区南12・13・18号土坑全景	
PL. 4	1	1区南1号柵全景	6	1区南18号土坑全景	
	2	1区南1号柵ピット1	7	1区南14号土坑全景	
	3	1区南1号柵ピット2	8	1区南15号土坑全景	
	4	1区南1号柵ピット3	PL. 7	1	1区南16号土坑土層断面

	2	1区南20・21号土坑全景	PL. 15	1	2区19号溝全景
	3	1区南8・17・19号土坑全景		2	2区19号溝北部全景
	4	1区南22号土坑全景		3	2区19号溝中央部全景
	5	1区南23号土坑全景		4	2区19号溝南部全景
	6	1区南24号土坑全景		5	2区19号溝南西隅部全景
	7	1区南25号土坑全景		6	2区19号溝粕川堆積分布状況
PL. 8	1	1区南26号土坑全景		7	2区作業風景
	2	1区南27号土坑全景	PL. 16	1	2区耕作痕全景
	3	1区南28号土坑全景		2	2区耕作痕北東隅部全景
	4	1区南29号土坑土層断面		3	2区耕作痕東部全景
	5	1区南30号土坑全景		4	2区耕作痕北西隅部全景
	6	1区南31号土坑全景		5	2区耕作痕西部全景
	7	1区南32号土坑全景	PL. 17	1	3区全景
	8	1区南33号土坑全景		2	3区粕川堆積下窪地全景
PL. 9	1	1区南34号土坑全景	PL. 18	1	3区1号掘立柱建物全景
	2	1区南35号土坑全景		2	3区1号掘立柱建物ピット1土層断面
	3	1区北37号土坑全景		3	3区1号掘立柱建物ピット2土層断面
	4	1区北37号土坑全景、1号谷土層断面		4	3区1号掘立柱建物ピット3土層断面
	5	1区北37号土坑、1号谷全景		5	3区1号掘立柱建物ピット4土層断面
PL. 10	1	1区北1号ピット全景	PL. 19	1	3区1号掘立柱建物ピット5土層断面
	2	1区北2号ピット全景		2	3区1号掘立柱建物ピット6土層断面
	3	1区南3号ピット全景		3	3区2・3号掘立柱建物、17・23・27・28・32号ピット全景
	4	1区南4・5号ピット全景		4	3区2号掘立柱建物ピット1土層断面
	5	1区南6号ピット全景		5	3区2号掘立柱建物ピット6土層断面
	6	1区南7号ピット全景	PL. 20	1	3区1号堅穴状遺構全景
	7	1区南8号ピット全景		2	3区2号堅穴状遺構礫出土状況
	8	1区南9号ピット全景		3	3区2号堅穴状遺構全景
	9	1区南10号ピット全景		4	3区36号土坑全景
	10	1区南11号ピット全景		5	3区37号土坑全景
	11	1区南12号ピット全景		6	3区38号土坑全景
	12	1区南13号ピット全景		7	3区39号土坑全景
	13	1区南14号ピット全景		8	3区40号土坑全景
PL. 11	1	1区南耕作遺構群(1～10・12～15号溝)全景	PL. 21	1	3区41号土坑全景
	2	1区南耕作遺構群(1～10・12～15号溝)全景		2	3区42号土坑全景
	3	1区南11号溝全景		3	3区43号土坑全景
	4	1区南16号溝全景		4	3区44号土坑全景
PL. 12	1	1区北1号島北部全景		5	3区45号土坑全景
	2	1区北1号島南部全景		6	3区46号土坑全景
	3	1区南2号島東部全景		7	3区47号土坑全景
	4	1区南2号島西部全景		8	3区48号土坑全景
	5	1区作業風景	PL. 22	1	3区49号土坑全景
PL. 13	1	2区航空写真		2	3区50号土坑全景
	2	2区52号土坑全景		3	3区51号土坑全景
	3	2区53号土坑全景		4	3区19・20号ピット全景
	4	2区54号土坑全景		5	3区25号ピット全景
	5	2区55号土坑全景		6	3区17号溝礫出土状況
PL. 14	1	2区56号土坑全景		7	3区17号溝全景
	2	2区57号土坑全景	PL. 23	1	3区18号溝全景
	3	2区58号土坑全景		2	3区18号溝南端部全景、土層断面
	4	2区59号土坑全景		3	3区作業風景
	5	2区60号土坑全景		4	3区耕作痕B群全景
	6	2区38号ピット土層断面	PL. 24		出土遺物
	7	2区39号ピット土層断面			
	8	2区40号ピット土層断面			

第1章 宮貝戸遺跡の発掘調査とその経過

なお、上信自動車道は設計速度60～80kmの交流促進型路線であり、高速交通網空白地帯の解消、交通渋滞の緩和、災害時の安全安心確保と、救急医療、観光振興、産業界への貢献が期待されている。

本県において上信自動車道は、渋川市の国道17号と接続する渋川伊香保インターチェンジ接続地点から、吾妻郡長野原町の国道145・292号の交差点である大津交差点までが既に事業化されており、東から渋川西バイパス、金井バイパス、川島バイパス、祖母島箱島バイパス、吾妻東バイパス、吾妻西バイパス、ハッ場バイパス、長野原バイパスの8バイパスの建設が計画、進捗しており、このうち渋川西バイパス、ハッ場バイパス、長野原バイパスが既に供用に附されている。

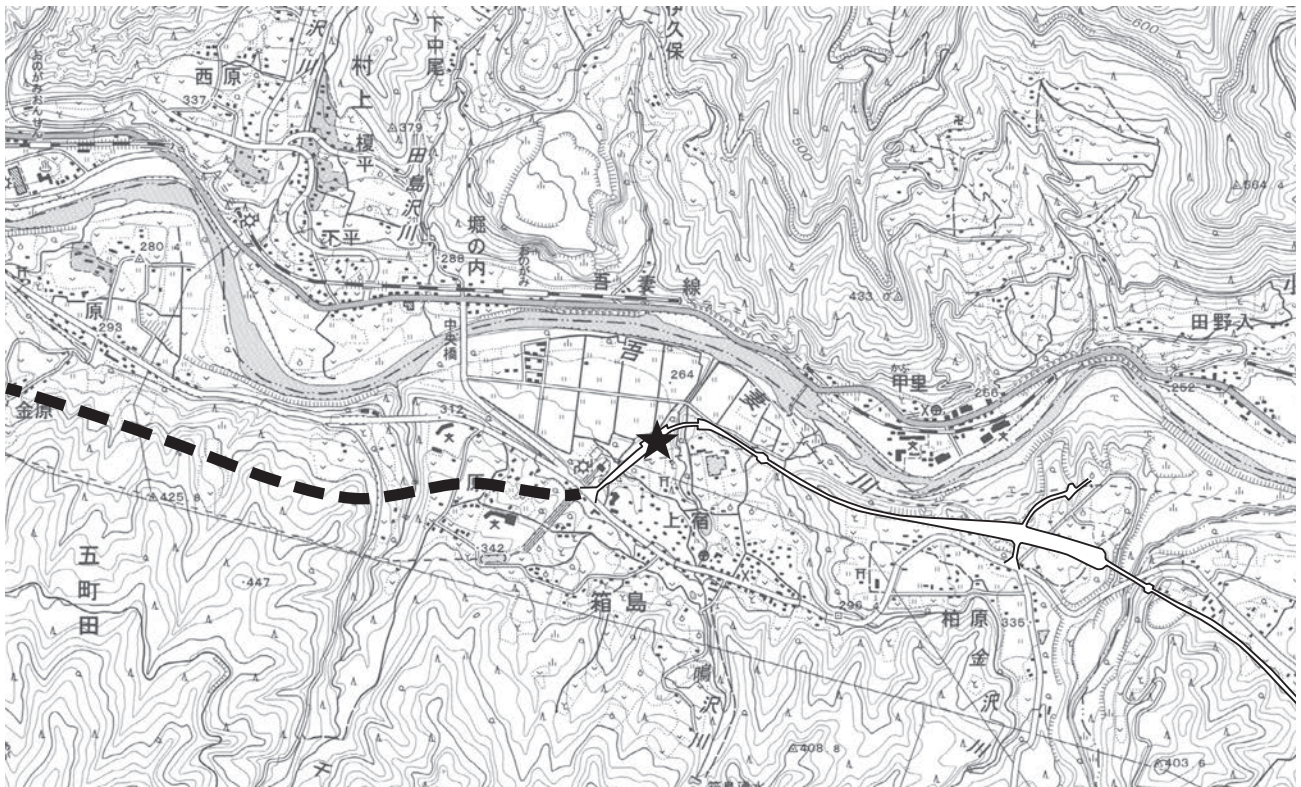
なおその走向経路は、渋川インターチェンジを起点として、同インターチェンジ北側の国道17号の中村交差点を西折して国土交通省が管理する渋川西バイパス(渋川市の環状線)で渋川市の旧市街地の南西側を迂回し、県道35号渋川東吾妻線に並走して渋川市街地の西側を迂回しつつ金井バイパスで北上し、川島バイパス、祖母島箱島バイパス、吾妻東バイパスの中ほどまでを県道35号線、吾妻東バイパス中ほどから吾妻西バイパスの中ほどまで

を国道145号に並走して吾妻川右岸を走行し、吾妻郡東吾妻町根小屋で吾妻川を渡河し、国道145号沿いに北接するハッ場バイパス途中の吾妻郡長野原町林で再び渡河するまでは吾妻川左岸を走行し、以西は吾妻川右岸を走り、ハッ場バイパスの終点付近で再び吾妻川を渡河して草津へ向かう国道292号と分岐する大津交差点に至る。なお、以西の区間は、本稿執筆時点では調査区間であり、バイパス路線は確定していない。

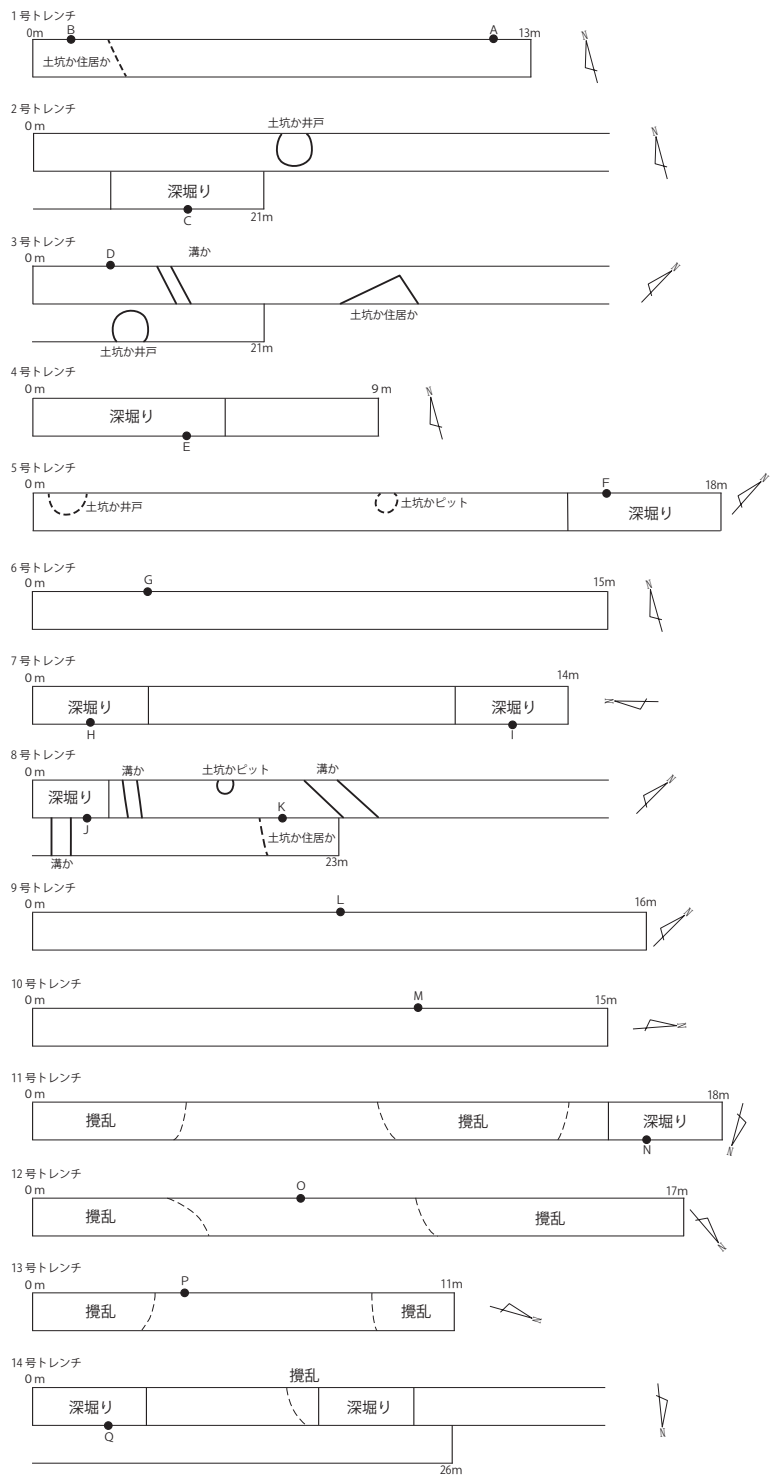
さて、本遺跡の所在する祖母島箱島バイパスは、国道353号のバイパス道路であり、渋川市祖母島から東吾妻町大字箱島間の延長約2.0kmの路線である。吾妻川左岸を走行する国道353号(通称「日向道」)や吾妻川右岸をこ

〔参考文献〕

- 愛媛県土木部道路都市局道路建設課(2000)『広域道路整備基本計画と地域高規格道路』
- 群馬県<<http://www.pref.gunma.jp/contents/000251933.pdf>>2016年12月20日参照
- 群馬県<<http://www.pref.gunma.jp/contents/000253245.pdf>>2017年3月23日参照
- 群馬県<<http://www.pref.gunma.jp/contents/000253246.pdf>>2017年3月23日参照
- 群馬県<<http://www.pref.gunma.jp/contents/000253248.pdf>>2017年3月23日参照
- 群馬県県土整備部道路整備課(2015)「事業概要紹介 群馬がはばたくための7つの交通軸構想」『用地ジャーナル』23巻10号、pp25-30
- 道路法令研究会(2016)『道路法令総覧 平成29年版』、pp491-492



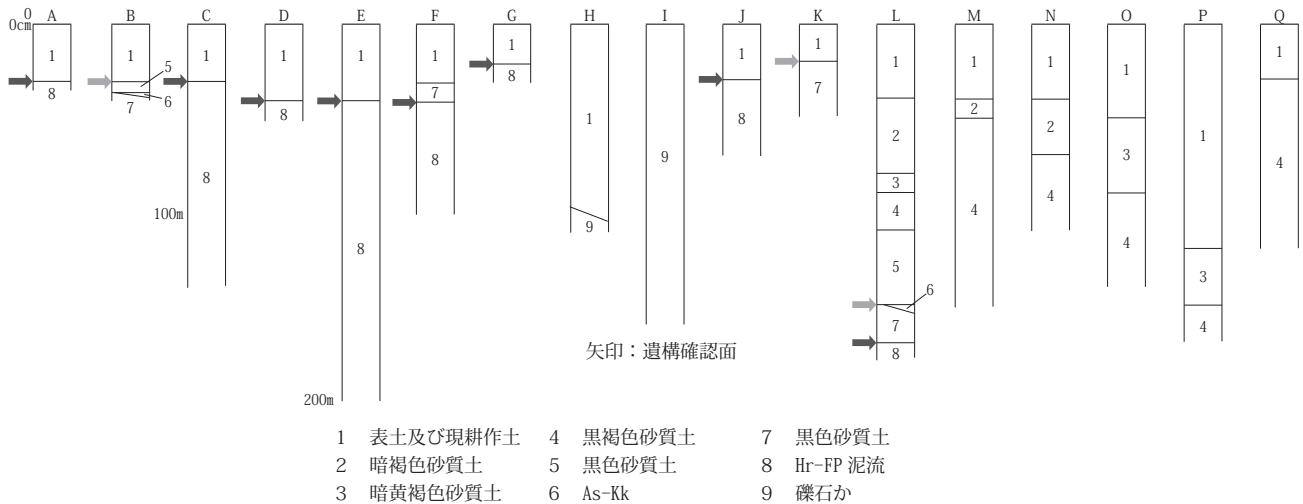
第2図 宮貝戸遺跡位置図(国土地理院2.5万分の1地形図「金井」平成21年5月1日発行を使用)



第3図の1 上信自動車道祖母島箱島バイパス箱島地域の試掘調査

れに並走する県道35号線(通称「日陰道」)の当該区間は、カーブが連続し、冬季の路面凍結による速度低下や斜面崩落が発生することから、これらの解消も検討されてい

る。本路線は2車線、設計速度60kmの道路として計画されており、事業期間は平成19年度から同31年度の予定である。



第3図の2 上信自動車道祖母島箱島バイパス箱島地域の試掘調査

2. 試掘調査

中之条土木事務所(以下「中之条土木」とする)は、上信自動車道祖母島箱島バイパス(以下「祖母島箱島バイパス」とする)の事業実施に当たり、平成28年10月27日、建設事業予定地に対する埋蔵文化財の確認のための試掘調査の実施を群馬県教育委員会文化財保護課(以下「県保護課」とする)に依頼した。県保護課は、本遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地ではないものの、中世の遺跡として周知される茅貝戸遺跡(東吾妻町遺跡番号0122)の北側に近接して立地することから、試掘、確認調査を実施することとし、同調査を平成28年11月16・17日にこれを実施した。

試掘調査は、事業対象地に、14箇所のトレンチを設定して掘削する方法で実施された。このうち、1・2・3・5・8号トレンチでは土坑や溝の遺存が確認され、9号トレンチでは畠等の存在が想定されるAs-Kkの堆積が認められた。また、6・7号トレンチは共に南隣接地より1メートル近く低いものの、6号トレンチではHr-FP泥流層の上面を削平していることが確認された。

これらの調査所見に基づき県保護課は、県道35号に北摂する南西部を除く、中・北部の区域を遺跡地として認定し、本調査が必要であるという見解を得て、その旨を中之条土木に回答している。

また、平成28年11月21日付で、東吾妻町教育委員会から埋蔵文化財包蔵地の新規申請がなされ、同日付で埋蔵文化財包蔵地変更されている。

3. 発掘調査に至る経過

さて平成28年度、当事業団(以下「事業団」とする)が担当して中之条土木事務所管内では、上信自動車道のうち吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が着手されていた。そうした中、平成28(2016)年11月21日に群馬県県土整備部と県保護課の打ち合わせが行なわれ、土木整備部側より祖母島箱島バイパスの一部である本遺跡地内への構造物の設置工事計画が提示され、平成29年1月20日を希望調査完了日とする、最優先での発掘調査の実施要請がなされた。また、同月24日には当事業団への協議も行われ、本遺跡の発掘調査を、吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財の調査に取り込んで実施することが決定した。

当初事業団では、厳冬期の発掘調査を避けるため、12月中の調査を検討したが、調査体制を整えるに時間を要したことなどから、結果的に平成29年1月の発掘事業実施の運びとなった。

なお、平成29年5月17日、当事業団による平成29年度の当遺跡の発掘調査の実施が県保護課により調整され、同月24日に上信自動車道建設事務所より発掘調査の依頼があり、同月26日中之条土木と事業団の間で契約がなされ、同年7・8月の当事業団による発掘調査の実施が決定されたのである。

第2節 発掘調査の経過

事業団による発掘調査は、平成29(2017)年1月と同年7・8月に実施した。以下に、その概要を記すこととする。

平成29(2017)年1月(1区)

- 5日 重機搬入。表土の掘削着工。遺構の確認作業着手。
- 6日 基本土層1・2の写真撮影。
- 10日 1・2号土坑より掘削開始。遺構測量、遺構写真撮影着手。
- 12日 1～10号溝掘削開始。断面図作成、断面写真撮影着手。
- 16日 重機搬入。除雪作業実施。
- 17日 各土坑、ピット、畠の掘削開始。断面図作成、断面写真撮影着手。
- 18日 11・16号溝掘削開始。断面図作成、断面写真撮影。各ピット断面図作成、断面写真撮影完了。
- 19日 12～15号溝断面図作成、断面写真撮影。各土坑の断面図作成、断面写真撮影完了。
- 20日 2号縦穴建物断面図作成、断面写真撮影。空中写真撮影実施。
- 21日 2号縦穴建物竈断面図作成、断面写真撮影。縦穴建物内ピット着手。
- 23日 2号縦穴建物、各土坑、ピット、溝、畠の遺構全景写真撮影開始。
- 24日 2号縦穴建物竈掘方断面図作成、断面写真撮影。各遺構の全景写真撮影完了。
- 26日 2号縦穴建物の最終遺構全景写真撮影。埋没谷1の調査完了。重機搬入。埋戻し着工。
- 30日 仮設関連片付け作業全て完了。調査終了。

平成29(2017)年6月

- 23日 重機にて事務所敷地等の整地着工。
- 24日 事務所敷地等の整地完了

7月(2・3区)

- 3日 重機搬入。3区西側より表土の掘削着工。遺構の確認作業着手。調査範囲安全柵設置。
- 6日 1号縦穴状遺構、1号掘立柱建物、36号土坑などより掘削開始。3区東側重機による表土掘削開始。

- 7日 3区東側の遺構の確認作業着手。2号掘立柱建物・37号土坑の掘削開始。
- 10日 1号縦穴状遺構、1・2号掘立柱建物、36・37号土坑、16～29号ピットの全景写真撮影。同遺構調査完了。
- 11日 38・39号土坑、34～38号ピット全景写真撮影。同遺構調査完了。
- 12日 3区中央部重機による表土掘削開始。遺構の確認作業着手。
- 13日 17号溝の掘削開始。40・41号土坑全景写真撮影。同遺構調査完了。
- 14日 17号溝の全景写真撮影。同遺構調査完了。
- 18日 2号縦穴状遺構、42～51号土坑掘削開始。(2区)の調査区設定。重機による表土掘削開始。遺構の確認作業着手。
- 19日 42～51号土坑全景写真撮影。同遺構調査完了。18号溝の掘削開始。
- 20日 2号縦穴状遺構、18号溝全景写真撮影。同遺構調査完了。3区の調査終了。19号溝掘削開始。重機による掘削終了。重機搬出。
- 21日 19号溝断面図作成着手。
- 31日 2区で確認された土坑、ピットの掘削開始。

8月(2区)

- 1日 52～56号土坑全景写真撮影。同遺構調査完了。
- 2日 38～40号ピット全景写真撮影。同遺構調査完了。
- 3日 59・60号土坑全景写真撮影。同遺構調査完了。
- 7日 台風の接近予報対策として調査区内・外の安全確認と各所養生実施。
- 9日 57・58号土坑の全景写真撮影。同遺構調査完了。
- 10日 夏季(盆)休み期間中の安全対策として調査区内・外の安全確認と各所養生実施。
- 21日 (2区)空中写真撮影実施の為の、調査区清掃及び遺構マーキング作業実施。
- 22日 19号溝の全景写真撮影。ドローンによる2区空中写真撮影実施。2区調査終了。
- 24日 重機搬入。2区より埋戻し開始。
- 30日 埋戻し、整地完了。重機搬出。仮設施設の片付け全て完了。調査終了。

第3節 発掘調査の方法

1. 調査区の設定

本報告書では、調査区を道路で区画される3区画に区分し(第4図)、北側より1区北、1区南、2区、3区と呼称して報告する。

但し1区と2区の東部と北部を調査した平成28年度調査では、全調査域を1区として、1区を1区北、2区を1区南と表記したものや、1区南を2区とするものがあり、平成29年度は2区南西部を2区、3区を3区として調査するなど多少の混乱が見られた。そこで、両年度の調査区の整合を図るに当たり、28年度の1区南と29年度の2区に重複部分があることも勘案して、上述のような調査区としたことを付記しておく。

2. グリッドの設定

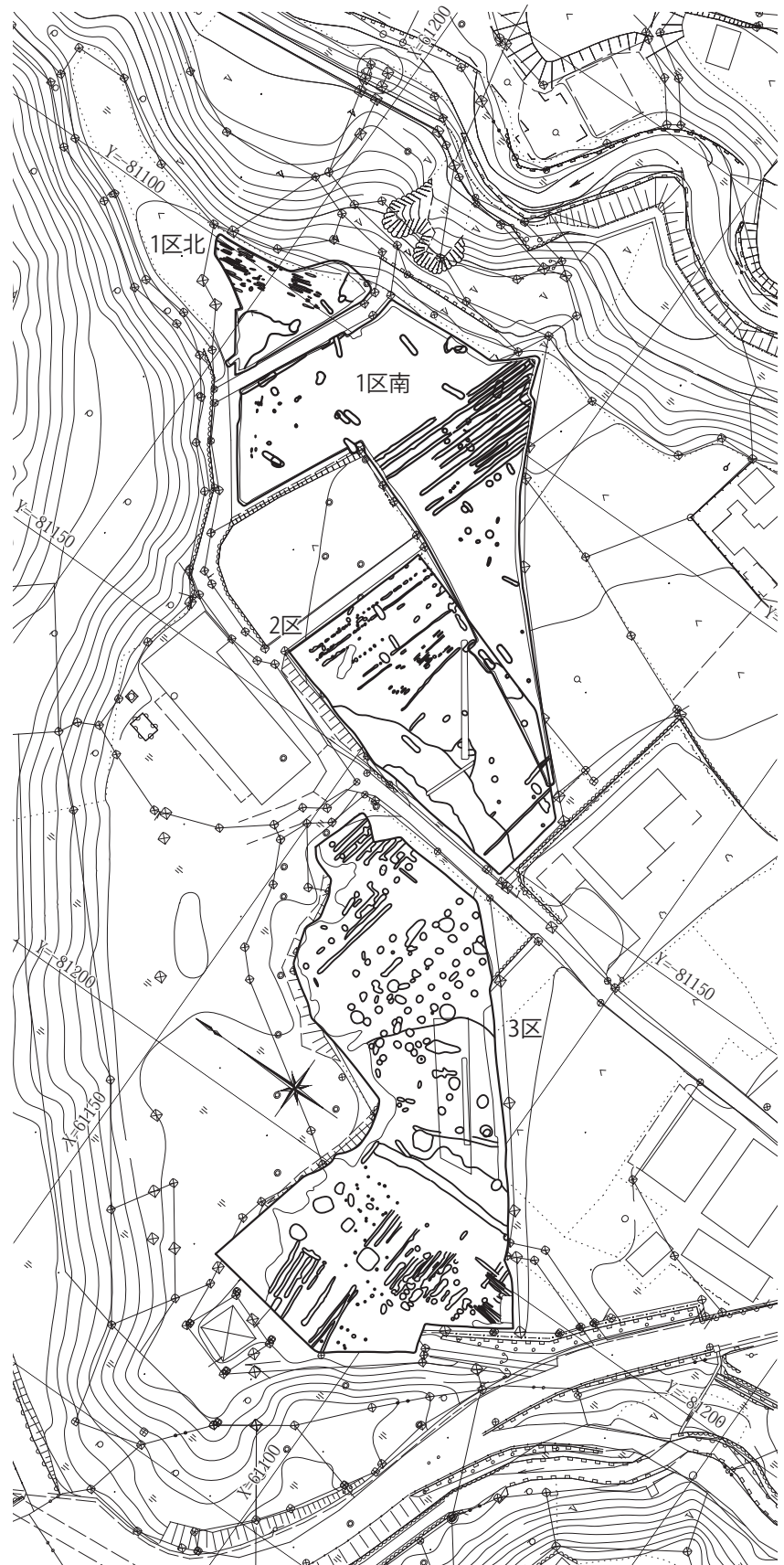
本遺跡の発掘調査では、グリッドの設定は行わなかったが、測量は世界測地系国家座標(座標第IX系)に基づいて行い、図化した。

3. 発掘調査の方法

本遺跡の発掘調査は、表土は土木機械(バックホー)を用いて掘削、除去した。その後、人力にて遺構確認面を精査し、遺構確認した後、個々の遺構等の調査を行った。

また、遺構は土層断面が観察できるようにベルトを設定し、あるいは半裁しながら掘削し、下記のように適宜記録化を実施した。

出土遺物は、一部出土状態を図化、記録し、全ての出土遺物について出土位置と取り上げ日等を記した荷札等



第4図 調査区と国家座標軸(S = 1/1000)

を付した。

最後に調査区の埋め戻しを行った。

4. 発掘調査の記録

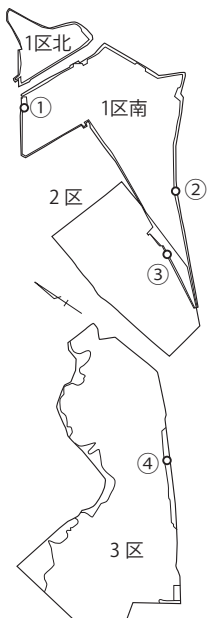
発掘調査は記録保存を目的とし、その記録として測量図面の作成、写真撮影及び一部調査所見を作成した。

図面は調査区、遺構、基本土層について、適宜平面図と断面図を作成した。平面図は電子平板によるデジタル測量を委託し、個別遺構は1/10~1/40の個別平面図の紙出力図を作成した。断面図も同様に平面図に対応する縮尺で測量を委託し、土層記録を調査担当者が注記し

た。なお、アナログ作成の断面実測図等は、デジタルトレースを委託して、デジタル化した。また、土層の色調は個人差の補正を目的として、土色帳(凡例9)を極力使用した。

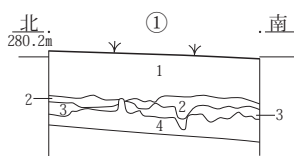
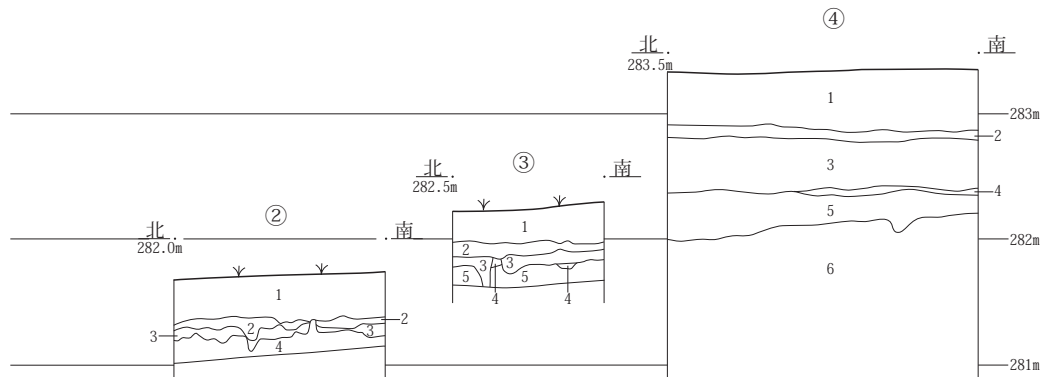
遺構等の記録写真は航空写真を除き、35mm版デジタルカメラとモノクロフィルムを用いて撮影した。デジタル写真はRAWデータで記録し、モノクロフィルムは120タイプを利用して、6×7サイズで記録した。また、委託して航空写真を撮影した。

第4節 基本土層



本遺跡での自然堆積状況は地点により異なる。しかし、榛名山火砕流堆積層を基盤としており、総じて右に示したような基本土層を示すことができる。

- I 暗灰黄色土 表土、現耕作土
- II 黒褐色砂質土
- III 浅間粕川テフラ(As-Kk) 大治3(1128)年噴出
- IV 黒褐色砂質土
- V 黄褐色砂礫層土 榛名山火砕流堆積物。6世紀前半



- ① 1 暗灰黄色土 (2.5YR4/2) 表土。
- 2 黒褐色砂質土 (10YR3/2) 小礫や白色小粒子(軽石か) 見る。
- 3 黒色土 (2.5Y2/1) 小礫混じる。褐色粒子少し。As-Kk 目立つ。
- 4 暗灰黄色砂質土 (2.5YR4/2) 3~5の漸移層。
- 5 浅黄色砂 (2.5Y7/3) 榛名二ツ岳火砕流堆積層。
- ② 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 褐色粒子等僅かに入。やや粗い砂入る。
- 2 黒色土 (2.5Y2/1) 小礫等入り、部分的に As-Kk 多く混入。
- 3 黒褐色土 (2.5Y3/1) 褐色白色粒子(軽石) 見る。小礫目立つ。
- 4 黄褐色からにぶい黄色砂 (2.5Y5/3-6/4) 榛名二ツ岳火砕流堆積層。大小礫多量に含む。粘土状の部分もあり。

- ③ 1 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) 表土。白色粒少し、小礫や砂粒多し。
- 2 黒褐色砂質土 (2.5YR3/2) 砂粒多く含み、褐色粒子少し。
- 3 暗褐色砂質土 (10YR3/3) 橙色・白色・褐色粒子目立つ。にぶい黄色砂ブロック状に入る。
- 4 褐色砂質土 (10YR4/4) にぶい黄色砂 (2.5Y6/3) 目立つ。にぶい黄色砂ブロック状に入る
- 5 にぶい黄色砂 (2.5Y6/3) 榛名二ツ岳火砕流堆積層の一部。細粒で砂状だが部分的にシルト状や粘土状。
- ④ 1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 砂質。軽石(浅間) 多く、締りなし。
- 2 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/2) 軽石含。一部純堆積。締りなし。
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) 軽石 (As-B) 多く含む。
- 4 灰褐色粕川軽石層 (10YR5/2、As-Kk) 灰層なし。
- 5 黒褐色土 (10YR2/2) 砂質性あり。小礫若干含む。
- 6 黄褐色砂礫層 (10YR5/6) Hr-FP 泥流~ Hr-FA火砕流。数メートル堆積。下位に径50cmを超えるもの含む礫層あり。

第5図 基本土層観察位置と土層断面(位置図: S = 1/2000 断面図: S = 1/60)

第2章 宮貝戸遺跡を廻る環境

第1節 地理的・地質的環境

1. 地理的環境

本遺跡は群馬県中西部、関東平野の北西隅部の渋川市街地の北西11km余りに位置する。本遺跡付近は、共に火

山である榛名山と小野子山がそれぞれ南側と北側から迫り、両山の裾野に接するところに、利根川支流の一級河川吾妻川がほぼ東方向に流下しており、本遺跡はその左岸段丘上に立地している。

河川は吾妻郡を東西に横断する吾妻川が、蛇行しながら



第6図 宮貝戸遺跡周辺地質図(国土地理院2.5万分の1地形図「金井」平成21年5月1日発行を使用)

ら東流するが、この川は白根山系の酸性質河川の流入による酸性河川として知られるため、上流部の水質改善がなされる以前は魚類の生息が見られなかったと言われている。この吾妻川に、南の榛名山頂のカルデラ湖である榛名湖を水源に流下する沼尾川(第6図右下)が流入する。この他、吾妻川へは北の小野子山麓、南の榛名山麓の溪間より湧き出る溪流が流入するが、第6図の範囲では吾妻川左岸の川下から田野沢、濁沢、不動沢、寺沢、田島沢川、鑷(けぬき)沢川、右岸では川下から金沢川、鳴沢川、千沢川が注がれている。

第6図に図示した範囲の行政区分は、本遺跡を含む吾妻川右岸(南側、第6図下半)は吾妻郡東吾妻町(旧吾妻郡東村)であり、その東端部の沼尾川以東は渋川市である。一方、吾妻川左岸(第6図上半分)は渋川市(旧北群馬郡小野上村)である。付近は榛名山や小野子山が迫り出して、平坦地や緩傾斜地は、およそ吾妻川流域の河岸段丘面や鑷沢川流域の扇状地のような形状の地形などに限られ、集落や農地も平坦地やその隣接地に集まる傾向がある。主たる産業は農林業であるが、工場等も散見される。

吾妻川の北側には国道353号、南側には県道35号渋川東吾妻線(通称「日蔭道」)が、吾妻川に沿いに並走し、東の渋川と西の中之条、原町(東吾妻町)を結んでいる。また、国道353号に沿って、単線のJ R 吾妻線(昭和20年開業)が走り、本遺跡の対岸西寄りに小野上駅が設けられている。国道353号と県道35号線をつないで吾妻川を渡河する橋梁は多くなく、本遺跡付近で吾妻川を渡河する橋梁は中央橋のみである。

2. 地質的環境

新生代第三紀中新世において、本遺跡付近は東京湾から日本海に続く海洋の一角にあり、その名残として渋川市北西部の谷後(やご)の集落の西側に、軽石凝灰岩及び凝灰質砂岩からなり、海棲貝化石も算出する中期中新世の谷後層(Yg)が見られる。

その後土地は隆起して陸地となるが、新生代第四紀更新世の前期には、吾妻川左岸側で、凝灰角礫岩、砂岩、泥岩からなる小野上層(0n)の形成が確認される。また中期に至って吾妻川左岸に小野子山が誕生したことが、か

らん石含有普通輝石紫蘇輝石安山岩溶岩及び火砕物からなる成層火山噴出物(0n1)、普通輝石紫蘇輝石安山岩からなる山頂溶岩(0n2)により確認されている。また、同じころに本遺跡の南側でも紫蘇輝石普通輝石安山岩溶岩、火砕物からなる榛名山第1期噴出物(Hr1)の噴出により榛名山が誕生している。後期になると、吾妻川右岸に、本遺跡の乗る上部ローム堆積段丘面である、礫、砂、粘土からなる中之条面(NK)が形成される。

その後、第四紀後期更新世から完新世にかけて、吾妻川沿い同川右岸に沖積層(A)の形成が確認されている。

また榛名山東寄りで、A.D. 6世紀初頭と前半期の榛名山二ツ岳の噴火に伴い噴出した軽石、火山岩、火山灰からなる二ツ岳火砕流の堆積が見られる。また吾妻川の曲流帯(Meander belt)において、第6図中では吾妻川左岸部では下流側より上宿、原で、右岸部では下流側より中小野子、甲里、共栄、塩川で河岸段丘が見られる。本遺跡付近の河岸段丘は、第1段丘面が上宿の段丘であり、第2段丘面は中之条面である。

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺は山地が多くを占めており、平坦地や緩斜面地が少ない。このため遺物採集ができた区域も限定的で、発掘調査された遺跡も少ない。従って、周知の遺跡分布も、吾妻川沿いの段丘上や、その支流である小河川沿いの緩傾斜地、即ち集落や耕地付近にはほぼ限定されている。また、吾妻川左岸部(北側)が小野子山南麓に当たるのに対し、右岸部は榛名山北麓に当たり、日照の影響か、付近の遺跡分布も左岸部の方に濃い。

なお、本遺跡周辺において、旧石器遺跡は確認されていない。従って以下に縄文時代以降の歴史的概要を記すこととする。

1. 縄文時代

本遺跡付近(第7図)に於ける縄文時代の遺跡は、広く分布しているが、右岸部では僅かである。

草創期と早期の遺跡は第7図の範囲では確認されていないが、東方の旧小野上村東端部で、八木沢清水遺跡と藤田柿平遺跡が確認されている。八木沢清水遺跡では草創期の竪穴建物が確認されている。

前期の遺跡には、吾妻川左岸部で谷ノ口上手遺跡(15)、谷ノ口下遺跡(19)、西原上遺跡(24)、榎平遺跡(40)、伊久保遺跡(43)が分布しており、黒浜式、関山式、諸磯B式土器などの出土が見られた。右岸部では東寄りの渋川市分で堀込遺跡(13)が確認されているに過ぎず、同遺跡からは黒浜式、関山式土器の出土が見られた。

当遺跡付近の中・後期の遺跡は吾妻川左岸に西原下遺跡(27)と榎平遺跡(40)があり、中期勝坂式、焼町式、加曾利E式、後期称名寺式土器の出土を見た。右岸部での遺跡の確認はなかった。

また、本遺跡付近での縄文時代晩期の遺跡は確認されなかった。

2. 弥生時代

第7図の範囲での弥生時代の遺跡の分布は少ない。また、その分布は吾妻川左岸の旧田島沢川沿いに限られ、下中尾北遺跡(36)と榎平遺跡(40)が確認されているに過ぎない。両遺跡は共に小規模だという。



第7図 宮貝戸遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院2.5万分の1地形図「金井」平成21年5月1日発行を使用)

3. 古墳時代

古墳時代の様相はつまびらかでないが、吾妻川の兩岸

で古墳が確認されている。その分布は段丘上や緩傾斜部に限られ、その数も第7図の範囲では、左岸部で2基に、

表1 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	市町村遺跡番号・総覧番号	所在地	時代								備考
				旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	
1	宮貝戸遺跡	東吾妻 0127	東吾妻町箱島宮貝戸					○	○	○		本遺跡
2	茅貝戸遺跡	東吾妻 0122	東吾妻町箱島茅貝戸							○		
3	寄居城跡	東吾妻 0110	東吾妻町箱島寄居							○		箱島城（寄居勘解由）
4	総覧東村12号墳	総覧 東吾妻85	東吾妻町箱島十二下				○					
5	総覧東村10号墳	総覧 東吾妻83	東吾妻町五町田十二下				○					
6	総覧東村11号墳	総覧 東吾妻84	東吾妻町箱島十二下				○					
7	五輪塚古墳	総覧 東吾妻69	東吾妻町箱島諏訪の久保				○					
8	葉師塚古墳	総覧 東吾妻70	東吾妻町箱島諏訪の久保				○					
9	総覧東村15号墳	総覧 東吾妻86	東吾妻町箱島鳴沢				○					
10	金原城跡	東吾妻 0109	東吾妻町五町田金原							○		白狐城（金原左衛門）
11	総覧東村9号墳	総覧 東吾妻82	東吾妻町町田十二ノ前				○					
12	岡崎根小屋城跡	東吾妻 0111	東吾妻町岡崎根小屋							○		柏原城、吾妻地衆金子美濃守前期集落
13	堀込遺跡	渋川 S 0039	渋川市祖母島堀込		○							
14	岡崎陣屋		東吾妻町岡崎屋敷								○	
15	谷ノ口上手遺跡	渋川 O0016	渋川市村上谷ノ口		○							
16	別当遺跡	渋川 O0056	渋川市村上谷ノ口		○							
17	御塚	渋川 O0006	渋川市村上谷ノ口									古墳
18	小野上1号墳	総覧 渋川547	渋川市村上谷ノ口				○					
19	谷ノ口下遺跡	渋川 O0017	渋川市村上谷ノ口		○							
20	石白上遺跡	渋川 O0018	渋川市村上石白		○							
21	石白中遺跡	渋川 O0019	渋川市村上石白		○				○			
22	石白下遺跡	渋川 O0020	渋川市村上石白		○							
23	東原上遺跡	渋川 O0021	渋川市村上東原		○				○			
24	西原上遺跡	渋川 O0011	渋川市村上西原		○				○	○		
25	西原岩岸遺跡	渋川 O0022	渋川市村上西原		○							
26	西原遺跡	渋川 O0008	渋川市村上西原							○	○	
27	西原下遺跡	渋川 O0003	渋川市村上西原		○				○			
28	東原中遺跡	渋川 O0023	渋川市村上東原						○			
29	鑷沢遺跡	渋川 O0024	渋川市村上東原		○							
30	鑷沢下遺跡	渋川 O0025	渋川市村上東原		○				○			
31	上中尾北遺跡	渋川 O0029	渋川市村上上中尾		○				○			
32	上中尾遺跡	渋川 O0028	渋川市村上上中尾						○			
33	程久保遺跡	渋川 O0027	渋川市村上程久保		○							
34	小野上2号墳	総覧 渋川548	渋川市村小野子				○					
35	中尾遺跡	渋川 O0030	渋川市村上上中尾		○				○			
36	下中尾北遺跡	渋川 O0031	渋川市村上上下中尾		○	○			○			
37	下中尾遺跡	渋川 O0032	渋川市村上上下中尾						○			
38	下中尾南遺跡	渋川 O0033	渋川市村上上下中尾						○			
39	榎平西遺跡	渋川 O0026	渋川市村上榎平		○							
40	榎平遺跡	渋川 O0004	渋川市村上榎平		○	○			○			
41	細田遺跡	渋川 O0035	渋川市小野子細田						○			
42	突尾根の砦	渋川 O0064	渋川市小野子細田							○		山田氏
43	伊久保遺跡	渋川 O0034	渋川市村上伊久保		○							
44	田の保屋敷	渋川 O0061	渋川市村上堀ノ内							○		
45	大平遺跡	渋川 O0036	渋川市小野子大平						○			
46	三田野遺跡	渋川 O0041	渋川市小野子三田野		○				○		○	
47	田野遺跡	渋川 O0037	渋川市小野子田野		○						○	
48	田野城	渋川 O0060	渋川市小野子城の腰							○		小野子の砦、平形氏
49	長福寺遺跡	渋川 O0038	渋川市小野子長福寺		○						○	
50	東落釜遺跡	渋川 O0040	渋川市小野子落釜		○							
51	椿原経塚	渋川 O0012	渋川市小野子								○	
52	長福寺田野入遺跡	渋川 O0039	渋川市小野子長福寺		○							
a	三国裏街道										○	

右岸部で7基に止まる。このうち吾妻川右岸部の古墳は綜覧東村9号墳(11)・10号墳(5)・11号墳(6)・12号墳(4)・15号墳(9)、五輪塚古墳(7)、薬師塚古墳(8)があり、箱島周辺の段丘上に分布しており、左岸部の古墳は小野上1号墳(18)、小野上2号墳(34)が確認されているが、共に鑷沢沿いの緩傾斜地の^{上流寄り}にある。確認できない五輪塚古墳と綜覧東村9号墳を除く古墳の墳形は全て円墳であり、その規模も、綜覧東村10号墳が25m、小野上1号墳が9mを測る以外は、記録のない五輪塚古墳、薬師塚古墳、綜覧9号墳を除く古墳ではいずれも5m以下と規模も小さい。

一方、古墳時代の集落の状況は不明である。

4. 奈良・平安時代

律令期に入ると郷(里)制が施行された、本遺跡付近では、吾妻川左岸と右岸の沼尾川以東が群馬郡、上記以外の吾妻川右岸は吾妻郡に属していたと想定されている。しかし本遺跡付近が、どの郷(里)は属したかはつまびらかではない。

また、集落遺跡は、吾妻川左岸地域では西寄りの田島沢川、鑷沢川流域を中心に、田島沢川流域で上中尾遺跡(32)、鑷沢川流域で石臼中遺跡(21)等の平安時代の遺跡分布が見られるが、右岸地域においては、本遺跡(1)で確認されるのみである。水田遺構等も現時点では確認されていない。

5. 中・近世

本遺跡付近は、恐らく中世の頃に、吾妻川左岸地域を北箱島、右岸地域を南箱島と呼称していた時期があり、両地域は交流も多かったという。鎌倉時代、『吾妻鏡』に吾妻に吾妻氏がおり、渋川には建暦3(1213)年の和田合戦で没落した渋川氏がいたことが知られているが、本遺跡付近の様相はつまびらかでない。室町時代に入ると、山内上杉氏の家宰あるいは上野守護代となった白井長尾氏が渋川市白井に入り、本遺跡付近も白井長尾氏の支配地域となっていたようである。江戸時代に入ると、白井藩領、前橋藩領、天領などが複雑に入っている。岡崎陣屋(14)は岡上氏の陣屋跡である。

また第7図には室町～戦国時代の城館が幾つか見られ

る。このうち寄居城(3)は箱島地衆の寄るところであるが、寄居の名から、長尾氏(山内上杉氏)との関係が窺われる。また、吾妻川右岸の岡崎根小屋城(12、別称「柏原城」)と左岸の田野城(48、別称「小野子の砦」)は共に東の白井長尾氏と西の吾妻氏(斎藤氏)にとっての境目の城である。一方、岡崎根小屋城は城域も広いが、永正6(1509)年の折、長尾景春が白井を追われた際に一時拠った城とみられている。

天明2(1782)年銘の碑書供養塔の下から一字一石経、多字一石経の礫石経が出土した椿原経塚(51)があるが、旧小野上村域からは小野子地区で2基、村上地区で1基礎の一字一石供養塔の建立が見られる。この他、吾妻川右岸の県道35号線に沿って、近世、三国裏街道(a)が東西に走行していた。またその渡河点は現時点では判然としないが、少なくとも近代には箱島と対岸の堀之内を結ぶ渡船が設置されていた。

〔参考文献〕

- 新井房夫監修『群馬県10万分の1地質図 1999』(1999)、群馬県地質図作成委員会、内外地図株式会社
- 小野上村誌編纂委員会『小野上村誌』(1978)
- 群馬県教育委員会『吾妻の諸街道』(1983)、pp87-105
- 群馬県教育委員会文化財保護課『群馬県の中世城館跡』(1991)
- 群馬県教育委員会文化財保護課『群馬県古墳総覧』(2017)
- 群馬県史編さん委員会『群馬県史 通史編1 原始古代1』(1990)
- 小林 修『渋川市の経塚とその出土遺物』(2007)、「渋川市赤城歴史資料館 紀要」第9集、pp41-58
- 渋川市教育委員会『渋川市小野上地区埋蔵文化財分布地図』(2011)、渋川市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
- 渋川市市誌編さん委員会『渋川市誌 第二巻 通史編・上 原始～近世』(1993)
- 萩原進監修『上野国郡村誌6 群馬郡(3)』(1985)、群馬県文化事業振興会
- 萩原進監修『上野国郡村誌11 吾妻郡』(1985)、群馬県文化事業振興会
- 山崎 一『群馬県古城址の研究 下巻』(1972)、群馬県文化事業振興会

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 本遺跡の調査概要

既に本遺跡の調査区は1章に、立地は2章に記載しており、各区の概要は第2節以降に述べ、記載内容が重複することになるが、本節では、遺跡の立地と調査区、および調査区全体の遺構の概要を記すこととする。

1. 遺跡の立地と調査区(第8図)

前章に記したように、本遺跡は吾妻川右岸の上位段丘面の中之条面上に立地し、西側から北側にかけて下位段丘面が広がり、その境には段丘崖が形成されている。本遺跡は、この段丘崖と東側は鳴沢川により開析された谷地形に挟まれた舌状台地状の地形上に在る。本遺跡の立地するこの地形は、北行に従い幅員が減ずる平面形態を成し、その先端部は尾根状を呈している。

本遺跡の調査区は北端尾根状部の南側に設定されている。調査区は上信自動車道の路線に沿って北東-南西方向に延び、その北西-南東方向の範囲は上信自動車道の路線幅に限られる。

さて繰り返しになるが、本遺跡の区の呼称は「1区北」「1区南」「2区」「3区」であるが、以下にその銘々の経緯を示す。本遺跡の調査は平成29年1月に着手したが、平成28年度調査は調査区の北東側を対象とした。このとき調査区全体の呼称を「1区」としたが「1区」は、区の北東寄りに北西-南東方向に道路が横断し、調査区を分割していたため、道路の北東側、調査区北東端を「1区北」とし、道路の南西側を「1区南」と呼称することとした。また、平成29年度調査では「1区南」の西側隣接部から南西

表2 宮貝戸遺跡遺構数量一覧

区	1区北	1区南	2区	3区	計
遺構					
竪穴建物		1			1
掘立柱建物				3	3
竪穴状遺構				2	2
土坑	3	33	9	16	61
ピット	2	16	3	10	31
溝		16(畑2)	1	2	19
畠	1	2(溝14)	2	6	11
谷	2	1			3

にかけての区域の調査を行ったが、この調査区域の北東寄りには南北に縦貫する道路があったため、その東側でかつ「1区南」の西側に隣接する調査区を「2区」とし、「2区」の西側に接し道路を挟んで位置する(南西側)調査区を「3区」と呼称することとした。

2. 調査した遺構(第8図)

本遺跡の各区の遺構については第2節以降に詳述するが、本節では調査区全体の遺構状態の概要を記す。

本遺跡で調査した遺構は、6世紀の榛名山の爆発に伴う火砕流で被覆した堆積層の上に形成されたものである。従ってその時期は6世紀以降の所産のものに限られるが、実態としては中世を中心とした律令期以降の所産のものであった。出土遺物は多くなかったが、おおむね遺構の時期に伴う遺物が出土している。しかし出土遺物の中には縄文時代の遺物も若干含まれていたが、これらは上記火砕流堆積以降の流入品である。

検出した遺構は、竪穴建物1棟、掘立柱建物3棟、竪穴状遺構2基、土坑61基、ピット31基、溝19条、畠11面、谷3箇所であった。このうち、溝19条のうちの14条は畠2面にも振り分けられるものである。

このうち、律令期の竪穴建物は調査区北東部(1区南)の東寄りに在り、中世の所産と判断される掘立柱建物と竪穴状遺構は調査区南西隅部(3区南部)に分布している。一方、土坑は調査区全体に広く分布しているが、ピットの分布は散見される状態に留まる。溝は1区南の北端部の1区北との境に在る道路に並行して在る1条と、1区南南端部の1条、2区に在って2・3区の境付近を走行する1条、3区中ほどの区画溝と思われる2条がある。これらを除く、1区南の中ほどに位置する溝群は、開削時の可能性も有する、重複する2面の畠に関連した遺構として判断されるものである。また、畠は1区南の北部を除く区域の広い範囲に分布している。このうち11面は、掘削深度の深浅はあるが通常のサク(溝)の掘削を伴うものであったが、残る2面は桑等の植栽が想定される坪掘りによるものであった。

第2節 1区の遺構と遺物

1. 1区の遺構(第9～29図、PL. 1～12・24)

本節では、平成28年度調査分の1区の遺構、遺物について報告する。後述のように1区は、「1区北」と「1区南」に分けていたが、本書では一括して報告することとする。

前節にも述べたように、本遺跡は東側が鳴沢川により開析され、また西側は吾妻川の下位段丘面との境の段丘崖で削られた、舌状台地状の土地に立地している。また繰り返しになるが、この土地のプランは、北に向かって狭まる形状を呈している。その先端部の形状は尾根状を呈しているが、1区はこの尾根状の土地のすぐ南に位置している。しかし、1区は道路を挟んで南北に分かれており、平成28年度の発掘調査では、北側を「1区北」、南側を「1区南」と呼称している。

さて、1区北では、その南端に東側から2号谷、西側から1号谷が湾入しており、その谷頭にはそれぞれ4号土坑と37号土坑が掘削されている。この1・2号谷の存在により、土地は南北に分けられている。また、4・37号土坑の間には、南側1区南に分布する土坑群に属する1号土坑が掘削されている。そして、谷の北側には1号畠が広がっており、その中には1・2号ピットが残されている。

一方、1区南では、中部北寄りに竪穴建物が1棟あり、その東には竪穴建物あるいは竪穴状遺構の可能性を有する土坑1基がある。これを含め、33基の土坑が点在するが、北部には短冊形のものが多く分布しており、中部では隅丸方形様のもので多く分布している。また、16基のピットが散在しているが、北西部に6基、中南部に7基、南部に3基がまとまってある。この他、16条の溝が分布するが、1区南の北端と南端に1条ずつあった。この他の14条は中部北寄りに集中して分布していたが、これらの溝群は2群の耕作痕と解釈される遺構群であった。

なお、1区南の中部西側に位置し、かつ後述の2区北側に位置する区画は、25×20mほどの範囲で大きく削平されており、調査対象外となっている。(6頁の第4図参照、14頁の第8図参照)

2. 2号竪穴建物(第10～12図、PL. 2・3・24)

概要 本建物は、竈付の竪穴建物である。調査時点では「2号住居」と呼称していた。なお、1号竪穴建物(1号住居)は埋没谷と確認されたため、その呼称は欠番となっていることを付記しておく。

位置 本建物は1区南の東部中ほどにあり、161～166-099～103グリッドに位置する。

重複 本建物は33号土坑と3・4・5号溝と重複するが、33号土坑との新旧関係は特定できなかったが、3～5号溝は本建物より新しい。

規模 長径：3.89m 短径：3.46m 深さ：0.48m

竈1 幅：0.62m 奥行き：1.33m

燃烧部 幅：0.63m 奥行：0.89m 深さ：0.04m

煙道 幅：0.17m 長さ：0.21m

奥壁高：0.36m

竈2 幅：0.92m 奥行き：1.25m

右袖 幅：0.22m 長さ：0.44m 高さ：0.34m

燃烧部 幅：0.81m 奥行：0.89m 深さ：0.05m

奥壁高：0.35m

ピット1 径：0.52×0.45m 深さ：0.05m

ピット2 径：0.63×0.63m 深さ：0.04m

ピット3 径：0.20×0.19m 深さ：0.10m

ピット4 径：0.11×0.11m 深さ：0.09m

ピット5 径：0.20×0.17m 深さ：0.08m

ピット6 径：0.18×0.11m 深さ：0.07m

埋没状況 黒褐色土や黄褐色土で埋没し、上位に粕川テフラ(As-Kk)が堆積する。いわゆる三角堆積層は黒褐色土で形成される。

構造 [竪穴]竪穴は横長方形プランを呈し、主軸方向はN81°Wを向く。

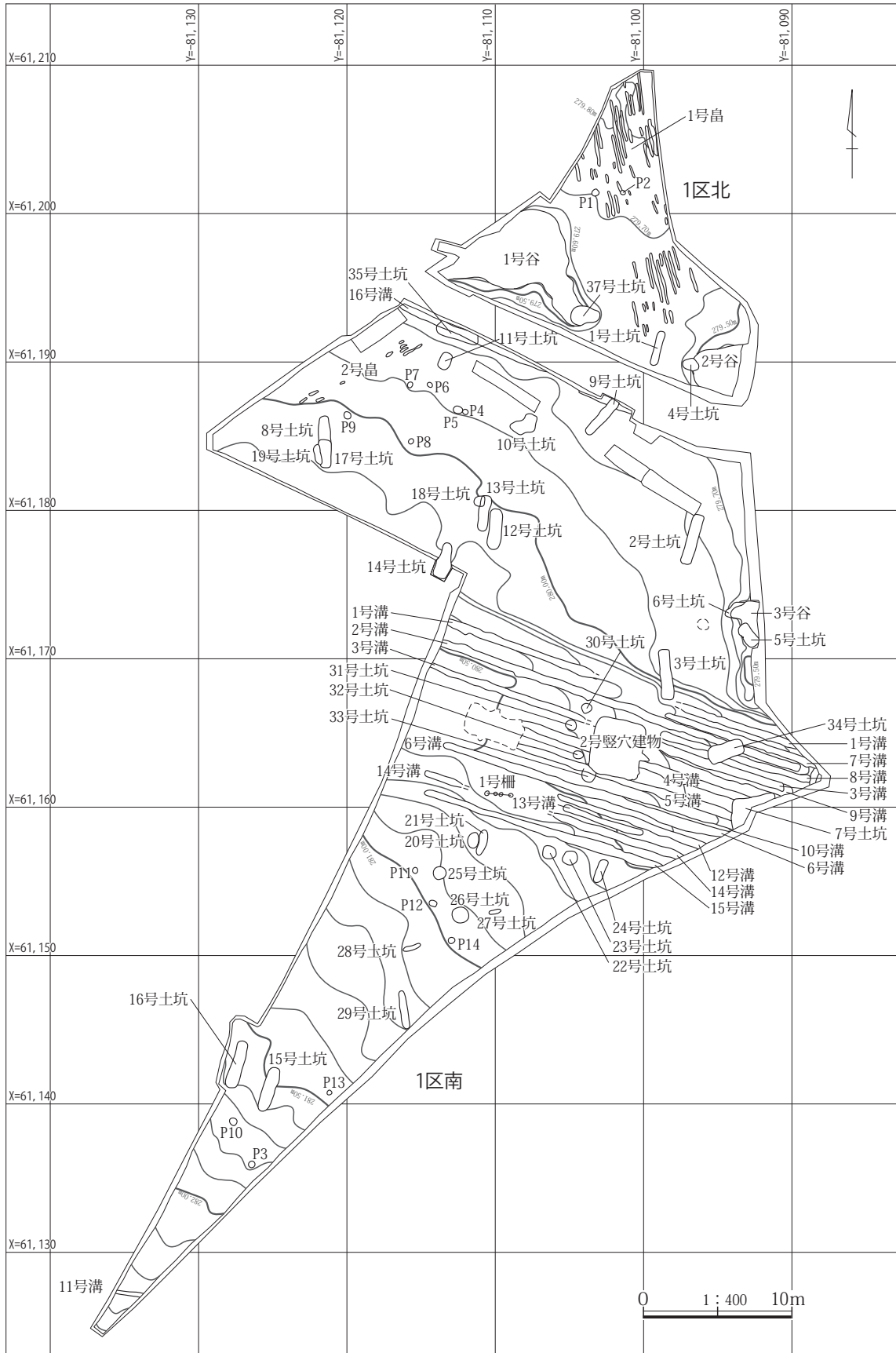
[掘り方]掘方は確認されなかった。いわゆる地床である。

[竈]竈は2基あり、東壁の中央やや南寄り(竈1)と東南隅(竈2)の2か所に設けられる。遺構の遺存状態から同時併存の可能性が考えられる。

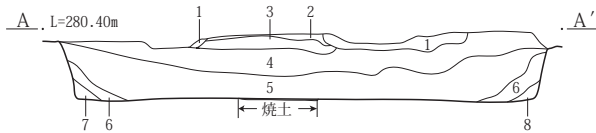
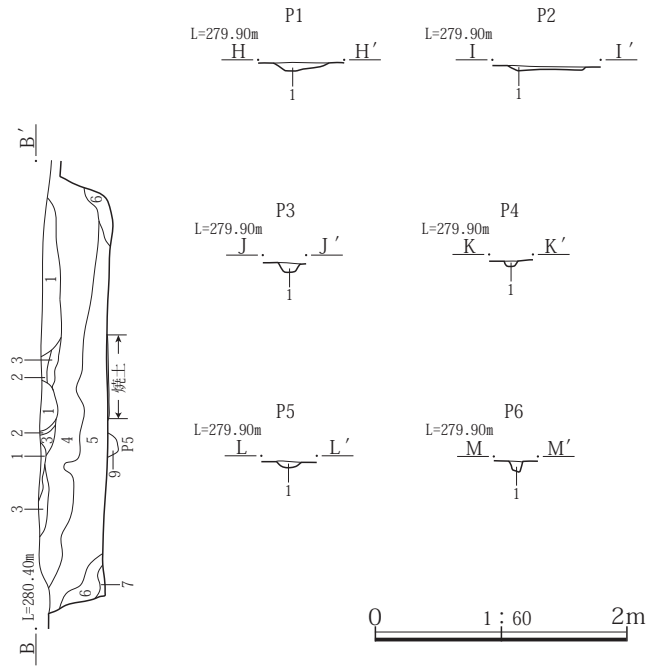
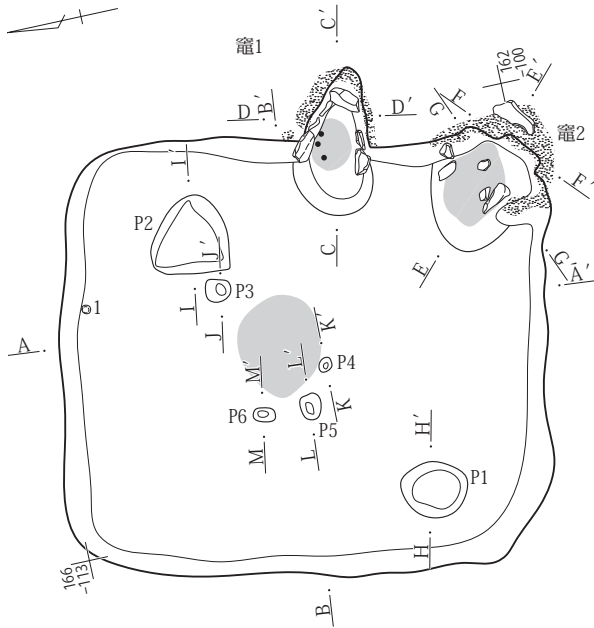
(竈1)主軸方位はN85°Wを向く。径0.74×1.22m、深さ0.10mの盾形プランを呈する浅い掘り込みを伴う掘り方を有する。

壁面をやや跨ぐ位置に、楕円形プランの浅い掘り込み

1区全体図

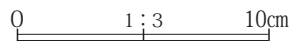
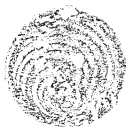
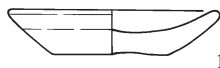


第9図 1区全体図



(2号竪穴建物)

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 黒褐色土に3層の軽石や2層の火山灰が多量に混じる。
- 2 灰色火山灰(7.5Y6/1) 青く見えるシルト状の火山灰。
- 3 灰白～淡黄色軽石(5Y8/2～8/4) As-Kk。径2～5mmほどの軽石が50mmほどの層になる部分もある。下部のやや黄色がかつて層はAs-B軽石かもしれないが、間層がないため不明。
- 4 黒褐色土(2.5Y3/2) にぶい黄色砂を多く混入し、部分的にブロック状を呈する。砂質。径3～5mmほどの白色軽石を含む(目立つ)。
- 5 黄褐色土(2.5Y5/3) 黄褐色(にぶい黄色)砂を非常に多く含む。砂質。褐色粒子が目立つ。褐色土がブロック状には入る。
- 6 黒褐色土(2.5Y3/1) 黒色土がブロック状に入る。にぶい黄色砂が多く混入し、部分的にブロック状を呈する。
- 7 黒褐色土(2.5Y3/2) 多量の細かい砂が入り、砂質。崩落した土か。
- 8 にぶい黄色砂(2.5Y6/4) 榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。壁面(掘り方)の砂。
- 9 黒褐色土(2.5Y3/2) 砂質。灰黄色砂が多量に混入し、部分的にブロック状を呈する。炭化物が少し混入。黒色土がブロック状に混入する部分も見られる。(P5)



第10図 1区南2号竪穴建物と出土遺物

(2号竪穴建物 P1)

- 1 暗褐色土(10YR3) 黄色砂を多量に含み、ブロック状のところもある。炭化物、褐色粒子が少し見られる。

(2号竪穴建物 P2)

- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 砂質。径3～6mmほどの小礫(軽石)を多く含む。にぶい黄色砂ブロックが少し見られる。

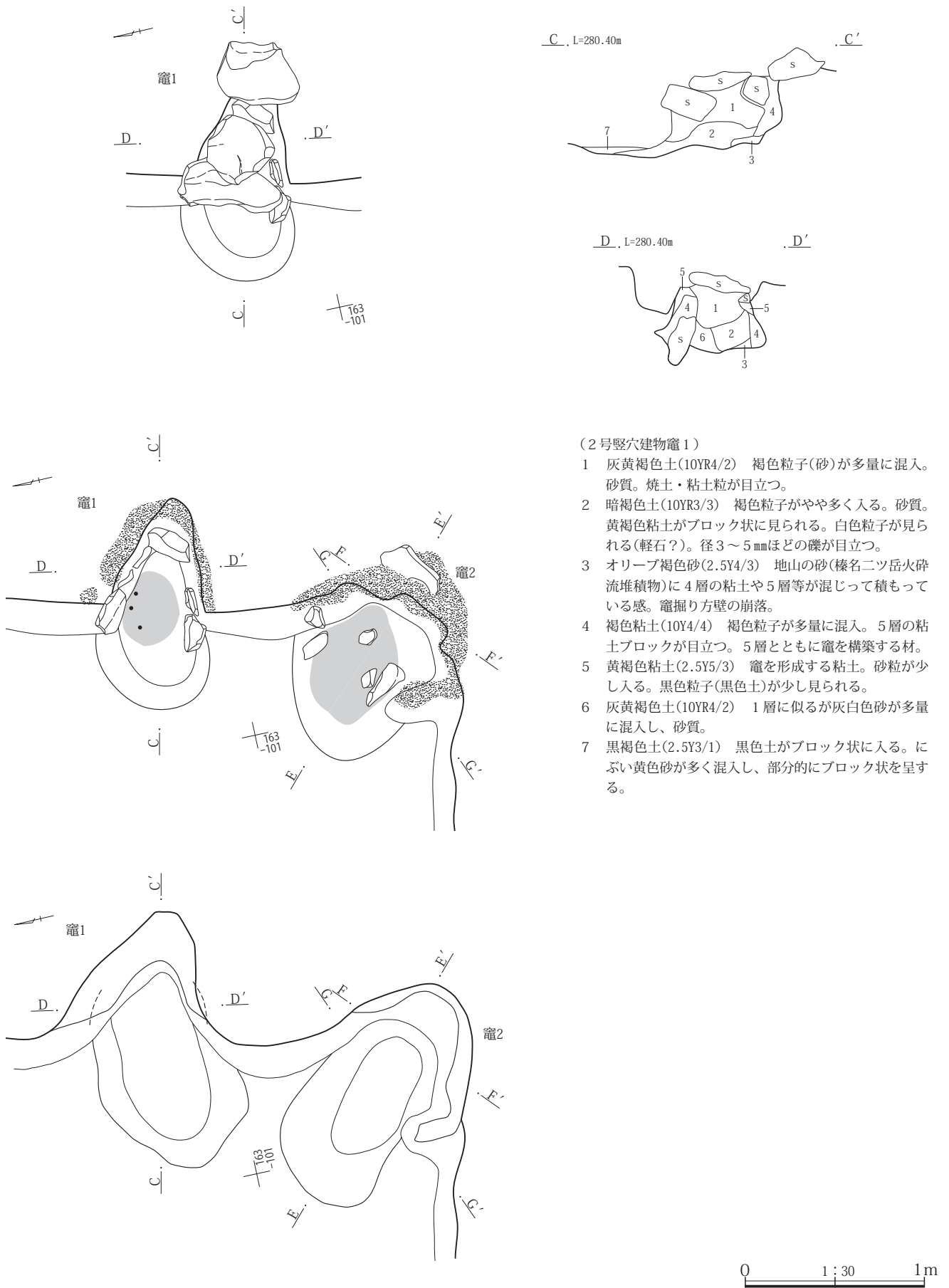
(2号竪穴建物 P3～P6)

- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 砂質。灰黄色砂が多量に混入し、部分的にブロック状を呈する。炭化物が少し混入。黒色土がブロック状に混入する部分も見られる。

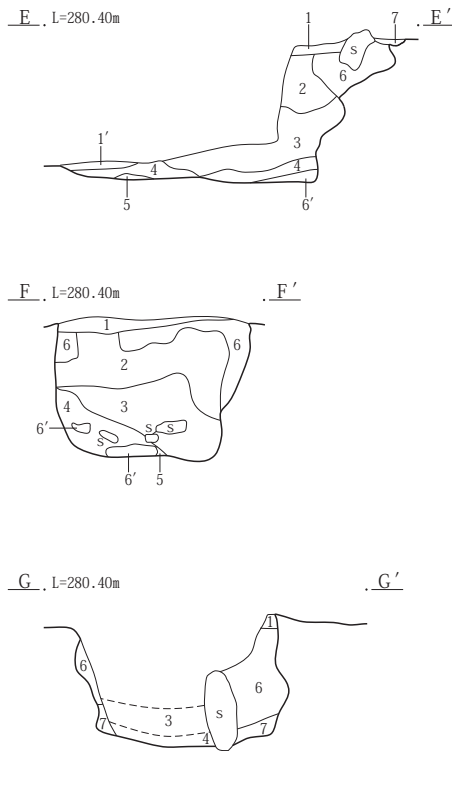
が掘削されており、壁面を跨ぐ位置に燃烧部が設けられている。

袖は壊されていたが、燃烧部の縁に、端部を下に、表裏面を燃烧部に向けてた河床礫を左側で3個、右側に2個縦列に立てて袖石とし、袖石の背面と上側には褐色あるいは黄褐色の粘土で袖が作られる。

手前側の袖石の上には、やや柱状の形態を呈する天井石を渡し、天井石の奥には表裏面を上下置いた平石を袖の上と煙道部に各1枚が置かれているが、この2枚の礫の間の直下に、燃烧部奥壁に接して柱状の礫が横位に渡されている。なお、これら3個の礫は、天井石のすぐ奥のものは竈の口を、また中間の礫は燃烧部と煙道部の境を閉塞しているため、元の位置からずれている可能性を考えたい。奥の平石は位置的に煙道部を、閉塞しているため、使用時の位置との相違の可能性が考えられるが、あるいは排煙はその上を通して行われた可能性も考慮される。



第11図 1区南2号竈穴建物竈と竈1土層断面



第12図 1区南2号竪穴建物竈2土層断面

(2号竪穴建物竈2)

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 白・黄・橙色粒子がわずかに混入。やや粗い砂が入る。表土。
- 1' 黄褐色土(2.5Y5/3) 黄褐色(にぶい黄色)砂を非常に多く含む。砂質。褐色粒子が目立つ。褐色土がブロック状に入る。埋土。
- 2 灰黄褐色砂(10YR4/2) 竈の埋土。粒子が粗い。褐色・灰白色・黄色粒子多量(軽石?)。
- 3 褐色土(7.5YR4/3) 粒子が細かい砂と径5~10mmほどの礫を多量に含む。褐色・橙色粒子多量(焼土・焼けた粘土)。砂質。
- 4 褐色土(10YR4/4) 橙・にぶい黄色の粘土ブロック多量。焼土(赤褐色5YR4/6)が混じる。褐色・橙色粒子目立つ。
- 5 黒色土(10YR2/1) 非常にうすい黒色層。炭化物か。
- 6 橙色(赤褐色)粘土(5YR6/6~4/8) 焼けている。天井の部分から落ちた粘土か。黒色土がブロック状に入る(粉末の炭化物?)。
- 6' 赤褐色土(5Y4/8) 崩落した天井部の粘土と考えられる。硬化。
- 7 暗褐色土(10YR3/3) 褐色粒子がやや多く入る。砂質。黄褐色粘土がブロック状に見られる。白色粒子が見られる(軽石?)。径3~5mmほどの礫が目立つ。

(竈2)主軸方位はN52°Wを向く。径0.65×1.07m、深さ0.10mの純丸長方形プランを呈する浅い掘り込みを伴う掘り方を有し、これを橙色やにぶい黄色の粘土を多く含む褐色土、黄褐色砂を多く含む黄褐色土で埋め戻して焼土面を作る。焼土部は住居南東隅の壁面の内側に設けられる。

本竈も袖はほぼ壊されていたが、焼土部の下場線上の左右両側に表裏面を焼土部に向け、端部を底面に接して河床礫の袖石が設置され、その背面に暗褐色土と赤褐色粘土で袖を形成している。

天井石等は残されていないが、壁面の奥、天井部分に板状の礫が渡されている。

煙道は、断面図から、2段の階段上であったことが確認される。

[柱穴・貯蔵穴]柱穴・貯蔵穴は明確に確認されていないが、浅い掘り込みのピットが6基確認されている。このうちピット1は楕円形、ピット2は純丸三角形のプランを呈するものであり、ピット1は位置的には貯蔵穴の可能性が考慮されるものの、いずれのピットも形態的に柱穴や貯蔵穴とは認め難い形状をしている。また、ピット

3~6は小型のもので、ピット3・4は隅丸方形、ピット5・6は楕円形のプランを呈するが、住居に掘り方がなく、掘削深度も浅いため、いずれも位置的に柱穴とは認め難いものである。

焼土痕跡 本建物の中央、ピット3~6に囲まれた範囲の床面に面的な焼土面が見られた。この焼土面は略円形プランを呈するものであった。

この焼土面については、炉の可能性も指摘できるものであるが、本建物が竈を伴うことから推して、炉である可能性は低いものと思慮される。むしろ焼失家屋の形成過程、すなわち焼成過程において生じた焼土面の可能性を考慮したい。

遺物 本建物からは、須恵器皿1点(1)の他は、僅かに土師器甕片4片が出土したに過ぎない。

所見 本建物の時期は、僅か一点の遺物である須恵器皿(1)からの所見ではあるが、11世紀の所産として把握されるものと思慮される。

ピットはいずれも浅く、本建物に伴うものであるか否かは特定できなかった。このうちピット3~6は、その配置から樹木の根の可能性も考慮されるが、その中に入

る焼土面の存在から、炉に伴う構造物の痕跡の可能性も考慮される。

また、建物中央の焼土面は、上述のように炉の可能性を有するが、本建物が焼失家屋であった可能性も示唆するものである。

3. 1号柵(第13図、PL.4)

概要 1号柵は一行に並ぶ、15(P1)・16(P2)・17(P3)・18(P4)号ピットで構成される。

位置 1号柵は1区南区域の中東部にあり、160～161-108～110グリッドに位置する。

規模・主軸方位 [規模]長さ：1.94m 幅：0.30m

柱(ピット)径：0.22～0.34m(平均：0.2725m)

深さ：0.05～0.10m(平均：0.075m)

柱間：0.35～0.72m(平均：0.5567m)

個々のピットの規模は表3に記した。

[主軸方位] N 6° E

個々のピットの規模主軸方位は表3に記した。

重複 本柵は単独であり、他の遺構との重複は見られなかった。

覆土 いずれのピットも小礫混じりの黒褐色砂質土で埋没する。

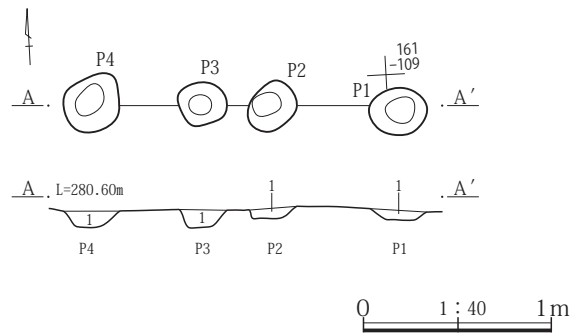
構造 4基のピットが比較的狭いスパンで、直列に掘削されている。

ピットのプランは15・16号ピットが楕円形、17・18号ピットが隅丸方形を呈している。

遺物 出土遺物は得られなかった。

所見 出土遺物もなく、1号柵の細かい時期の特定はできなかったが、ピットの規模から推して中世の所産の可能性はある。

また、本柵の設置意図は特定できなかったが、ピットが近接して掘削されていることから、垣根のような構造物の設置が想定され、掘削位置等から本遺跡の乗る、東西を沢と段丘崖で区画された段丘面を南北に仕切るために設置されたものと想定される。



第13図 1区南1号柵

1号柵(P1～P4)

1 黒褐色土(2.5Y3/2) 砂質。ブロック状に黄褐色砂が入る。小礫が目立つ。

4. 7号土坑(第14図、PL.5・24)

概要 7号土坑は土坑番号を付して処理しているが、竪穴建物を含む竪穴状遺構と認識される遺構である。

本土坑は過半が調査区外に出ていて、北西部寄りを調査できたに過ぎなかった。

位置 1区南中東部東端にあり、158～160-091～094グリッドに位置する。

規模・主軸方位 [規模]径：2.92×(1.88)m

深さ：0.25m

[主軸方位] N 80° E

重複 本土坑は4・5号溝と重複するが、本土坑の方が古い。

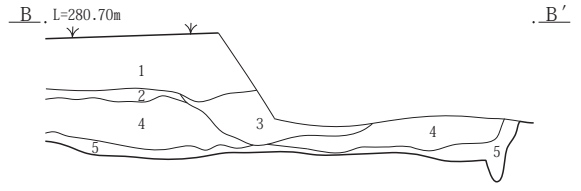
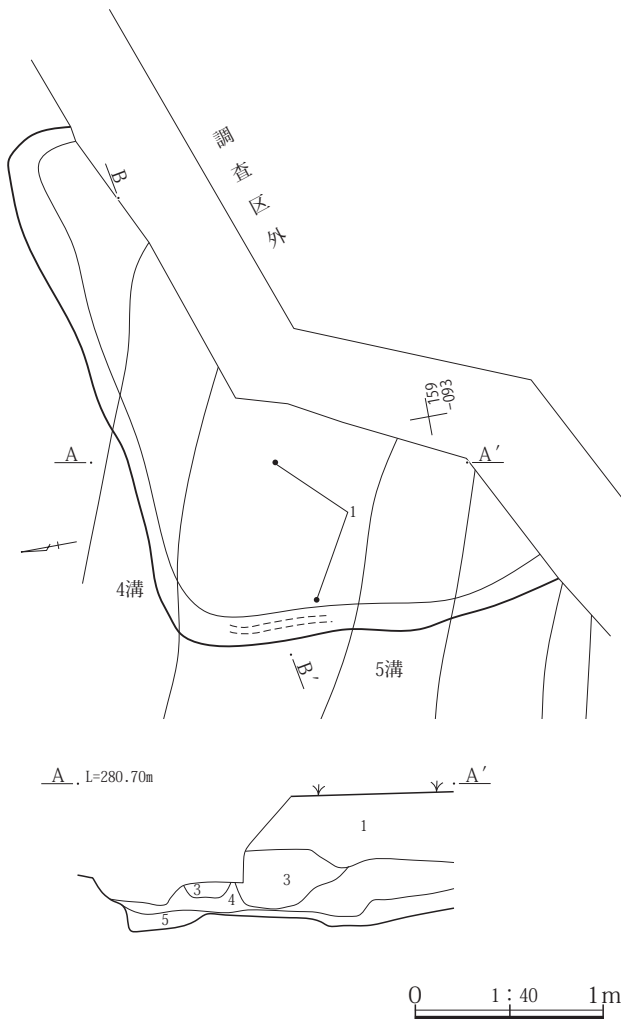
覆土 礫混じりの黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土で埋没する。

なお、いわゆる三角堆積は確認できなかった。

構造 上述のように本土坑は過半が調査区外にあるため、その構造をつまびらかにすることはできなかった。本土坑のプランは、東西に長い隅丸長方形を呈するものと想定される。また掘削形態は箱状で、底面は平底を呈する。

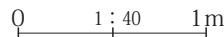
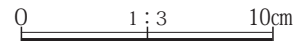
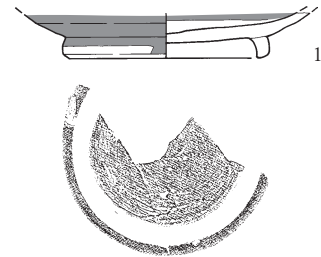
遺物 本土坑からは灰釉陶器碗(1)が出土した。

所見 本土坑の出土遺物から、本土坑はおおむね10世紀前半の所産の可能性が想定されるものの、時期特定には至らなかった。また、掘削意図も特定できなかった。



(7号土坑)

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 基本土層の1層。
- 2 黄褐色土(10YR5/6) シルト状の微細粒子でロームのような外見。黄色粒子が入る。周辺の泥流層に同様の部分が見られる。
- 3 黒褐色土(2.5Y3/1) 径10~30mmほどの礫が見られる。褐色粒子がわずかに入るが、混入物が少ない。砂質。基本土層の4層。
- 4 暗褐色土(10YR3/3) 径5~20mmほどの礫が多く見られる。褐色砂が混じり、部分的にブロック状に入る。
- 5 黄褐色土(10YR5/8) 黒褐色土がブロック状に入る。褐色、橙色粒子が見られる。白(灰白)色軽石が少し入る。ロームのような外見。



第14図 1区南7号土坑と出土遺物

5. 短冊形・長方形・溝形の土坑群

(第15~19図、PL. 5~9)

概要 本項では1区の土坑のうち、短冊形・長方形・溝形プランの土坑について報告する。

位置 1区北地区に1号土坑、1区南地区の北西部に8・9・11・12・13・14・17・19・35号土坑、北東部に2・3・5・34号土坑、中・南部に15・16・21・24・27・28・29号土坑が分布している。

表4に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位 [規模]長径：0.83~3.45m

(平均：2.1738m)

短径：0.27~1.22m(平均：0.6929m)

深さ：0.05~0.83m(平均：0.3168m)

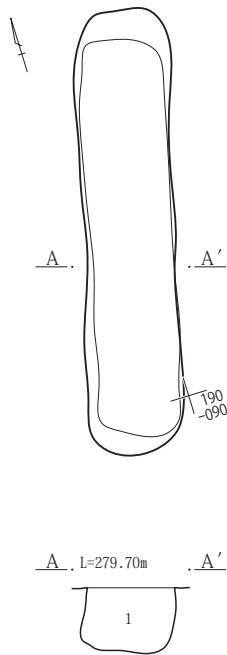
[主軸方位]28・35号土坑がほぼ東西方向に向く他は、いずれもほぼ南北方向に主軸を向けている。

なお、個々の土坑の規模と主軸方位は表4に記した。
重複 本土坑群のうち5号土坑は3号谷と、8号土坑は17・19号土坑と、9・35号土坑は16号溝と、34号土坑は2・3・8号溝と重複するが、他の土坑は単独であり、他遺構との重複関係はなかった。

このうち5号土坑は3号谷より新しく、8・17・19号土坑は8→17→19号土坑の順に後者になるほど新しい。また、35号土坑は16号溝より、34号土坑は2・3・8号溝よりいずれも古いだが、9号土坑と16号溝の新旧関係は特定できなかった。

覆土 個々の土坑の覆土は、各遺構図に記入した土層注記を参照願いたいだが、主たる覆土で見ると、表土層に近い暗灰黄色土で埋没しているのは、19・27・28号土坑であり、As-Kk前後の黒褐色土で埋没しているものが、8・9・11・12・14・21・24・29・35号土坑であり、暗褐色土で埋没しているものは2・5・16号土坑、標準土層下

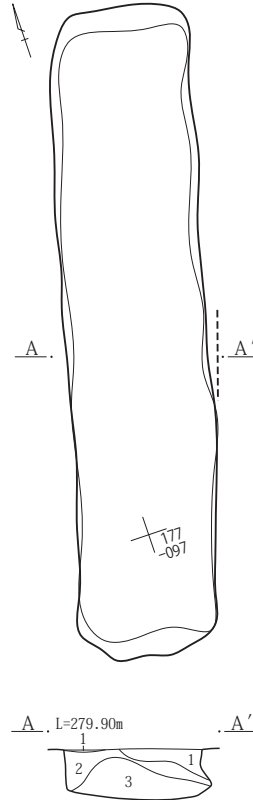
1号土坑



(1号土坑)

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 基本土層の4層に黄褐色砂がブロック状に混じる。褐色・白色粒子が少し見られる。

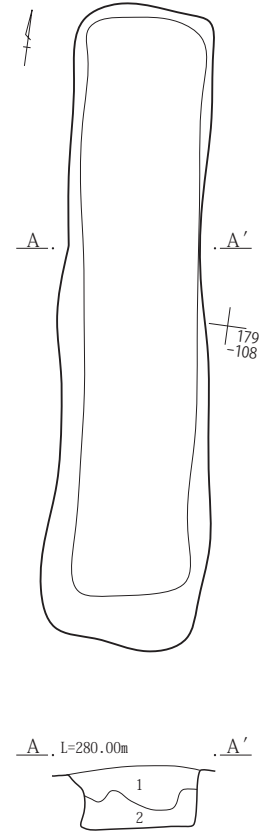
2号土坑



(2号土坑)

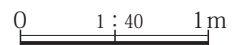
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) ブロック状に黄褐色砂が混入。褐色粒子目立つ。橙色粒子少し見られる。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 基本土層の4層に1層がブロック状に混じる。褐色・白色粒子が少し見られる。炭化物が少し見られる。
- 3 暗灰黄褐色土(10YR4/2) 1層と同様だが、黄褐色砂のブロックが多い。基本土層の1層泥流が混入。

3号土坑



(3号土坑)

- 1 暗灰黄褐色土(10YR4/2) ブロック状に黄褐色砂が混入。褐色粒子目立つ。橙色粒子少し見られる。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 基本土層の4層に1層がブロック状に混じる。褐色・白色粒子が少し見られる。



第15図 1区北1号土坑、1区南2・3号土坑

位層土で埋没しているものが13・15・17・34号土坑である。

構造 本土坑群の土坑のプランは、2・3号土坑は短冊形、1・8・9・12~16・21号土坑は隅丸短冊形を呈していた。28・29号土坑は溝状を呈し、34・35号土坑は長方形を呈し、5・11・17・19・24・27は隅丸長方形を呈していた。掘削形態はいずれも箱状で、掘削底面は平底を呈していた。

また、その規格には大小があり、大小それぞれに分けて概要を述べる。大型のものは2・3・5・8・9・11~17・34号土坑で、長径は1.17~3.45m(平均2.5792m)、短径は0.51~1.22m(平均0.8769m)、深さ0.11~

0.83m(平均0.4046m)を測る。一方、小型のものは1・19・21・24・27~29・35号土坑で、長径は0.83~2.57m(平均1.56m)、短径は0.27~0.57m(平均0.3771m)、深さ0.05~0.45m(平均0.2138m)を測る。

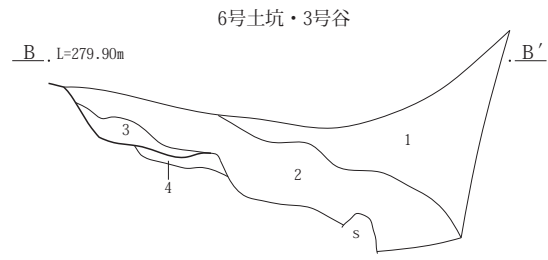
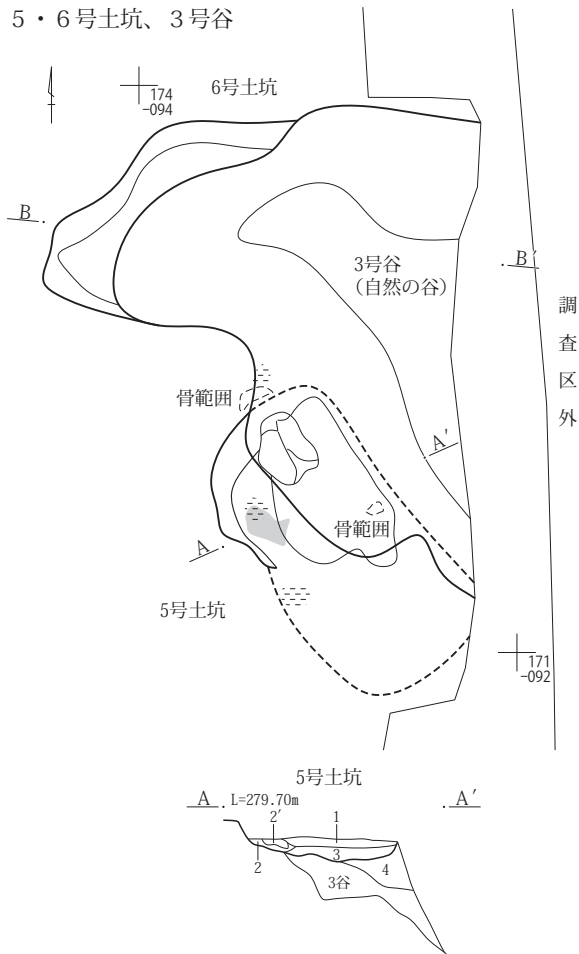
遺物 15号土坑から土師器甕片1点出土遺物が得られたが、他の土坑からの出土遺物は見られなかった。

所見 15号土坑を除き本土坑群からの出土遺物はなく、15号土坑出土遺物も破片であったため、本土坑群の時期を特定するには至らなかった。なお、土層記録からは、3・19・27・28号土坑は中近世、8・9・11・12・14・21・24・29・35号土坑は中世、1・2・5・13・15・16・17・34号土坑は古代以降の所産の可能性を有する

が、短冊形、長方形プランの箱形の掘削形態を呈する土坑は、中・近世の所産であることが多く、貯蔵穴と想定

されているため、本土坑群はおおむね中近世所産の貯蔵穴と想定される。

5・6号土坑、3号谷



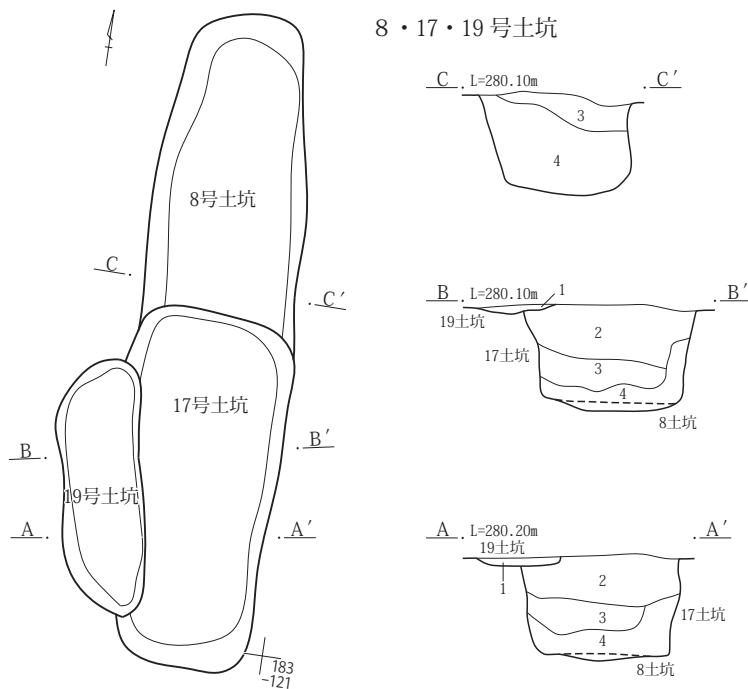
(6号土坑・3号谷) B—B'

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 表土。As-Ksと考えられる軽石が多量に混入。
- 2 黒褐色土(2.5Y3/2) 褐色粒子が多く見られる。径1～5mmの軽石を含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/3) 灰白(浅黄)色軽石が目立つ。径3～10mmの礫が多く混入。
- 4 黄褐色土(2.5Y5/4) 榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。部分的に暗褐色土が混入。

(5号土坑) A—A'

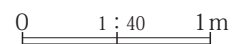
- 1 黒褐色土(10YR3/1) 小礫目立つ。骨片を含む(小片が少し)。
- 2 黒色土(10YR2/1) 混入物少ない。骨片を多く含む。骨片には大きめのものもある。
- 3 暗褐色土(10YR3/3) 砂質。大粒の砂(軽石?)が多く、ザラザラしている。
- 4 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 黄褐色砂(2.5Y5/3)が多く入り、部分的にはブロック状に入る。

8・17・19号土坑



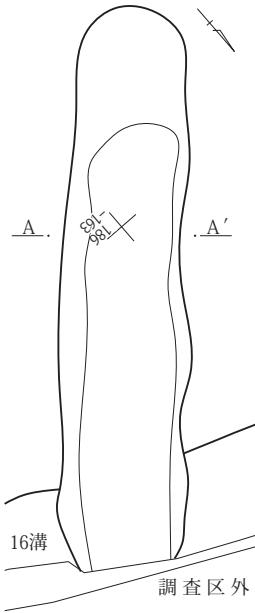
(8・17・19号土坑)

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 基本土層の1層。
- 2 黒褐色土(2.5Y3/2) 黄褐色砂がブロック状に入る。白色・橙色粒子が少し見られる。基本土層の3層に1層や泥流砂が混じる。
- 3 オリーブ褐色土(2.5Y4/3) 砂質。黄褐色土(砂)がブロック状に入る。2層より黄褐色土(砂)が多い。
- 4 黒褐色土(2.5Y3/1) 径20～40mmの礫が目立つ。黄色砂がブロック状に入る。橙色・褐色粒子が見られる。砂質。

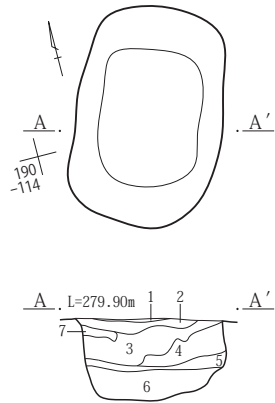


第16図 1区南5・6・8・17・19号土坑と3号谷

9号土坑



11号土坑

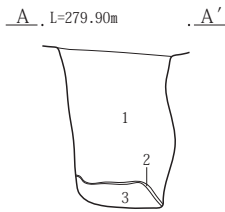


(11号土坑)

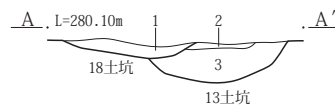
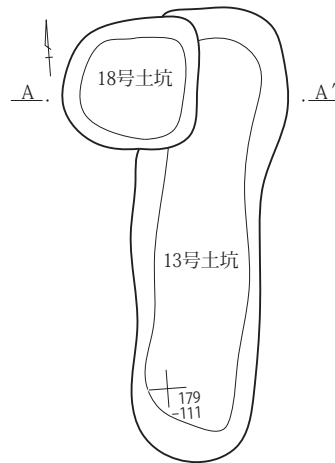
- 1 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 基本土層の1層に似る。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 褐色粒子がごくわずか見られる。基本土層の5層に似る。
- 3 オリーブ褐色土(2.5Y4/3) 黄色砂が多量に入り、部分的にはブロック状。砂質。
- 4 黒褐色土(2.5Y3/2) にぶい黄色粒子や砂がわずかに混入。粒子の荒い砂(軽石?)が少し混入。
- 5 にぶい黄色砂(2.5Y6/3) 砂層。黒褐色土中に多量にあり、層状になっている。
- 6 黒褐色土(2.5Y3/2) 黄褐色砂がブロック状に入る。

(9号土坑)

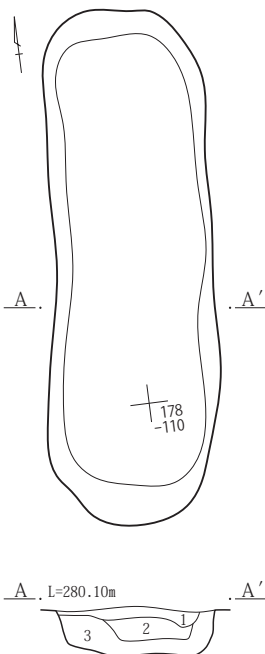
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質。褐色粒子目立つ。径2~20mmの礫混入(目立つ)。明黄褐色砂がブロック状に入る。
- 2 灰黄色砂(2.5Y6/2) 下位の泥流内に見られる細粒の砂。
- 3 黒褐色土(2.5Y3/1) 細粒の砂質。砂、礫、粒子などの混入物がとても少ない。



13・18号土坑



12号土坑

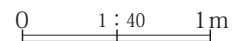


(12号土坑)

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 細粒の砂質。混入物(礫、粒子等)が少ない。
- 2 オリーブ褐色土(2.5Y4/3) 黄褐色砂が多量に入る。部分的にブロック状になる。
- 3 黒褐色土(2.5Y3/2) 黄褐色砂がブロック状に入る。径2~20mmほどの礫(軽石?)が見られる。

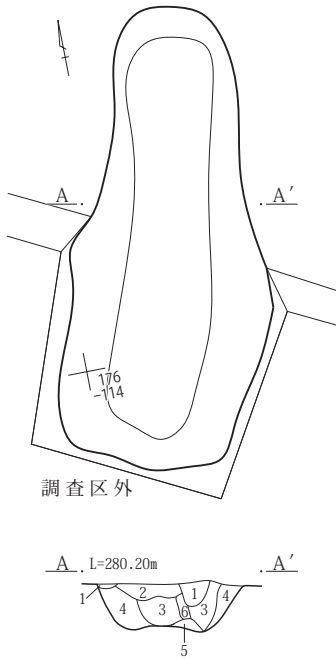
(13・18号土坑)

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 基本土層の1層に似る。
- 2 黒褐色土(2.5Y3/2) 黄褐色砂がブロック状に入る。径2~4mmほどの礫(軽石?)が多く入る。
- 3 オリーブ褐色土(2.5Y4/3) 黄褐色砂が多量に入る。部分的にブロック状になる。

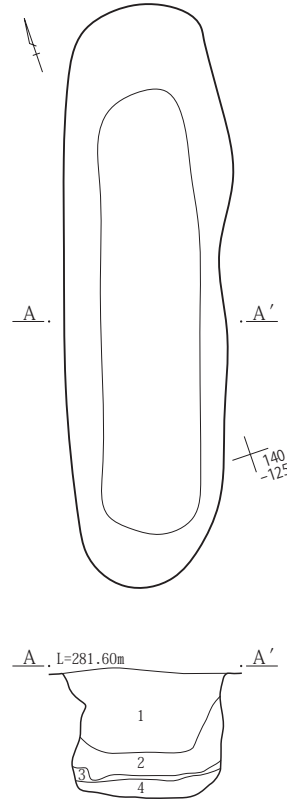


第17図 1区南9・11~13・18号土坑

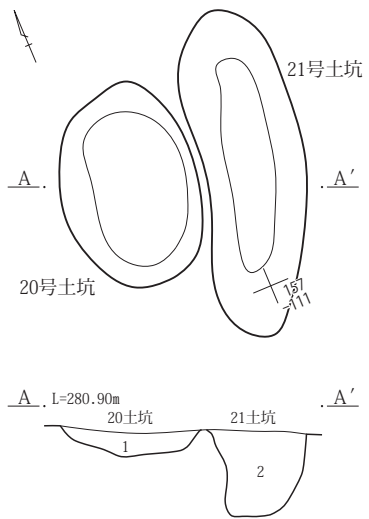
14号土坑



15号土坑



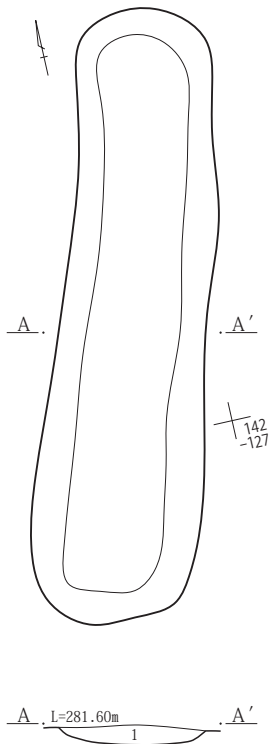
20・21号土坑



(20・21号土坑)

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 径10～50mmの礫数個。砂質。径3～5mmほどの礫多く含まれる。(20号土坑)
- 2 黒褐色土(2.5Y3/2) 径2～4mmほどの礫多く含まれる。砂質。(21号土坑)

16号土坑



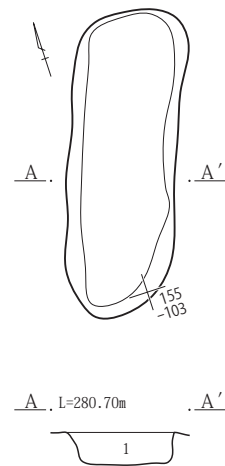
(16号土坑)

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 褐色粒子がわずかに見られる。径5mmほどの礫が少し見られる。砂質。

(24号土坑)

- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 径2～4mmの小礫多量。やや砂質。

24号土坑



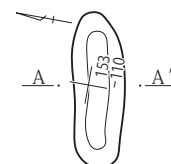
(14号土坑)

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 径3～5mmほどの礫(砂粒)多い。やや砂質。
- 2 黒褐色土(2.5Y3/2) 褐色粒子目立つ。径1～3mmほどの砂質多い。
- 3 黄褐色土(2.5Y5/4) にぶい黄色砂がブロック状に入る。砂質。
- 4 にぶい黄色砂(2.5Y6/3) 泥流の砂に暗褐色土が混入。崩落。
- 5 黒褐色土(2.5Y3/1) 砂質。暗褐色土に多量の砂が入る。
- 6 暗灰黄色砂(2.5Y5/2) 榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。

(15号土坑)

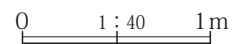
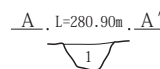
- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 径2～10mmの礫(軽石?)多量に入る。径20～50mmの礫が目立つ。やや砂質。褐色、橙色粒子が少し入る。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 径2～3mmほどの粒子(褐色)が少し入る。砂質。黄褐色砂を多量に含む。
- 3 灰黄色砂(2.5Y6/2) 砂が多量に層状に入る。
- 4 にぶい黄色砂(2.5Y6/4) ローム(シルト)のように微細粒子。榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。

27号土坑

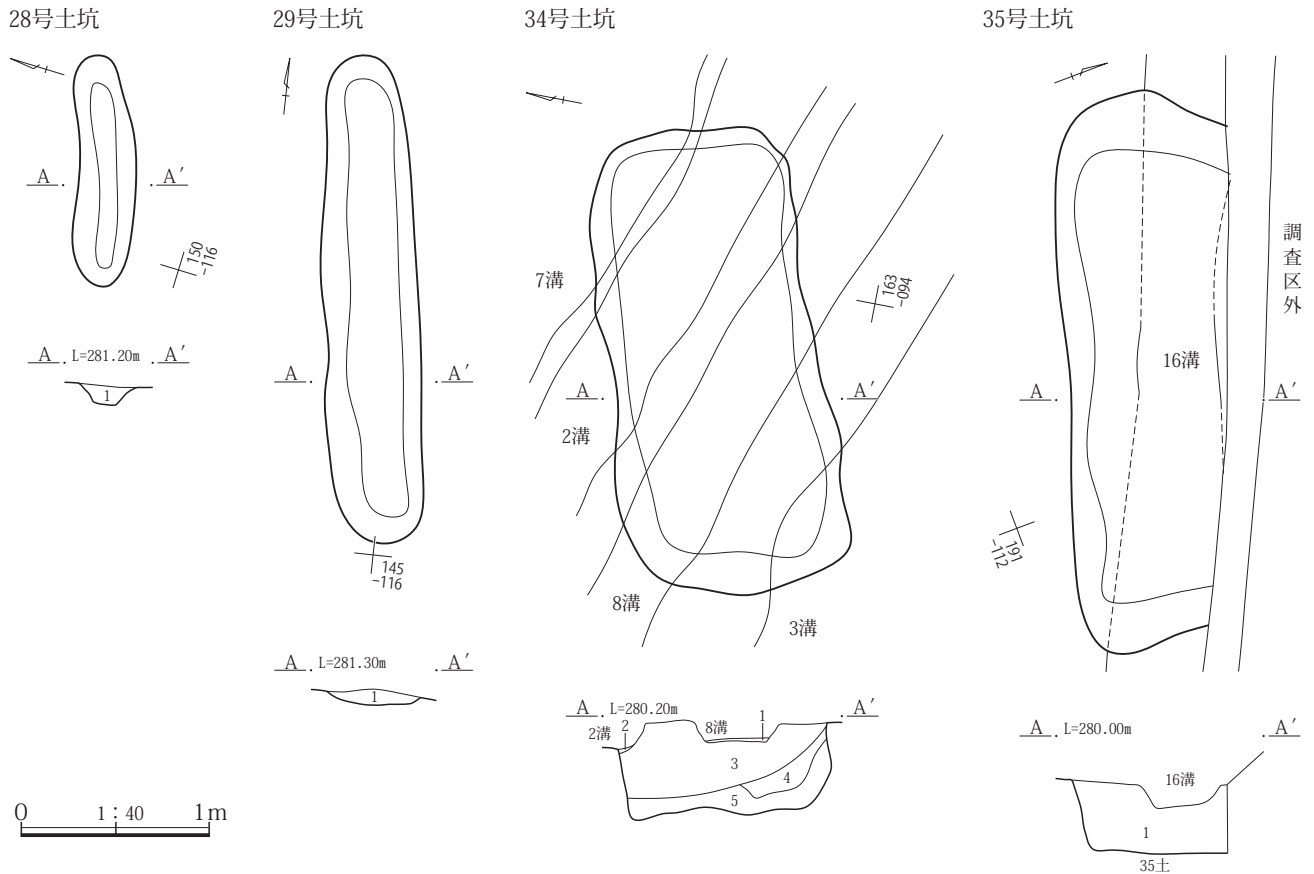


(27号土坑)

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) にぶい黄色砂が多量に混入し、部分的にブロック状を呈する。基本土層の1層に似る。



第18図 1区南14～16・20・21・24・27号土坑



(28号土坑)

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) にぶい黄色砂が多量に混入し、部分的にブロック状を呈する。基本土層の1層に似る。27号土坑の1層と同じだが、混入した砂がより多い。

(29号土坑)

- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 砂質。にぶい黄色砂がブロック状に見られる。礫、粒子などの混入物がとても少ない。

(35号土坑)

- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 褐色粒子が多く見られる。径2～5mmほどの礫(軽石?)が多量に入る。

(34号土坑)

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 黄色、褐色粒子目立つ。ブロック状ににぶい黄色砂が混入。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 褐色粒子少し(わずか)。基本土層の1層に似る。
- 3 暗褐色土(10YR3/3) ブロック状に黄褐色砂が少し入る。径2～5mmの小礫が含まれる。褐色、橙色粒子が少し含まれる。
- 4 にぶい黄褐色砂(10YR4/3) にぶい黄色砂に暗褐色土が混じる。崩落。
- 5 にぶい黄色砂(2.5Y6/4) 榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。

第19図 1区南28・29・34・35号土坑

6. 円形・楕円形・方形の土坑群

(第17・18・20・21図、PL.6～8)

概要 本項では1区の土坑のうち、上述の7号土坑と後述の4号土坑を除く円形、楕円形、方形プランの土坑について記載する。これらの土坑は上述の短冊形、長方形プランの土坑群と異なり、小型で、プランの縦横比が小さい。

位置 1区南地区の北西部に18号土坑、中北部に30・31・32・33号土坑、中・南部に20・22・23・25・26号土坑が分布している。

表4に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位 [規模]長径：0.68～1.17m

(平均：0.8613m)

短径：0.52～1.10m(平均：0.8067m)

深さ：0.05～0.43m(平均：0.18m)

なお、個々の土坑の規模と主軸方位は表4に記している。

重複 本土坑群のうち18号土坑は13号土坑と、33号土坑は5号溝と重複するが、他の土坑は単独であり、他遺構との重複関係はなかった。

このうち18号土坑は13号土坑より新しく、33号土坑と5号溝の新旧関係は特定できなかったが、覆土の比較から本土坑の方が古いものと判断される。

覆土 個々の土坑の覆土は、各遺構図に記入した土層注記を参照願いたい。主たる覆土で見ると、18号土坑は表土層に近い暗灰黄色土で埋没しているが、23・25号土坑は暗褐色土で埋没し、26・33号土坑は黒褐色土、30～32号土坑は灰黄褐色土で埋没するものの黒褐色土が入る。

構造 本土坑群の土坑のプランは、18・30・33号土坑は方形、25・26号土坑は円形、20・22・23・31・32号土坑

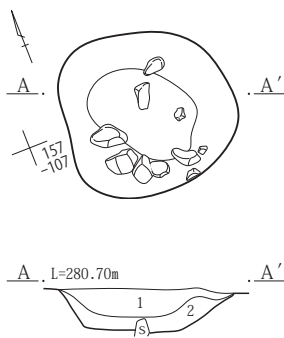
は楕円形を呈していた。掘削形態はいずれも箱状で、掘削底面はおおむね平底を呈していた。

遺物 いずれの土坑からも出土遺物は得られなかった。

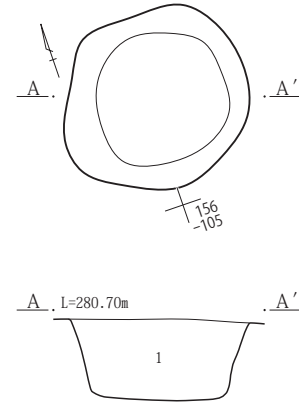
所見 本土坑群からの出土遺物はなく、時期特定には至らなかった。なお、土層記録からは、18号土坑は中近世、26・30～33号土坑は中世、22・23・25号土坑は古代以降の所産の可能性を有する。

また、本土坑群各土坑の掘削意図は特定できなかった。

22号土坑



23号土坑



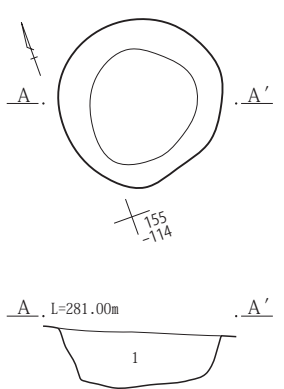
(22号土坑)

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 砂質。にぶい黄色砂がブロック状に見られる。
- 2 褐色土(10YR4/4) 砂質。暗褐色土に多量の灰黄褐色砂が混じる。径50～200mmの礫が混じる。

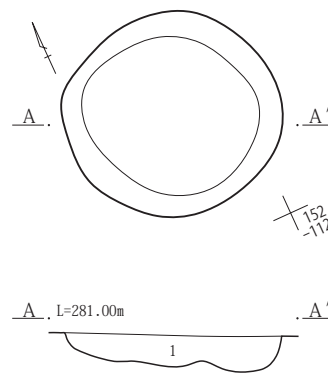
(23号土坑)

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 径3～5mmほどの小礫(軽石?) 多量。砂質。灰黄褐色砂ブロックが見られる。

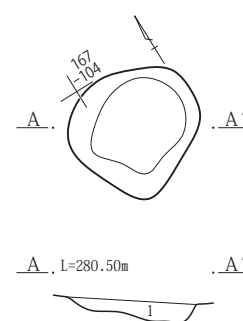
25号土坑



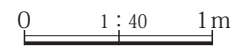
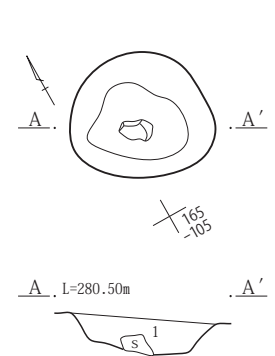
26号土坑



30号土坑



31号土坑



(25号土坑)

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 径4～15mmほどの小礫が多く見られる。暗灰黄褐色砂(泥流)がブロック状に入る。上面に黒褐色土(2.5Y3/2)が薄くのる。

(26号土坑)

- 1 黒褐色土(2.5Y3/1) 径5mmほどの小礫(軽石)を多量に含む。砂質。

(30号土坑)

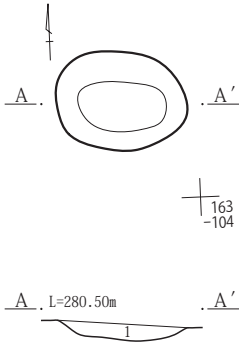
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黒褐色土がブロック状に多く入る。砂質。褐色粒子が少し見られる。

(31号土坑)

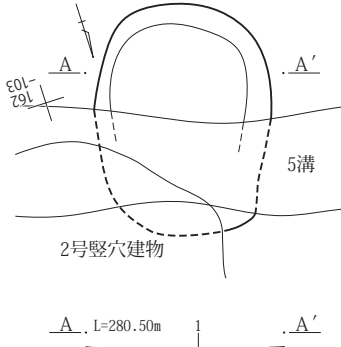
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黒褐色土がブロック状に入る。下位に行くほど黄褐色が強くなる。やや砂質。褐色粒子が少し見られる。

第20図 1区南22・23・25・26・30・31号土坑

32号土坑



33号土坑

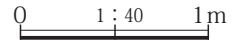


(32号土坑)

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黒褐色土がブロック状に多く入る。砂質。褐色粒子が少し見られる。

(33号土坑)

1 黒褐色土(2.5Y3/2) 砂質。礫、粒子等の混入物が非常に少ない。



第21図 1区南32・33号土坑

7. 10号土坑(第22図、PL. 6)

概要 10号土坑は不整形なプランの土坑である。

位置 1区南地区の北西部、185～186-107～108グリッドに位置する。

規模・主軸方位 [規模]長径：1.85m 短径：1.19m
深さ：0.34m

[主軸方位] N41°E

重複 本土坑は単独であり、他遺構との重複はなかった。

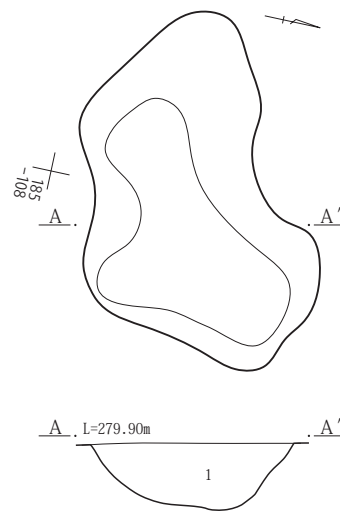
覆土 本土坑は、黒褐色土等で埋没する。

構造 本土坑は南側がN63°E、北側がN26°Eに軸線方向を取る土坑が接続したような、羽形のプランを呈する。掘削形態は船形を呈し、屈曲部の底面が南東方向に突出する。

遺物 出土遺物は得られなかった。

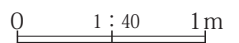
所見 本土坑からの出土遺物はなく、時期は特定できなかったが、土層記録から推して、おおむね中世の所産と想定される。

また、本土坑の掘削意図は特定できなかった。



(10号土坑)

1 黒褐色土(2.5Y3/2) 小礫(径2～5mm)目立つ。砂質。基本土層の3層に似るが、粒子がきわめて少ない。



第22図 1区南10号土坑

8. 4・37号土坑と1・2号谷

(第23・24図、PL. 5・9)

概要 東側の2号谷とその谷頭に掘削された4号土坑、西側の1号谷とその谷頭に37号土坑は、左右対称の配置を見せており、一連の遺構群と拝察せられる。

なお、1号谷は当初竪穴建物(1号住居)として調査に着手したが、掘削の結果、谷であることを確認したため、竪穴建物(竪穴住居)としての遺構番号は欠番として処理

することとした。

位置 1号谷は194～200-103～113グリッド、2号谷は187～193-092～095グリッドに位置する。4・37号土坑は表4に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位 1号谷の確認範囲は東西10.8m、南北5.8mを測り、確認範囲の最深高は1.53mである。主軸方位はN81°Eであるが、谷頭近くの3.7mの範囲では時計回りに屈曲してN33°Wを向く。

2号谷の確認範囲は東西3.1m、南北3.3mを測り、確認範囲での最深高は1.1mである。主軸方位はN68°Wである。

4・37号土坑の規模、主軸方位は表4に記した。

重複 上述のように1号谷は37号土坑、2号谷は4号土坑と重複するが、断面観察では37号土坑は1号谷より新しい可能性があり、4号土坑は2号谷の埋没と連動しているようにも見受けられるものの、両者ともに新旧関係は特定できなかった。なお、これ以外の遺構との重複は見られなかった。

覆土 37号土坑の覆土下位には灰黄色砂層が堆積するが、1号谷の埋没層の上位にはAs-Kkが確認されるものの、最下層は二ツ岳火砕流堆積物主体の土で覆われる。4号土坑と2号谷では、埋没層の上位にはAs-Kkが確認されるものの、最下層は共に二ツ岳火砕流堆積物主体の土で覆われている。

構造 1号谷は堀状に湾入し、その形態から推して人為的掘削の可能性も考慮される。また、先端部は屈曲して堀状に延びる。2号谷は一部を確認したに過ぎないが、全体的形状も、堀状に湾入するような形状を呈しているように見受けられる。

1・2号谷共に谷頭には4・37号土坑が掘削されているが、4・37号土坑は共に確認面からは0.4mほどの深さでしかないが、谷頭を鋭角に落とす効果を有している。

4号土坑と37号土坑の間隔6.2mを測るが、4・37号土坑のプランは、楕円形を呈する。掘削形態は箱状である。掘削底面は平底を呈する。

遺物 37号土坑からは古墳時代以降の土師器甕片1点、1号谷からは平安時代のものと思われる土師器甕片1点が出土したに過ぎない。また、4号土坑と2号谷からの出土遺物は得られなかった。

所見 出土遺物から推して、37号土坑は古墳時代以降、1号谷は平安時代以降からの所産と判断される。遺構の位置関係から4・37号土坑と1・2号谷は同時期の所産と想定されるため、一連の遺構は平安時代頃の所産と想定される。また、4号土坑と37号土坑との間隔は6.2mを測り、1号谷の先端が東側に延びるようであり、これを人為的と解釈するならば、一連の遺構によって土地の幅員は減ぜられ、南北方向の通行を抑制する効果があり、谷頭の土坑の掘削により、谷からの侵入も抑制する効果があったものと思慮される。

9. ピット(第25・26図、PL.10)

概要 本項では柱穴状のピットについて報告する。

なお、15～18号ピットについては、1号柵として上述のように報告した。

位置 1区では1区北地区に1・2号ピットがあり、1区南地区の北西部に4・5・6・7・8・9号ピット、中部に11・12・14号ピット、南部に3・10・13号ピットがある。表5に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位 径は0.30～0.64m(平均0.4121m)

深さ0.14～0.35m(平均0.2107m)

個々のピットの規模等については表5に記した。

重複 本ピット群の各ピットは単独にあり、他の遺構との重複関係は見られなかった。

覆土 個々のピットの覆土は、各遺構図に記入した土層注記を参照願いたいだが、主たる覆土で見ると、9・12～14号ピットは黒褐色土、他のピットは二ツ岳火砕流起源の土壌あるいは砂で埋没している。

構造 本ピット群のピットのプランは、1・2号ピットは不整形、3・4・11号ピットが円形、5～10・12～14号ピットは楕円形を呈する。掘削形態は、1・8号ピットは杭状を呈するが、他のピットは柱穴状を呈する。また掘削底面は、1・8号ピットは尖底、2・4・9・12～14号ピットは丸底を呈し、3・5～7・10・11号ピットは平底を呈する。

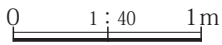
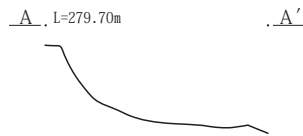
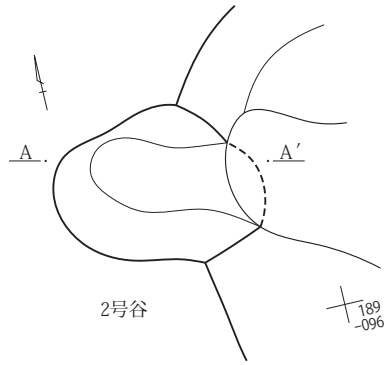
遺物 出土遺物は得られなかった。

所見 本ピット群の各ピットからの出土遺物はなく、時期は特定できなかったが、覆土の状態から3・9・11～14号ピットはおおむね中世、他のピットは古代から中世の所産と想定されるに過ぎない。

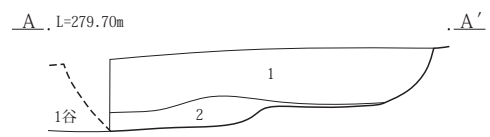
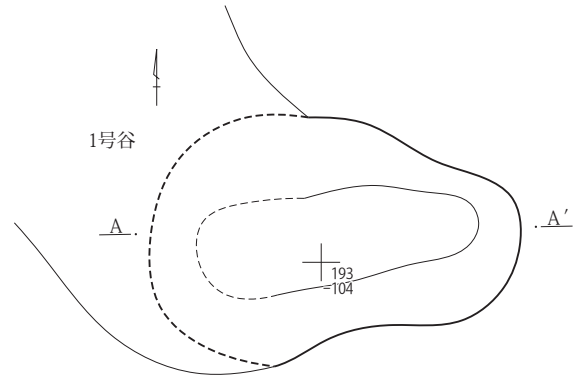
10. 11号溝(第27図、PL.11)

概要 11号溝は東側が調査区外にあり、1区南において限定的な範囲で調査できたに過ぎなかったため、全容はつまびらかでない。また、西側が2区に現れているが、調査段階で新しい遺構と判断したため、詳細な調査は行われなかったのではあるが、この2区の部分も併せて報告する。

4号土坑



37号土坑



(37号土坑) 1区

- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 径3~5mmほどの黄色軽石を少し含む。径30~50mmの礫が少し入る。褐色粒子がわずかに入る。
- 2 灰黄色砂層(2.5Y6/2) 径20~50mmの礫が多量に入る。水性堆積か。

第23図 1区北4・37号土坑

位置 1区南地区の南端から、2区南東隅部にかけてある。127-133~138グリッドに位置する。

規模・主軸方位 [規模]長さ:4.9m(1区南:1.88m、2区:2.6m) 幅:0.3m(1区南、2区:0.6m)

深さ:0.08m(1区南)

[主軸方位] N83°W

重複 本溝は単独であり、他遺構との重複はなかった。

覆土 黒褐色土の入る暗灰黄色砂質土で埋没する。

構造 本溝は直線的な走行を取る。掘削形態は箱堀状を呈し、底面は平底を呈する。また勾配はほとんどなかった。

遺物 出土遺物は得られなかった。

所見 本溝からの出土遺物はなく、時期は特定できなかったが、土層記録推して、おおむね中近世の所産と想定される。

また、本溝は直線的に掘削されているため、土地区画に供されたものと想定されるが、明確な掘削意図は特定できなかった。

11. 16号溝(第27図、PL.11・24)

概要 16号溝は東西両側と北縁側が調査区外に出ているため、全容はつまびらかでない。

位置 1区南地区の北端中・西部にある。186~193-100~116グリッドに位置する。

規模・主軸方位 [規模]長さ:17.2m 幅:(0.42m~0.70m以上) 深さ:0.16m

[主軸方位] N65°W

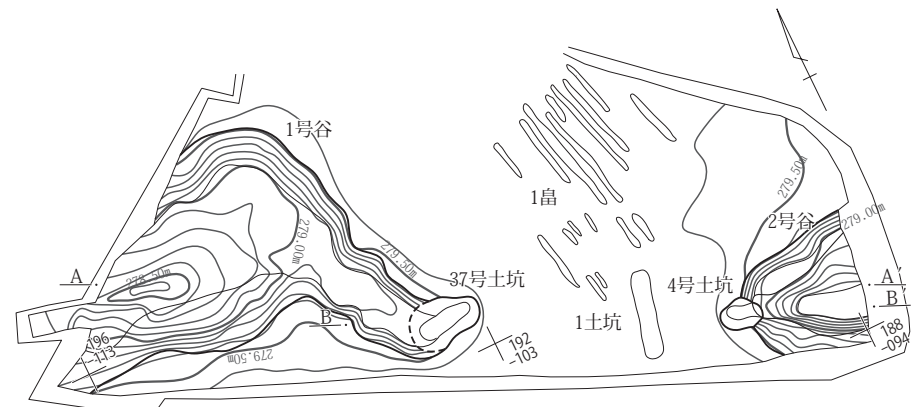
重複 本溝は9・35号土坑と重複するが、本溝は35号土坑より新しいが、9号土坑との新旧関係は特定できなかった。

覆土 多量の砂が入る暗灰黄色砂質土で埋没する。

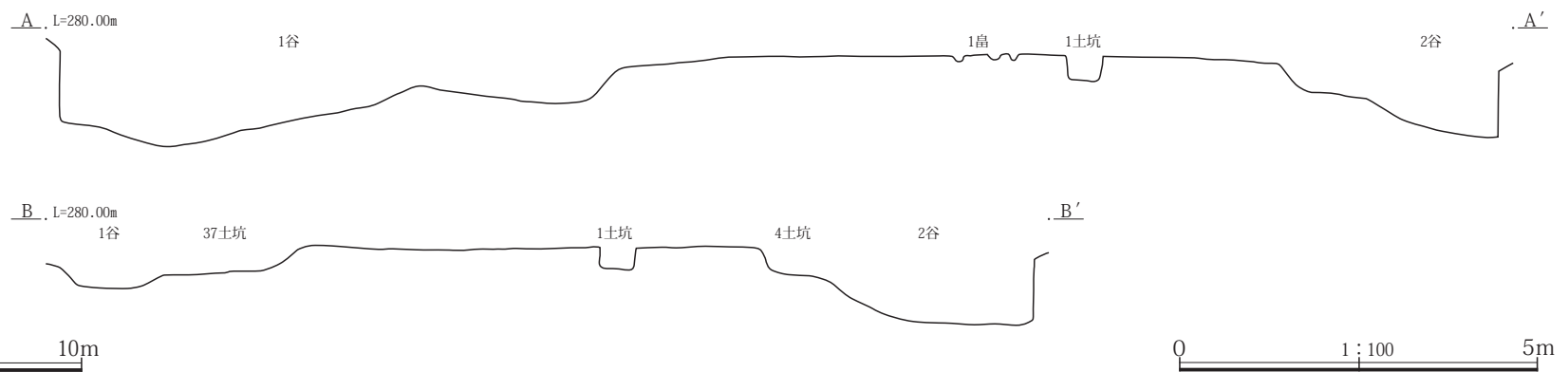
構造 本溝は直線的な走行を取る。掘削形態は箱堀状を呈し、底面は平底を呈し、勾配はほとんど見られない。

遺物 磁器瀬戸・美濃碗(1)が出土した。

所見 出土遺物からは、近・現代の所産ということではあるが、これは破片であり流れ込みの可能性も残ることから、現時点では近世以降の所産と捉えたい。

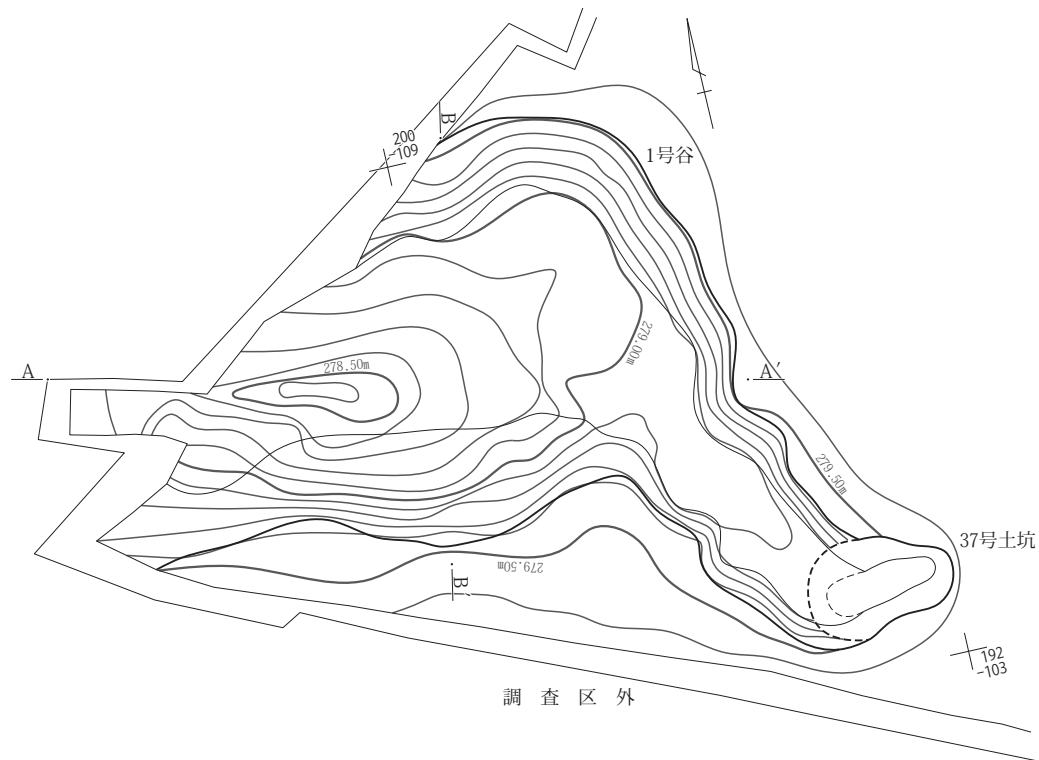
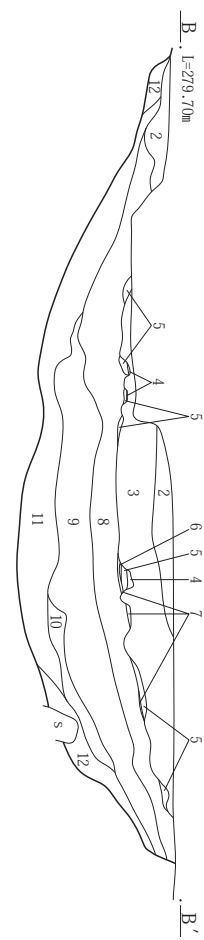


0 1:200 10m



0 1:100 5m

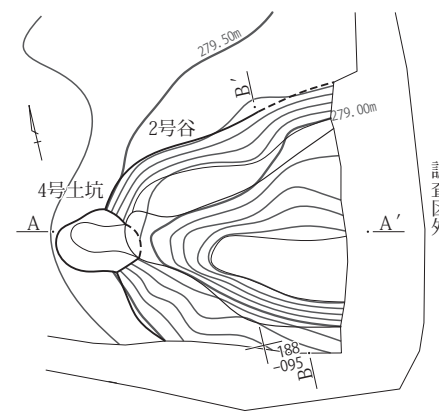
37号土坑・1号谷



0 1:100 5m

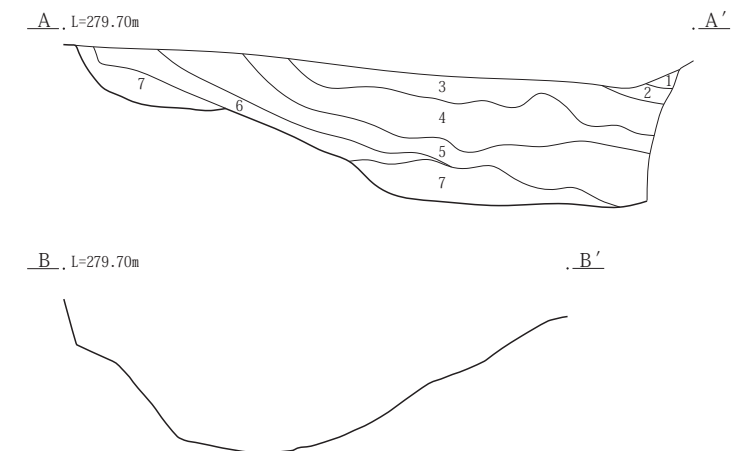
0 1:50 2m

4号土坑・2号谷

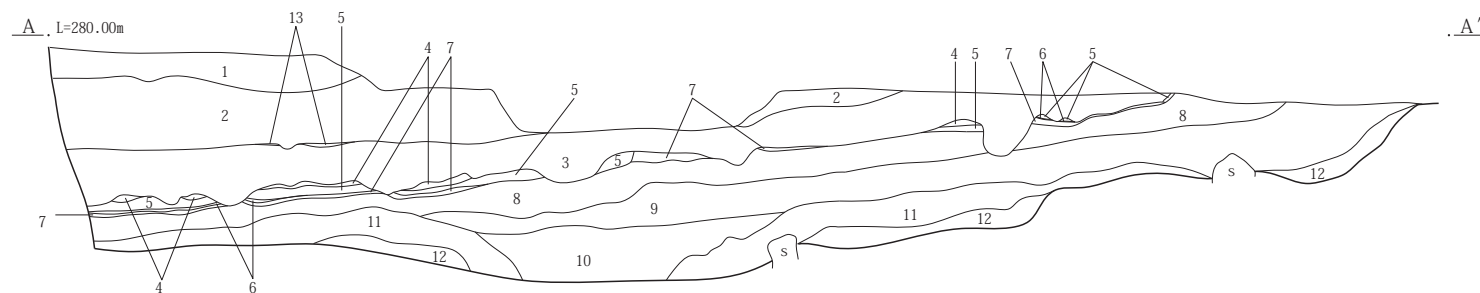


0 1:100 5m

0 1:50 2m



0 1:100 5m



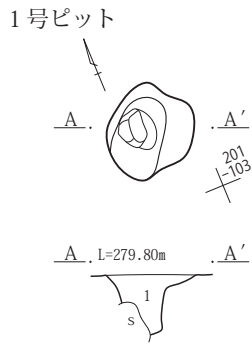
第24図 1区北4・37号土坑と1・2号谷

(4号土坑・2号谷)

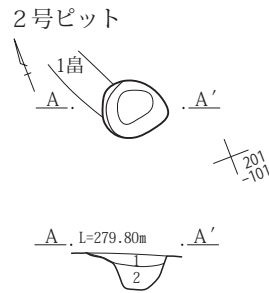
- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 表土。2層の軽石が多量に混入。
- 2 灰白色軽石(5Y7/1) As-Ks。上面にわずかに灰色火山灰が見られる。
- 3 黒褐色土(2.5Y3/2) 褐色粒子が多く見られる。径3~5mmの軽石を含む。
- 4 暗褐色土(10YR3/3) 灰白(浅黄)色軽石が目立つ。径3~10mmの礫が多量に混入。
- 5 褐色土(10YR4/4) にぶい黄色の砂が多量に混入。砂質。砂はブロック状に固まっているところもある。
- 6 黒褐色土(10YR3/2) 径3~50mmの礫が目立つ。砂質。黒色土がブロック状に入るところもある。
- 7 黄褐色土(2.5Y5/4) 榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。部分的に暗褐色土が混入。

(1号谷)

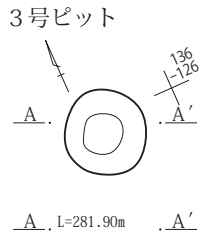
- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 表土。
- 2 黒褐色土(10YR3/2) 径10~30mmの礫が少し入る。褐色・橙色・白色粒子が少し入る。砂(褐色)ブロックが少し見られる。
- 3 黒色土(2.5Y2/1) 径1~3mmの白(黄白)色粒子(As-Ksと考えられる)が多量に混じる。褐色砂(火山灰?)がブロック状に見られる。
- 4 灰色火山灰(7.5Y6/1) As-Ksの火山灰。非常に粒子が細かく、青く見える。部分的には層厚15mm。
- 5 灰白色軽石(5Y7/1) As-Ks軽石。径2~6mm程。部分的には層厚40mm。
- 6 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 砂質。As-KsとAc-Bの間の薄い間層。
- 7 にぶい黄色火山灰(2.5Y6/4)と灰黄色軽石(2.5Y6/2) 非常に細粒の火山灰(ローム状)とやや明るい色の径1~25mm程の軽石からなる。火山灰が上、軽石が下。As-Bの噴火に伴う火山灰と軽石。
- 8 黒褐色土(2.5Y3/2) 径10~50mm程の礫(軽石)を含む。褐色(白色)粒子を少し含む。
- 9 オリーブ褐色土(2.5Y4/3) 黄白色(白色)軽石(FP?)を少し含む。にぶい黄色砂のブロックが少し見られる。
- 10 黒褐色土(2.5Y3/1) にぶい黄色砂のブロックが少し見られる。軽石が大きく目立つ。
- 11 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 黄褐色砂(火砕流堆積物の一部)が多く混入し部分的にブロック状を呈する。径3~5mm程の白色軽石が少し見られる。
- 12 黄褐色土(2.5Y5/6) 榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。非常に粒子が細かくローム(粘土)状。



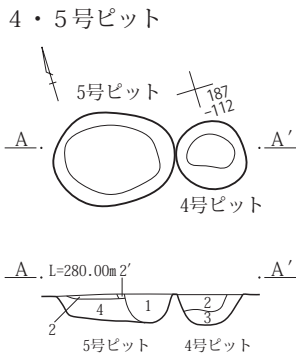
- (1号ピット)
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 小礫・褐色粒子が少し見られる。



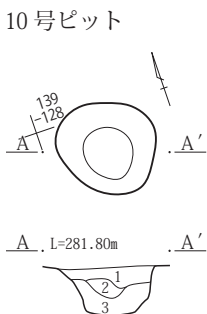
- (2号ピット)
- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 表土にぶい黄色砂(火砕流堆積物)がブロック状に混入している。
 - 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 基本土層5層に似るが、混入物(粒子)がとても少ない。



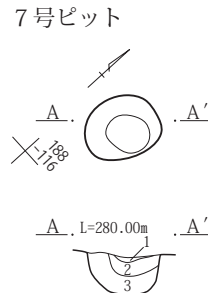
- (3号ピット)
- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 砂質。小礫(径5mm)がわずかに見られる。混入物がとても少ない。
 - 2 黄褐色土(2.5Y5/3) 1層と3層が混じる。3層が多い。
 - 3 にぶい黄色砂(2.5Y6/3) 榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。



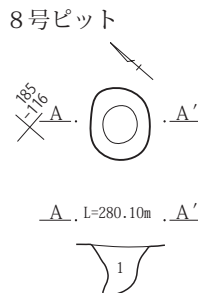
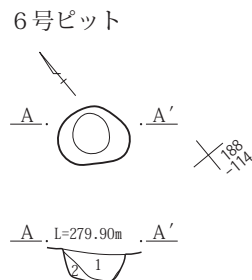
- (4・5号ピット)
- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 砂質。褐色粒子がわずかに見られる。
 - 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 砂質。黄褐色砂が混じり、部分的に黄色のブロック状に見える。
 - 2' 黄褐色砂(2.5Y5/4) 4層の地山がブロック状に入っている。
 - 3 暗灰黄色土(2.5Y4/2) とても粒子が細かい砂質。黄色の砂がブロック状に入る。基本土層の6層。
 - 4 黄褐色砂(2.5Y5/4) 榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。



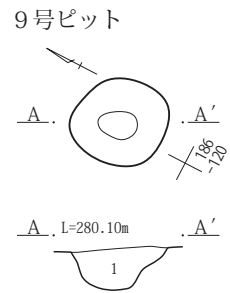
- (10号ピット)
- 1 暗褐色土(10YR3/3) 砂質。砂が多量に混入している。部分的に黄褐色砂がブロック状に入る。
 - 2 にぶい黄色砂層(2.5Y6/3) 下層の砂層に暗褐色土が混じる。
 - 3 暗灰黄色砂(2.5Y5/2) 榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。



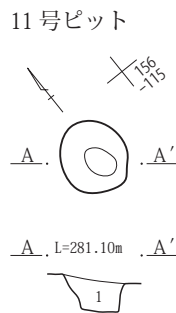
- (7号ピット)
- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 砂質。褐色粒子が見られる。黄色砂がブロック状に入る。基本土層の5層に似る。
 - 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 砂質。黄色砂に黒褐色土が混じる。基本土層の6層。
 - 3 黄色砂(2.5Y7/8) 榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。



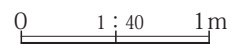
- (8号ピット)
- 1 暗灰黄色砂(2.5Y4/2) 基本土層の6層。砂質。黄褐色砂に黒褐色が混じる(漸移層的な色、質)。



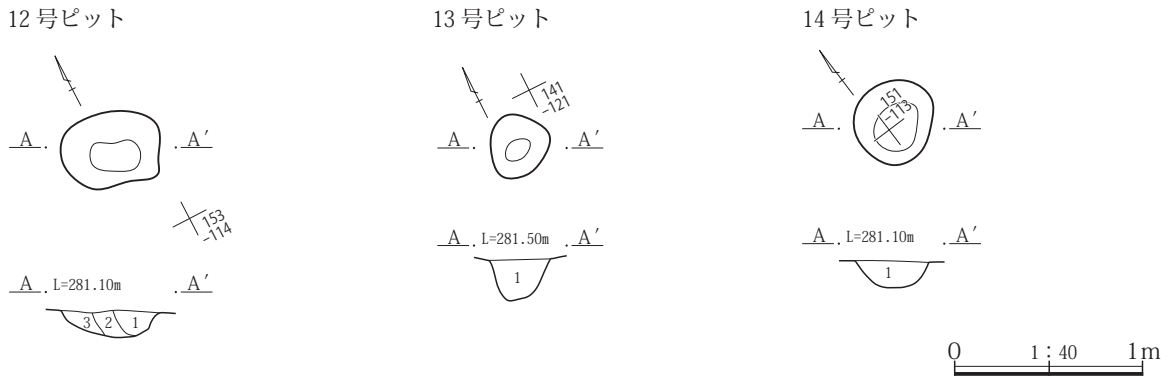
- (9号ピット)
- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 砂質。褐色粒子が少し見られる。基本土層の3層に似るが、白色粒子(軽石)が目立たない。



- (11号ピット)
- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 砂質。小礫粒子など混入物がとても少ない。



第25図 1区北1・2号ピット、1区南3～11号ピット



(12号ピット)

- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 褐色粒子が少し見られる。径2～5mmほどの礫が少し見られる。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) やや砂質。径2～5mmほどの礫が見られる。
- 3 褐色土(10YR4/4) 砂質。にぶい黄色砂が多量に入る。径2～

3mmほどの小礫多量。

(13号ピット)

- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 砂質。粒子、礫などの混入が少ない。

(14号ピット)

- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 褐色粒子が少し見られる。径2～5mmほどの礫(軽石?)少し混入。

第26図 1区南12～14号ピット

また、本溝は砂を多く含むため、水が流れた可能性が考慮されるが、底面の高さから水路としての可能性は低い。また、直線的に掘削され、上述の1・2号谷に並走していることも含めて、土地区画に供された可能性が想定される。

主軸方位 (A群) N70°W

(B群) N72°W

重複 本耕作遺構は2号竪穴建物、33・34号土坑と重複するが、いずれに対しても本遺構群の方が新しい。

また本遺構群のA・B群でも重複関係があるが、B群の方が新しい。

覆土 暗灰黄色土、黄褐色土、暗褐色土で覆われる。

構造 本耕作遺構を構成する各溝は、直積的な走行を呈し、箱堀状を呈する壁は鋭角に立ち上がるものと鈍角に立ち上がるものがある。壁面の立ち上がりは、概してA群は鋭角に立ち上がる傾向があり、B群は鈍角に立ち上がる傾向がある。また、掘削底面は平底を呈するものが多い。

遺物 6号溝からは陶器瀬戸・美濃すり鉢(1)、15号溝からは陶器瀬戸・美濃碗(2)が出土したが、他の溝からの出土遺物は得られなかった。

所見 本耕作遺構群の時期は特定できず、覆土の状態からB群はおおむね近世頃の所産と想定されるに過ぎなかった。また、重複関係からA群もおおよそ、中近世の所産として把握されるに過ぎなかった。

また、B群は壁面がやや開く掘削形態から推して、畠として掘削されたものと思慮され、A群は壁面が垂直に近いものが多いため、天地返しのために掘削された可能性が考慮される。

なお、A・B両群ともに、一筆の畠地に掘削されたものである。

12. 耕作遺構群(1～10・12～15号溝)

(第28図、PL.11・24)

概要 1～10・12～15号溝の14条の溝は、個別の遺構として調査し、溝の掘削位置と配置から推して、1～6・13号溝(以下「A群」とする)と7～10・12・14・15号溝(以下B群とする)の2群の耕作遺構として把握される。このため、本項において一括の遺構群として報告する。

位置 [A群]155～172-088～114グリッド

[B群]154～166-089～106グリッド

個々の溝の所在グリッドは表6に記した。

規模[規模]南北：16.6m 東西：26.7m

(A群)南北：16.6m 東西：26.7m

(B群)南北：16.6m 東西：26.1m

[長さ]26.5m以下

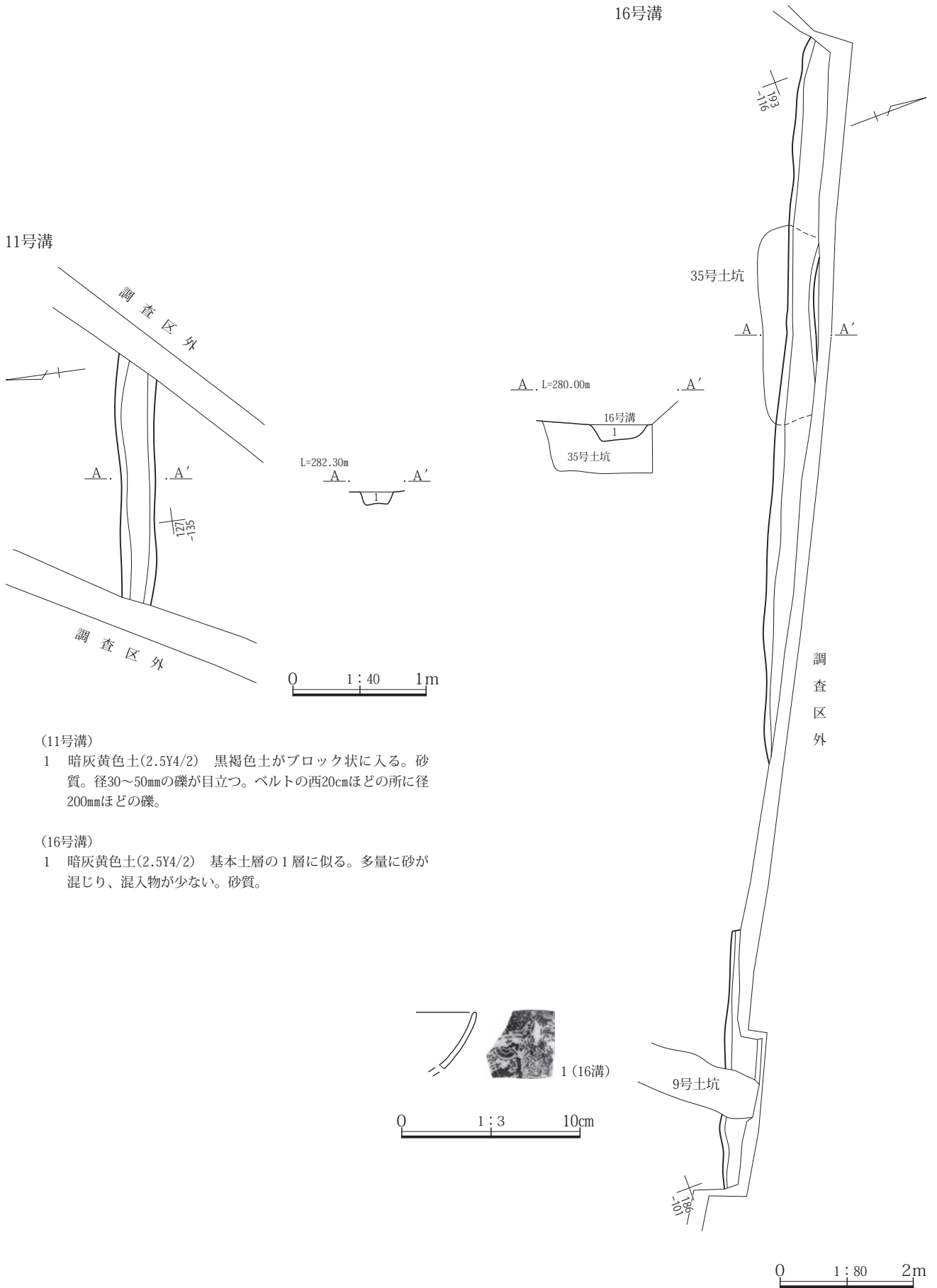
[幅]0.27～0.82m(平均：0.6361m)

[深さ]0.02～0.24m(平均：0.1021m)

[サク間](A群)1.35～1.69m(平均：1.53m)

(B群)1.06～1.40m(平均：1.198m)

個々の溝の規模と主軸方位は表6に記した。



(11号溝)

1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 黒褐色土がブロック状に入る。砂質。径30~50mmの礫が目立つ。ベルトの西20cmほどの所に径200mmほどの礫。

(16号溝)

1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 基本土層の1層に似る。多量に砂が混じり、混入物が少ない。砂質。

第27図 1区南11・16号溝と出土遺物

13. 1号畠(第29図、PL.12)

概要 本畑は1区北、1・2号谷の北側に広く分布する。サクが確認されたが、畝は確認されなかった。

しかし遺存状態は不良であり、全容はつまびらかにできなかつた。

位置 191～209-096～104にグリッドに位置する。

規模 [規模]南北：17.9m 東西：8.4m

[サク長さ]0.25～4.5m(平均：0.7765m)

[サク幅]0.05～0.33m(平均：0.1600m)

[サク深さ]0.02～0.04m(平均：0.026m)

[サク間]0.2～0.43m(平均：0.3433m)

主軸方位 北部：N6°E 南部：N65°E

重複 本畠は1・2号ピットと重複する。1号ピットとの新旧関係は特定できなかつたが、2号ピットの方が新しい。

覆土 サクは、表土層に似る暗灰黄色砂質土で覆われる。

構造 遺存状態が良くないので、全容はつまびらかでないが、サクの底面は平底を呈する。その分布と端部の並びの状態から推して、中・北部と南部のものは別区画の可能性はある。サクの幅は、中・北部は11～33cm、平均17.69cm、南部は5～26cm、平均12.82cmと中北部の方が僅かだが広いが、サクの間隔は中・北部は20～43cm、平均32.73cm、南部は22～45cm、平均33.3cmと大差ない。

遺物 出土遺物は得られなかった。

所見 本遺構の時期は、覆土の状態から近世以降の所産と想定されるに過ぎない。

また、1区は1区北側の調査区外の区画と合わせて一筆の区画であるが、上述のように南部と中・北部の畠は別区画の可能性はある。また、中・北部のサク群は、南東隅部と北西部が分離できる可能性を有する。

14. 2号畠(第29図、PL.12)

概要 本畑は1区南北西隅部に確認、調査された。畝は確認されなかった。

なお、遺存状態は不良であり、南北に分かれて部分的に残り、全容はつまびらかにできなかつた。

位置 187～191-114～123にグリッドに位置する。

規模 [規模]南北：4.26m 東西：8.24m

[サク長さ]0.35～1.45m(平均：0.6244m)

[サク幅]0.07～0.22m(平均：0.1367m)

[サク深さ]0.02～0.06m(平均：0.0378m)

[サク間]0.25～0.58m(平均：0.3575m)

主軸方位 北部：N60°E 南部：N65°E

重複 本畠は単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

覆土 サクは、表土層に似る暗灰黄色砂質土で覆われる。

構造 その分布は南北に分かれるが、遺存状態は不良なため全容はつまびらかでない。南北のサクの規格に大きな相違はなく、底面は平底を呈する。サクとサクの間隔は北側に対して南側(1箇所)は2倍であるが、その間隔は北側の平均35.75cmが基準になっていると思慮される。

遺物 出土遺物は得られなかった。

所見 本遺構の時期は、覆土の状態から近世以降の所産と想定されるに過ぎない。

15. 3号谷(第16図、PL.5)

概要 本谷は埋没谷である。

調査段階で6号土坑として調査を開始し、記録を取ったが、調査の進捗に伴って谷遺構として認識されたものであり、「谷3」としても記録されている。

本谷は谷頭にあたる部分が調査されたに過ぎず、全容をつまびらかにすることはできなかつた。

位置 1区南171～173-092～094グリッドに位置する。

規模・主軸方位 [確認範囲]東西2.3m 南北2.6m

[確認最深度]0.85m

[主軸方位](谷頭)N83°W (谷本体)N53°W

重複 本谷は5号土坑と重複するが、本谷の方が古い。

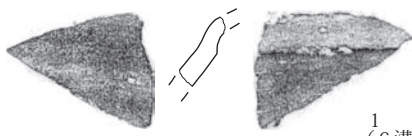
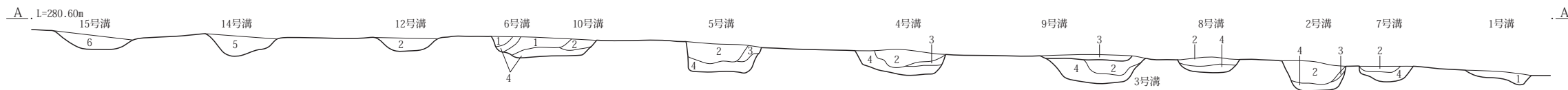
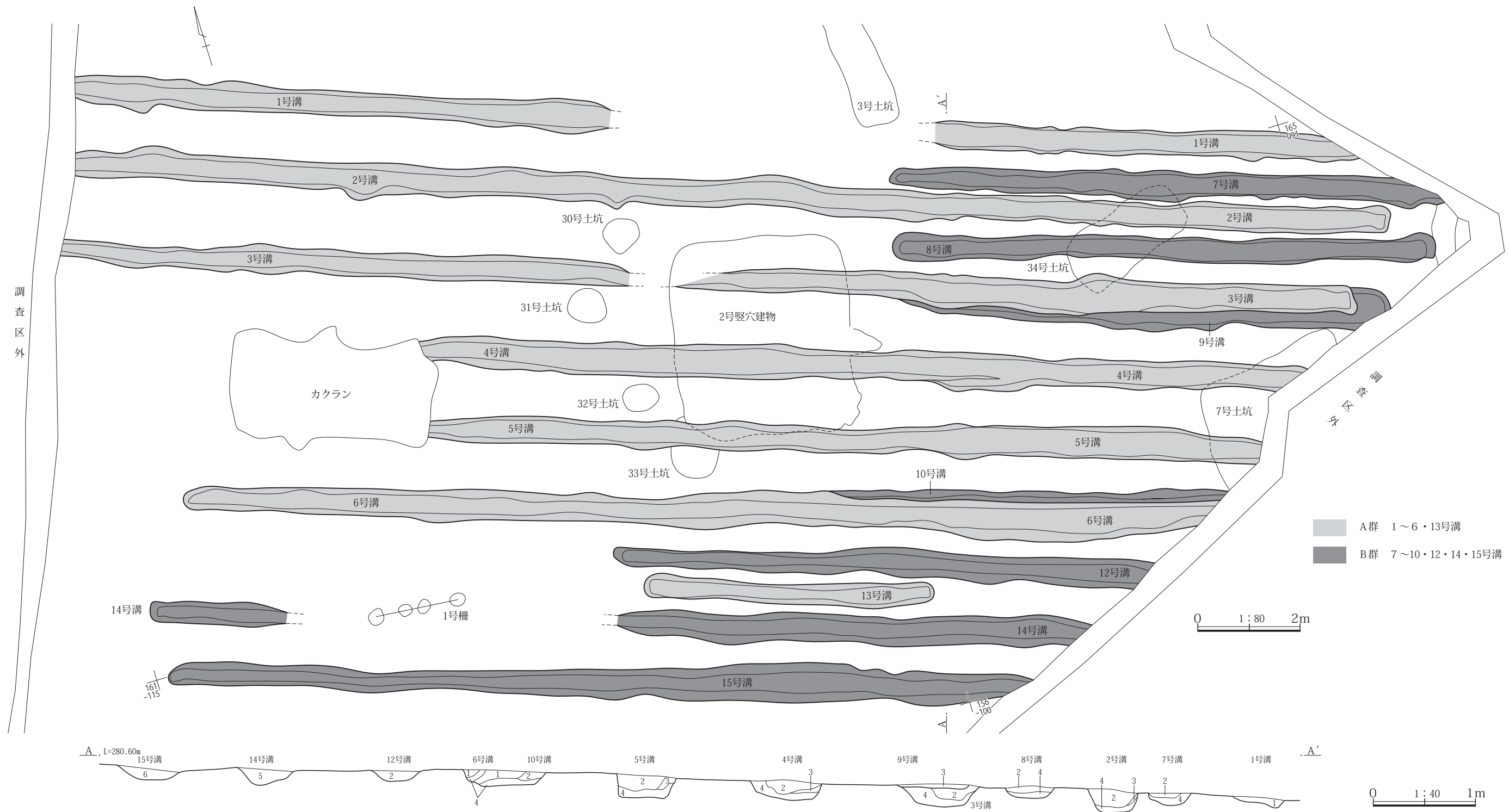
覆土 暗褐色土、黒褐色土で埋没し、その上にAs-Kkを多量に含む暗灰黄色土が堆積する。

構造 本谷は南東方向から堀状に湾入し、ほぼ西方方向に屈曲して1.7mほど延びて谷頭に達する。底面は平底場を呈し、調査区内ではおよそ278.95mほどの高さにある。

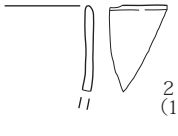
遺物 出土遺物は得られなかった。

所見 本谷の時期は特定できなかつたが、土地の形成と覆土の状態から、古代にはあったものと判断され、中世初めには埋没がほぼ完了していたものと判断される。

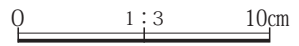
調査区外



1 (6溝A群耕作痕)



2 (15溝B群耕作痕)



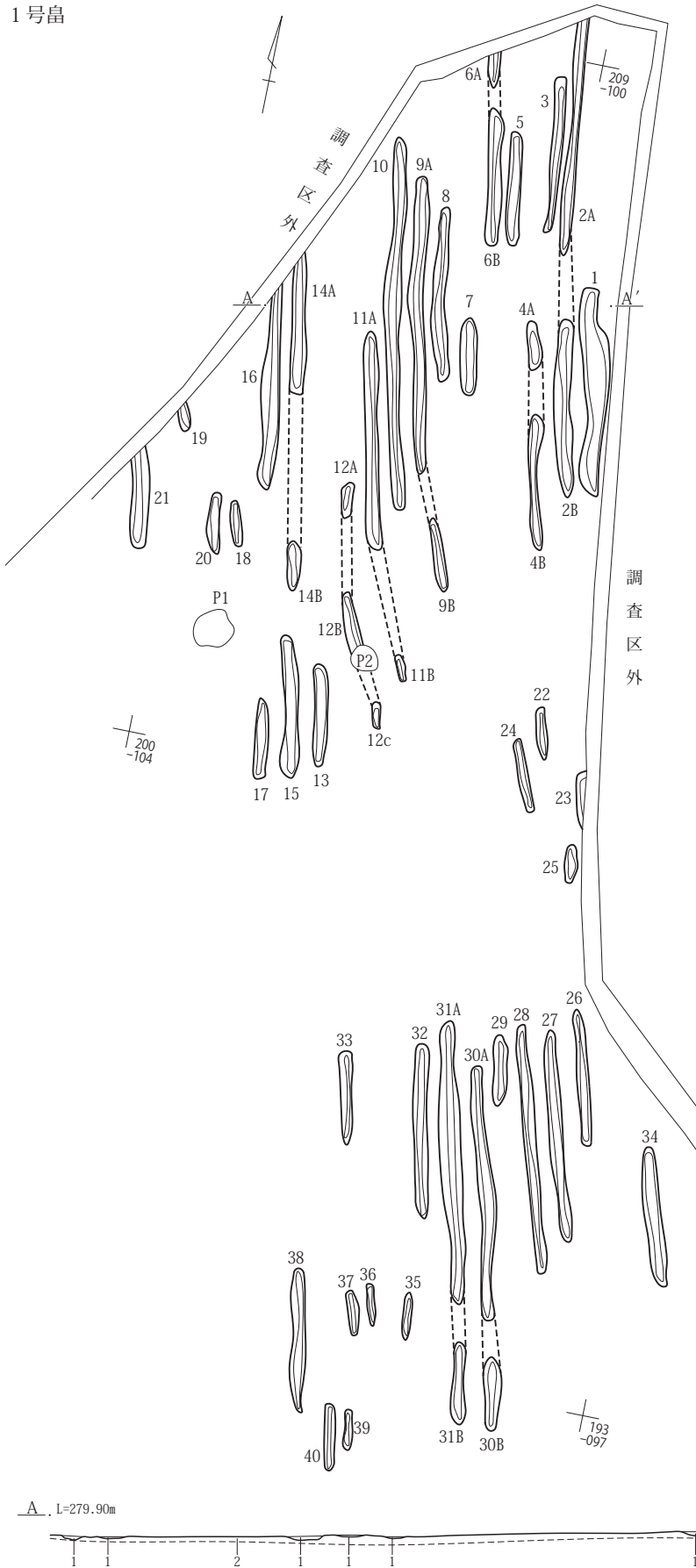
- (1～10・12・14・15号溝)
- 1 黄褐色土(2.5Y5/3) 2層より明るく褐色がかった色調。砂質。褐色粒子が少し混入。黄色・黄褐色の砂が混入。
 - 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 径3～6mm程の礫(軽石?)が目立つ。褐色粒子が少し混入。ブロック状に黄色砂(火砕流堆積物)が入る。
 - 3 黄褐色土(2.5Y5/4) 2層から4層の漸移層。
 - 4 にぶい黄色砂(2.5Y6/3) 榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。
 - 5 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 混入粒子少ない。砂質。にぶい黄色砂が多量に混じる。ブロック状の所もあり。基本土層の1層に似る。
 - 6 暗褐色土(10YR3/3) 径2～4mm程の小礫(軽石?)混入。砂質。ところどころブロック状に黄褐色砂が入る。

第28図 1区南耕作遺構群(1～10・12～15号溝)と出土遺物

第2節 1区の遺構と遺物

1号畠

2号畠



(1号畠)

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 砂質。基本土層1層に似る。混入粒子少ない。
- 2 黄褐色砂(2.5Y5/3) 榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。部分的に粘土状。

(2号畠)

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 粒子等の混入が少ない。砂質。基本土層の1層に似る。



第29図 1区北1号畠、1区南2号畠

第3章 発見された遺構と遺物

表4 1区土坑一覧 寸法内()は残存値

番号	所在グリット	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
1	189~192-098・099	隅丸短冊形	236×51×35	N16°E
2	176~179-095~097	短冊形	345×51×28	N17°E
3	167~170-107・108	短冊形	339×86×33	N6°W
4	189・190-096・097	短冊形	111×82×46	N74°W
5	170~172-092・093	隅丸長方形	167×86×20	N30°W
6	171~173-092~094		東西230×南北260×85	N53°W
7	158~160-091~094	隅丸長方形	292×(188)×25	N80°E
8	182~186-121	隅丸短冊形	299×85×60	N2°E
9	185~187-101~103	隅丸短冊形	(297)×71×83	N41°E
10	185・186-107・108	不整形	185×119×34	N41°E
11	189・190-112・113	隅丸長方形	117×78×43	N22°E
12	177~180-109・110	隅丸短冊形	271×90×25	N7°E
13	178~181-110・111	隅丸短冊形	240×71×21	N8°E
14	175~177-112~114	隅丸短冊形	244×104×27	N14°E
15	139~142-124・125	隅丸短冊形	309×90×67	N19°E
16	141~144-126~128	隅丸短冊形	327×89×11	N16°E
17	182~184-121	隅丸長方形	188×91×55	N2°E
18	180-110・111	方形	72×72×5	N10°E
19	183・184-121・122	隅丸長方形	135×44×5	N25°W
20	157・158-111	楕円形	109×73×12	N12°E
21	156~158-110・111	隅丸短冊形	174×54×45	N13°E
22	156・157-105・106	楕円形	95×93×22	N32°W
23	156・157-104・105	楕円形	103×92×43	N82°E
24	154~156-102・103	隅丸長方形	164×57×18	N22°E
25	155-102・103	円形	88×84×31	N0°
26	152・153-111・112	円形	117×114×19	N0°
27	152・153-109・110	隅丸長方形	83×27×14	N77°E
28	150-115・116	溝状	123×31×10	N71°E
29	145~147-115・116	溝状	257×51×8	N9°W
30	166-103・104	方形	68×62×10	N59°E
31	165-104・105	楕円形	76×67×18	N47°W
32	163-104	楕円形	70×52×8	N84°W
33	161・162-103・104	方形	(61)×94×6	N19°E
34	162~164-093~095	長方形	249×122×53	N71°E
35	191・192-111~113	長方形	298×(92)×36	N79°W
37	192・193-102~104	短冊形	(196)×(133)×40	N87°W

表3 1区南1号柵ピット一覧 寸法内()は残存値

番号	所在グリット	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
P1	160-108・109	楕円形	長31×25×5	N84°W
P2	160-109	楕円形	29×22×6	N46°E
P3	160・161-109・110	隅丸方形	25×22×9	N69°E
P4	160・161-110	隅丸方形	34×30×10	N33°E

表5 1区ピット一覧 寸法内()は残存値

番号	所在グリット	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
1	201-103	不整形	47×42×30	N47°E
2	201-101	不整形	35×30×18	N46°W
3	135・136-126	円形	45×43×35	N0°
4	186-111・112	円形	38×37×16	N0°
5	186・187-113	楕円形	64×49×23	N73°W
6	188-114	楕円形	39×30×15	N50°W
7	188-115	楕円形	40×33×20	N15°E
8	184-115	楕円形	38×32×27	N49°E
9	186-119・120	楕円形	52×46×22	N28°E
10	138・139-127	楕円形	52×46×22	N67°W
11	155-115	円形	40×38×16	N0°
12	153-113・114	楕円形	52×39×15	N63°W
13	140-121	楕円形	35×31×22	N45°W
14	150・151-112・113	楕円形	45×41×14	N37°E

表6 1区溝一覧 寸法内〔 〕は推定値

番号	所在グリット	規模(m)			主軸方位
		検出長さ	最大幅	最大深さ	
1	163~172-089~113	[24.78]	0.70	0.21	N70°W
1西	168~172-103~113	10.67	0.70	0.17	N70°W
1東	163~167-089~097	8.32	0.59	0.21	N71°W
2	162~171-089~113	25.59	0.71	0.24	N71°W
3	161~169-090~114	[25.14]	0.77	0.24	N71°W
3西	165~169-103~114	11.36	0.58	0.08	N70°W
3東	161~165-090~103	13.48	0.77	0.24	N72°W
4	160~165-091~108	16.93	0.76	0.16	N71°W
5	158~164-093~108	16.21	0.69	0.20	N72°W
6	157~164-094~113	20.00	0.77	0.15	N73°W
7	162~166-088~098	10.68	0.60	0.18	N72°W
8	161~165-088~098	10.57	0.56	0.20	N73°W
9	160~165-089~104	9.58	0.82	0.16	N71°W
10	158~160-094~101	7.76	0.27以上	0.09	N73°W
11	127-133~138	1.88	0.30	0.08	N83°W
12	157~160-100~105	10.31	0.58	0.10	N70°W
13	158~160-100~105	5.65	0.50	0.07	N72°W
14	156~162-097~114	[18.06]	0.62	0.11	N71°W
14西	161・162-111~114	3.30	0.49	0.06	N70°W
14東	156~159-097~106	9.30	0.62	0.11	N71°W
15	155~161-098~114	16.52	0.77	0.12	N73°W
16	186~193-100~116	17.20	0.70以上	0.16	N65°W

表7 1区南A群耕作痕(1~6・13溝)サク間一覧

サク間番号	サク間(cm)	位置
1	135	1-2溝間西部
2	169	2-3溝間西部
3	169	3-4溝間西部
4	148	4-5溝間西部
5	148	5-6溝間西部
6	144	1-2溝間東部
7	161	2-3溝間東部
8	152	3-4溝間東部
9	137	4-5溝間東部
10	133	5-6溝間東部
11	142	6-13溝間

表8 1区南B群耕作痕(7~10・12・14・15溝)サク間一覧

サク間番号	サク間(cm)	位置
1	140	7-8溝間西部
2	106	8-9溝間西部
3	127	12-14溝間西部
4	121	14-15溝間西部
5	119	7-8溝間東部
6	113	8-9溝間東部
7	125	10-12溝間東部
8	127	12-14溝間東部
9	113	14-15溝間東部

表9 1区北1号畠サク一覽 寸法内()は残存値

サク番号	所在グリット	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
1	203~206-109	250×32×2	N13°W
2 A	206~209-109・100	(285)×16×3	N12°W
2 B	203~205-109	(214)×22×1	N8°W
3	206~208-100	188×14×3	N8°W
4 A	205-100	58×17×2	N17°W
4 B	203・204-109	165×17×5	N13°W
5	206・207-100	137×16×2	N10°W
6 A	208-101	(43)×14×2	N9°W
6 B	206~208-101・102	166×18×3	N10°W
7	204・205-100	93×20×3	N12°W
8	204~206-101	209×19×3	N10°W
9 A	203~207-101	359×19×2	N12°W
9 B	202・203-100	90×13×3	N22°W
10	203~207-101・102	448×22×1	N11°W
11 A	202~205-101・102	264×18×2	N12°W
11 B	201-100	32×10×2	N26°W
12 A	203-101	43×15×3	N12°W
12 B	201・202-101	(67)×18×1	N27°W
12 C	201・101	32×10×2	N15°W
13	200・201-101	124×16×2	N11°W
14 A	204~206-102・103	(165)×19×2	N10°W
14 B	202・102	61×16×4	N10°W
15	199~201-101・102	172×22×3	N14°W
16	203~205-102・103	(241)×22×2	N10°W
17	199・200-102	97×16×2	N7°W
18	202-103	56×13×3	N19°W
19	203-104	(30)×14×4	N22°W
20	202-103	75×15×3	N9°W
21	202・203-104	(117)×21×1	N11°W
22	200・201-099	63×13×2	N16°W
23	200-098	(69)×(12)×4	N14°W
24	200-099	89×13×3	N23°W
25	199-098	46×16×2	N8°W
26	196・197-097・098	166×15×3	N16°W
27	195~197-097・098	256×17×2	N16°W
28	194~197-097・098	300×16×3	N16°W
29	196・197-098	85×17×1	N10°W
30 A	193~196-098・099	307×20×5	N14°W
30 B	192・193-098	90×22×3	N13°W
31 A	194~197-098・099	344×26×2	N13°W
31 B	192・193-098	100×19×1	N12°W
32	194~196-099	211×16×4	N11°W
33	195・196-100	114×16×1	N14°W
34	194~196-096	170×20×1	N19°W
35	193・194-099	58×10×1	N5°W
36	193・194-099	51×9×1	N17°W
37	193-099・100	54×14×1	N19°W
38	192~194-100	174×19×1	N12°W
39	192-099	49×10×6	N10°W
40	191・192-099・100	81×13×3	N10°W

表10 1区北1号畠サク間一覽

サク間番号	サク間(c m)	位置
1	20	2 A-3間
2	43	3-5間
3	24	5-6 B間
4	28	8-9 A間北部
5	27	9 A-10間
6	37	1-2 B間北部
7	35	2 B-4 A間
8	33	7-8間
9	26	8-9 A間中部
10	32	9 A-10間中部
11	27	10-11 A間北部
12	28	1-2 B間南部
13	41	2 B-4 B間
14	38	8-9 A間南部
15	33	10-11 A間南部
16	30	11 A-12 A間
17	36	13-15間
18	35	15-17間
19	38	26-27間
20	33	27-28間
21	30	28-29間
22	29	29-30 A間
23	35	30 A-31 A間
24	32	31 A-32間
25	43	30 B-31 B間
26	23	39-40間
27	37	40-38間

第3節 2区の遺構と遺物

1. 2区の遺構(第30～36図、PL.13～16・24)

本節では、平成29年度調査区域のうち「2区」の遺構、遺物について報告する。

2区は東側を1区南(地区)に接するが、北側が1区北(地区)との間で約20m間、大きく削平されていたため、調査することができなかった。

また、2区は北西部が、50～60cmの比高差を以て一段落ちており、上位面では区の中央やや南西寄りに径4.5mの範囲に、30～40cmほどの高さで高まる部分がある。

2区では9基の土坑が散在し、区北寄りに1基、南部に2基のピットが残されている。また、調査区西壁に沿うように、その中部から南部にかけて1条の大溝が掘削されている。区北部と中北部に、新しい時期の所産と認識される、ほぼ東西走行のサクからなる耕作痕が残る。

2. 長方形の土坑群(第31図、PL.13・14・24)

概要 本項では、2区の土坑のうち、長方形プランを呈する6基の土坑、すなわち52・56～60号土坑について記す。

位置 2区北部に58・59・60号土坑、2区中東部に57号土坑、中部に56号土坑、南部に52号土坑が分布する。

表11に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位 [規模]長径：1.14～2.4m
(平均：1.875m)

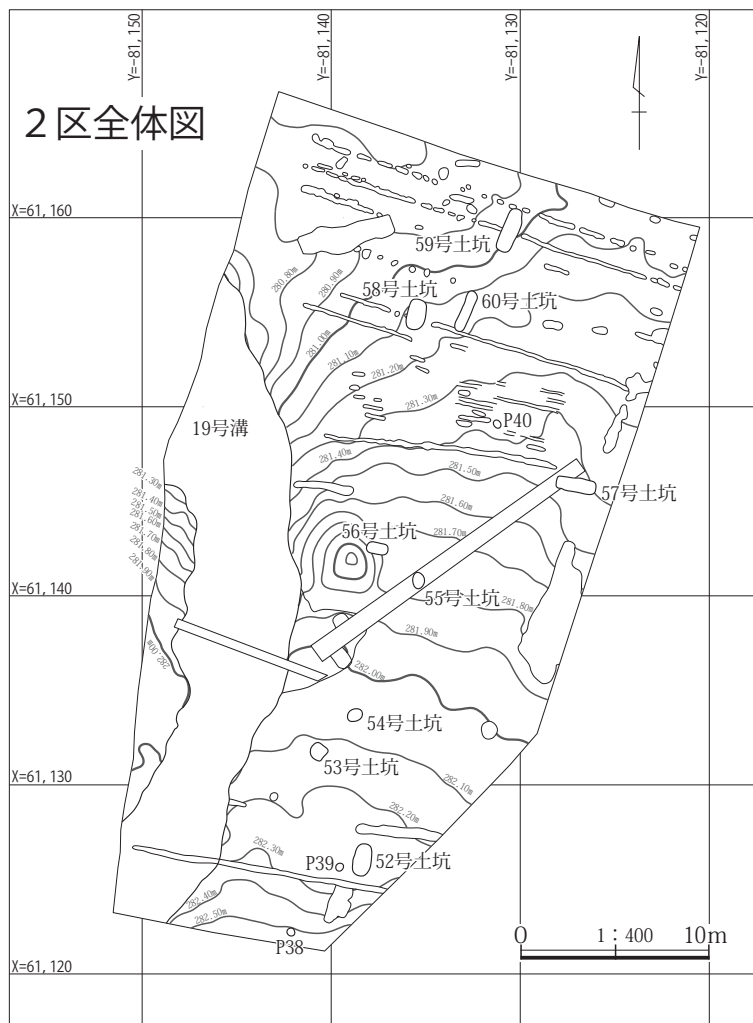
短径：0.58～0.97m(平均：0.7933m)

深さ：0.15～0.82m(平均：0.4937m)

[主軸方位] 57号土坑がほぼ東西方向に向ける他は、いずれもほぼ南北方向に主軸を向けている。

なお、個々の土坑の規模と主軸方位は表11に記した。

重複 本土坑群の土坑のうち58～60号土坑は、上述の耕作痕に切られるが、52・56・57号土坑は他遺構との重複関係はなかった。



第30図 2区全体図

覆土 個々の土坑の覆土は、各遺構図に記入した土層注記を参照願いたいだが、52号土坑が暗褐色土で埋没している他は、黒褐色土を含む土壌で埋没する傾向が見受けられた。

構造 本土坑群の土坑のプランは、57・59・60号土坑は隅丸の短冊形、52・56・58号土坑は隅丸の長方形を呈する。

また、掘削形態はいずれも箱状で、掘削底面は平底を呈していた。

なお、56号土坑は他の土坑に比して規模が小さい。

遺物 本土坑群からの出土遺物は60号土坑から陶器瀬戸・美濃碗(1)が得られたに過ぎなかった。

所見 出土遺物もなく、本土坑群各土坑の時期を特定するには至らなかった。埋土は中世以前の傾向を示すが、掘削形態からは中・近世の所産である可能性が考慮される。

また、本土坑群各土坑は、掘削形態から貯蔵穴と推定することができる。

3. 楕円形・方形の土坑群

(第32図、PL.14)

概要 本項では楕円形、方形プランの3基の土坑、すなわち53～55号土坑について記す。

位置 これらの土坑は2区中南部に位置する。

表11に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位 [規模]径：0.63～0.86m

(平均：0.785m)

深さ：0.29～0.40m(平均：0.3267m)

なお、個々の土坑の規模と主軸方位は表11に記した。

重複 本土坑群の土坑はいずれも単独であり、他遺構との重複関係は見られなかった。

覆土 個々の土坑の覆土は、各遺構図に記入した土層注記を参照願いたいだが、いずれも黒色土を含んでいる。

構造 本土坑群の土坑のプランは、53号土坑は方形、54・55号土坑は楕円形を呈する。掘削形態は53号土坑は箱状で掘削底面はおおむね平底を呈し、54・55号土坑は丸底場の掘削形態を呈する。

遺物 本土坑群各土坑からの出土遺物は得られなかった。

所見 本土坑群各土坑の時期を特定するには至らなかった。覆土の状態からは中世以前の所産の可能性が考慮される。

また、各土坑の掘削意図は想定されなかった。

4. ピット(第33図、PL.14)

概要 本項では柱穴状のピットについて報告する。

位置 2区では区中北部で40号ピットがあり、区南端近くに38・39号ピットがある。

各ピットの所在グリッドは表12に記した。

規模・主軸方位 径は0.38～0.47m(平均：0.425m)

深さ 0.15～0.33m(平均：0.25m)

個々のピットの規模等については表12に記した。

重複 本ピット群の各ピットは単独にあったが、40号ピットは新しい耕作痕の範囲内にあるものの、重複関係は見られなかった。またいずれのピットも他の遺構との重複関係は見られなかった。

覆土 個々のピットの覆土は、各遺構図に記入した土層注記を参照願いたいだが、全体としてはいずれのピットも黒褐色土で埋没している。

構造 本ピット群のピットのプランいずれも楕円形を呈し、掘削底面は38・39号ピットは丸底、40号ピットは平底を呈する。

遺物 出土遺物は得られなかった。

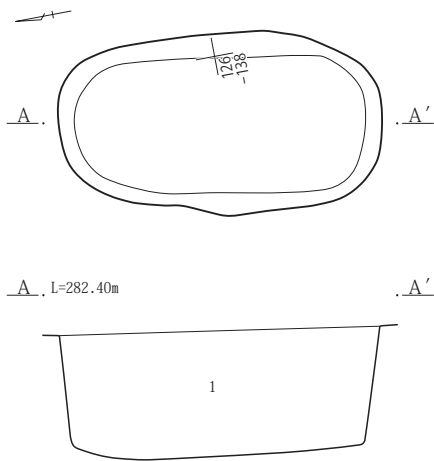
所見 本ピット群の各ピットからの出土遺物もなく、時期は特定できなかったが、覆土の状態から中世以前の所産の可能性が考慮される。



2区を東から望む

第3章 発見された遺構と遺物

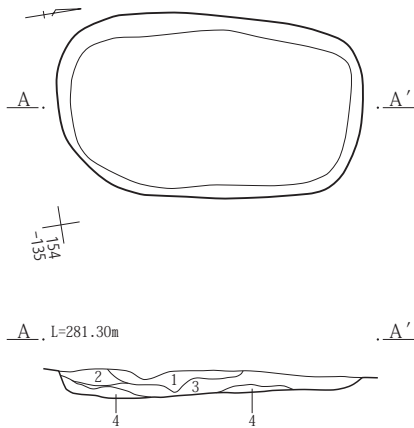
52号土坑



(52号土坑)

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 径2~5mmの軽石少量含む。
径10~70mmの礫少量含む。

58号土坑



(56号土坑)

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 径2mm以下の黄橙色軽石多量に含む。
2 黒褐色土(10YR2/2) 径1~10mmの軽石多量に含む。径100mmの礫1つ含む。

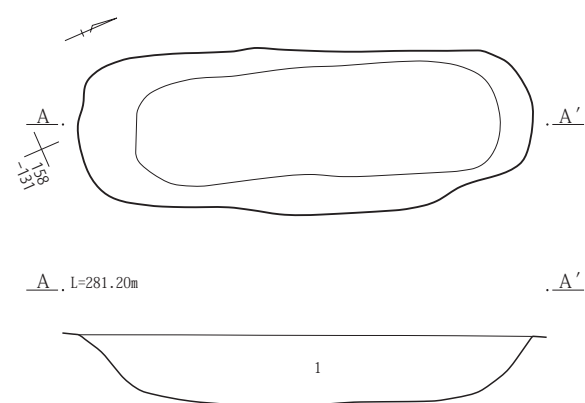
(57号土坑)

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 径2~5mmの軽石若干。径10~20mmの礫若干含む。
2 地山の2次堆積。
3 黒褐色土(10YR2/2) 径2~10mmの軽石多量に含む。
4 地山の2次堆積。
5 暗褐色砂礫層(10YR3/3) 径5~20mmの礫少量含む。粒状の軽石若干含む。
6 暗褐色砂礫層(10YR3/3) 径300mm大の礫大量に含む。小さい礫はほぼ無し。砂層に近い。

(58号土坑)

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 耕作痕の掘り込み。径2~10mmの軽石若干含む。径200mmほどの礫含む。径10~50mmの礫多量に含む。
2 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 地山の2次堆積。
3 黒褐色土(10YR2/2) 径2~10mmの軽石多量に含む。小礫若干含む。
4 黄褐色砂質土(10YR5/6) 地山。

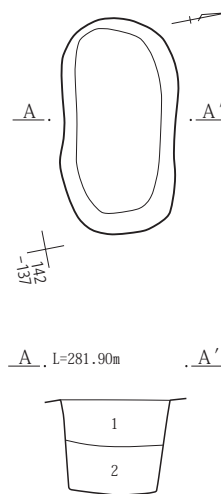
59号土坑



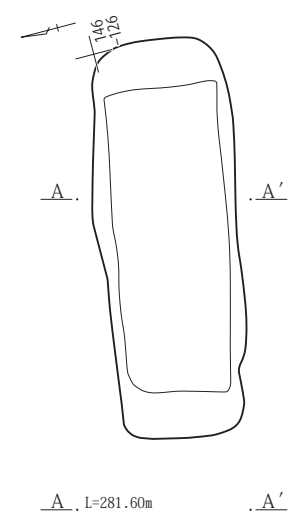
(59号土坑)

- 1 黒褐色砂質土(10YR2/3) 径2~5mmの軽石若干含む。
径8~10mmの礫若干。径200mmの礫を3つ含む。

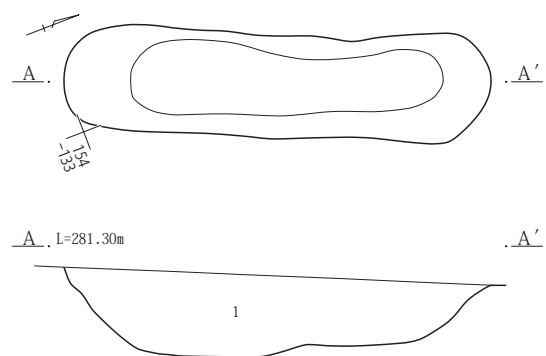
56号土坑



57号土坑

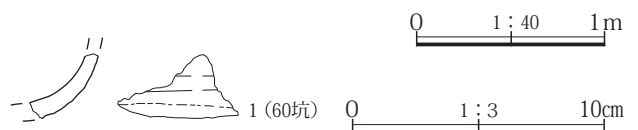


60号土坑



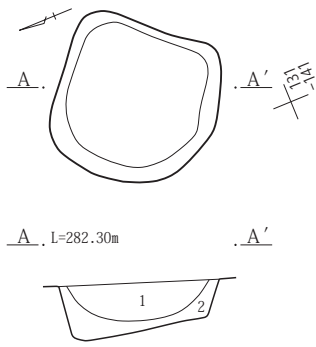
(60号土坑)

- 1 黒褐色土(10YR2/3) 径2~5mmの軽石若干含む。径5~20mmの礫少量。黄褐色ブロック土下部に少量含む。

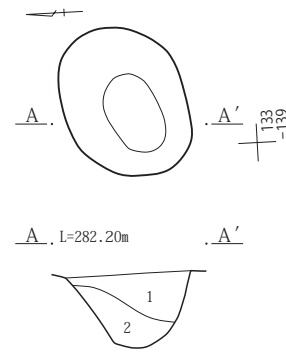


第31図 2区52・56~60号土坑と出土遺物

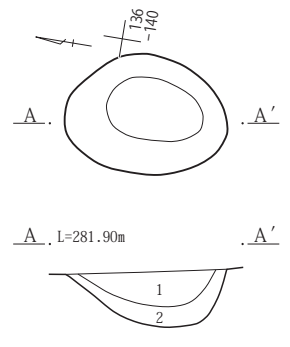
53号土坑



54号土坑



55号土坑



(53号土坑)

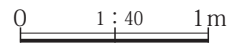
- 1 黒褐色砂質土(10YR2/2) 径50mmの礫1つ含む。
黄橙色粒若干含む。
- 2 暗褐色砂質土(10YR3/3) 径5～10mmの礫若干含む。
地山の2次堆積。

(54号土坑)

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 径2～5mmの軽石少量含む。
径50mmの礫若干含む。
- 2 黄褐色砂礫層(10YR5/6) 径2～5mmの軽石多量
に含む。

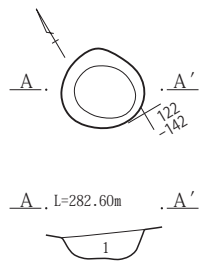
(55号土坑)

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 径2～5mmの軽石少量含む。
- 2 暗褐色砂質土(10YR3/3) 径2～10mmの礫少量含む。

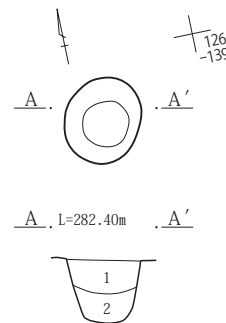


第32図 2区53～55号土坑

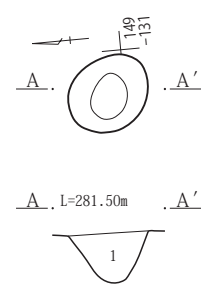
38号ピット



39号ピット



40号ピット



(38号ピット)

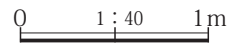
- 1 黒褐色土(10YR2/2) 径5～10mmの礫若干含む。
砂ブロック若干含む。

(39号ピット)

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 径2～10mmの軽石少量含む。
径5～10mmの礫若干含む。
- 2 黄褐色砂質土(10YR5/6) 黒色土混じり。地山の
2次堆積。

(40号ピット)

- 1 黒褐色砂質土(10YR2/3) 径50mmほどの礫若干含む。
黄橙色粒若干含む。



第33図 2区38～40号ピット

5. 19号溝(第34図、PL.15・24)

概要 本溝は弧状に走行する大型の溝遺構である。

南北端共に調査区外に出ていて、全容はつまびらかでない。

また、南西接する3区に現れていない。

位置 本溝は2区南西部にあり、122～156-141～151グリッドに位置する。

規模・主軸方位 [規模]確認長：29.2m 幅：3.8～6.2～11.6m以上 深さ：0.4～2.23m

[主軸方位] N33°W～N36°E

重複 本溝は単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

覆土 黒褐色土等で埋没し、上位に粕川テフラ(As-Kk)が堆積する。

構造 本溝はほぼ南南西方向から調査区へ入り、弱く東に膨らむ弧状の走行を取って北行し、北西方向調査区外に出ている。

箱堀状の掘削形態を呈し、溝の幅員の過半は3.8～6.2mの範囲に収まる。底面は平底状を呈するが、北側に向かう傾斜見られ、調査区の中ほどで30cmほどの段差が設けられて北側が低くなる。この段差を境に、南側の勾配率は5.98%、北側の勾配率は11.1%を測る。

遺物 本溝からは、土師器杯の口縁破片(1)、微細剥離痕ある剥片が出土したに過ぎない。

所見 本溝の出土遺物と土層の堆積状況から推して、本溝はおよそ平安時代(9世紀)の所産と判断される。

本溝の掘削意図は判然としないが、底面近くの土層に礫層や礫を多く含む層が見られることから、流水の可能性を有するものの、その形態から用水であった可能性は低いように思われたため、土地の排水を目的とした溝であった可能性が考慮される。

また、本溝の南側は3区東縁以東を南方に延伸していると判断される。

6. 耕作痕(第35図、PL.16)

概要 2区北半部では耕作痕が確認された。これらは近・現代に係る可能性を有するものである。

なお、走行の違いから北側のものをA群、南側のものをB群に分けられる。

位置 146～164-120～141にグリッドに位置する。

(A群)153～164-120～141グリッド

(B群)146～151-127～141グリッド

規模 (全体)[規模]ほぼ南北：19.5m ほぼ東西：21.0m

(A群)[規模]ほぼ南北：11.5m ほぼ東西：21.0m

[サク長さ]20.9m以下

[サク幅]0.18～0.6m(平均：0.3665m)

[サク間]1.0～1.39m(平均：1.22m)

(B群)[規模]ほぼ南北：4m ほぼ東西：12.4m

[サク長さ]12.4m以下

[サク幅]0.18～0.5m(平均：0.2842m)

[サク間]0.18～0.73m(平均：0.4449m)

主軸方位 (A群)N73°W (B群):N81°W

重複 本耕作痕のうちA群は59・60号土坑と重複してこれらを切る。

B群は他の遺構との重複は見られなかった。

覆土 サクは、A群、B群共に表土層土に似た土壤で埋没している。

構造 本耕作痕の遺存状態は良好とは言い難く、その構造はつまびらかにできなかった。

サクの幅はA群はB群の1.29倍と、両者の規格に大きな相違はなかったが、サクとサクの間隔はA群はB群の2.7倍あった。

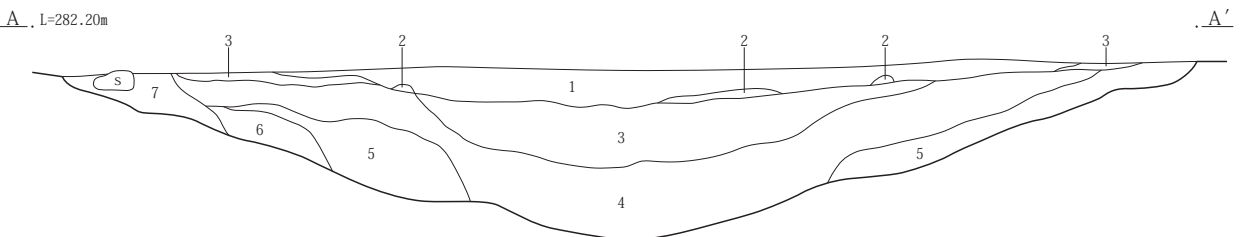
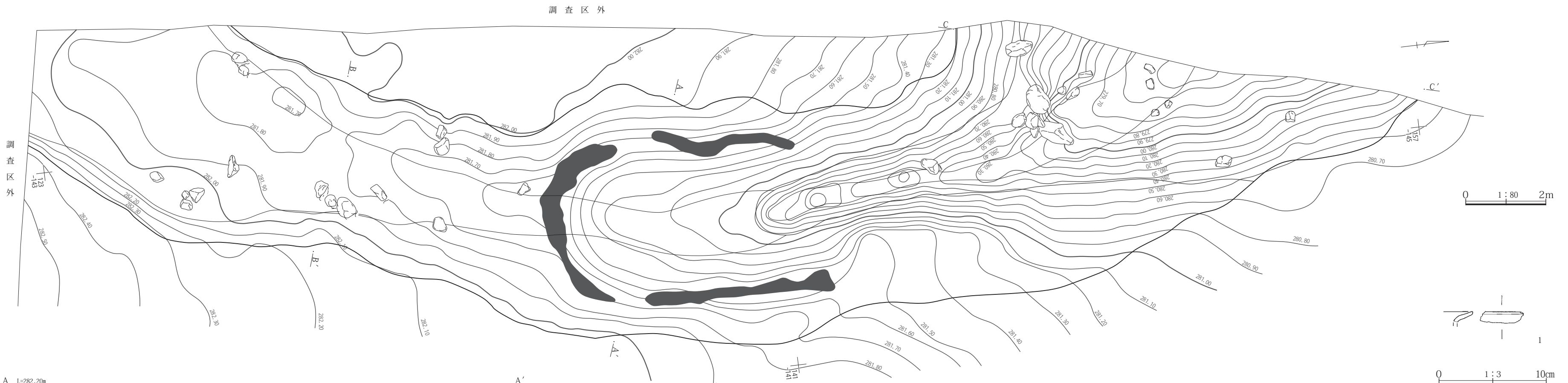
遺物 出土遺物は得られなかった。

所見 本遺構の時期は、覆土の状態から近世以降、近・現代に近い時期の所産と想定される。

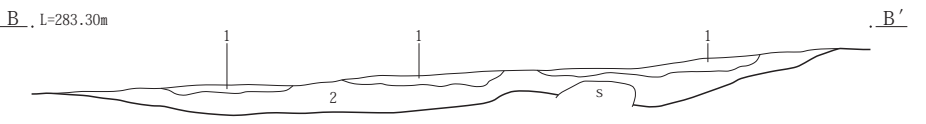
本遺構はサクの集合体であり、畝等の耕作痕と判断される。

7. 遺構外の出土遺物(第36図、PL.24)

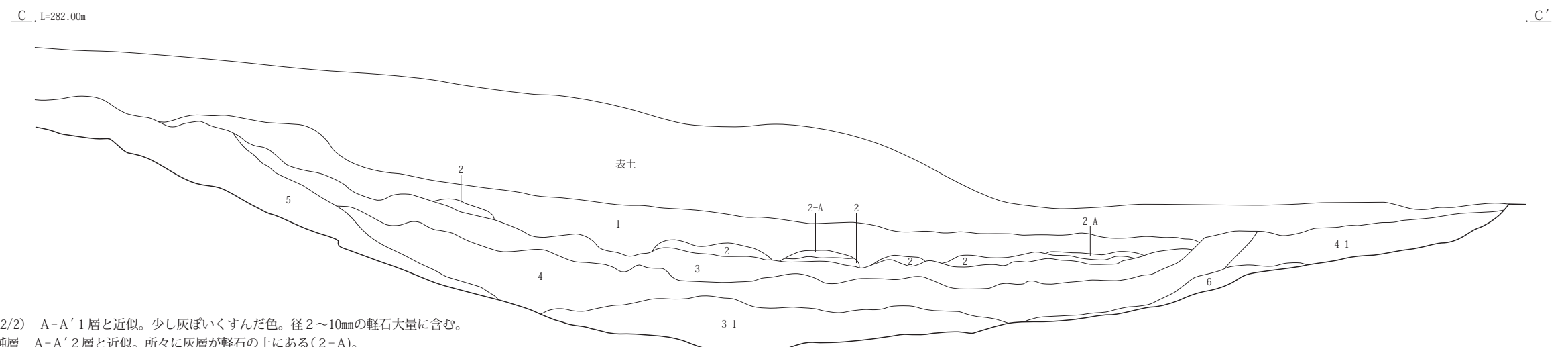
概要 2区の遺構外の出土遺物としては円筒埴輪と思われる埴輪片(1)と土師器甕片3片があった。



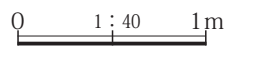
- (19号溝) A-A'
- 1 黒褐色砂質土(10YR3/2) 締りあまりなし。径2~10mmの軽石多量に含む。
 - 2 粕川テフラの純層 締りあまりなし。径2~5mmの軽石。砂質土。
 - 3 黒褐色砂質土(10YR2/2) 締りあまりなし。径5~50mmの礫多量に含む。
 - 4 黒褐色砂質土(10YR3/2) 締りあまりなし。径5~50mmの礫若干含む。
 - 5 黒褐色砂質土(10YR2/2) 4と6層の混在層。やや明るい。径10mmの礫若干含む。
 - 6 黄褐色土(10YR5/6) 砂礫層。径10~50mmの礫少量含む。2次堆積の層か。



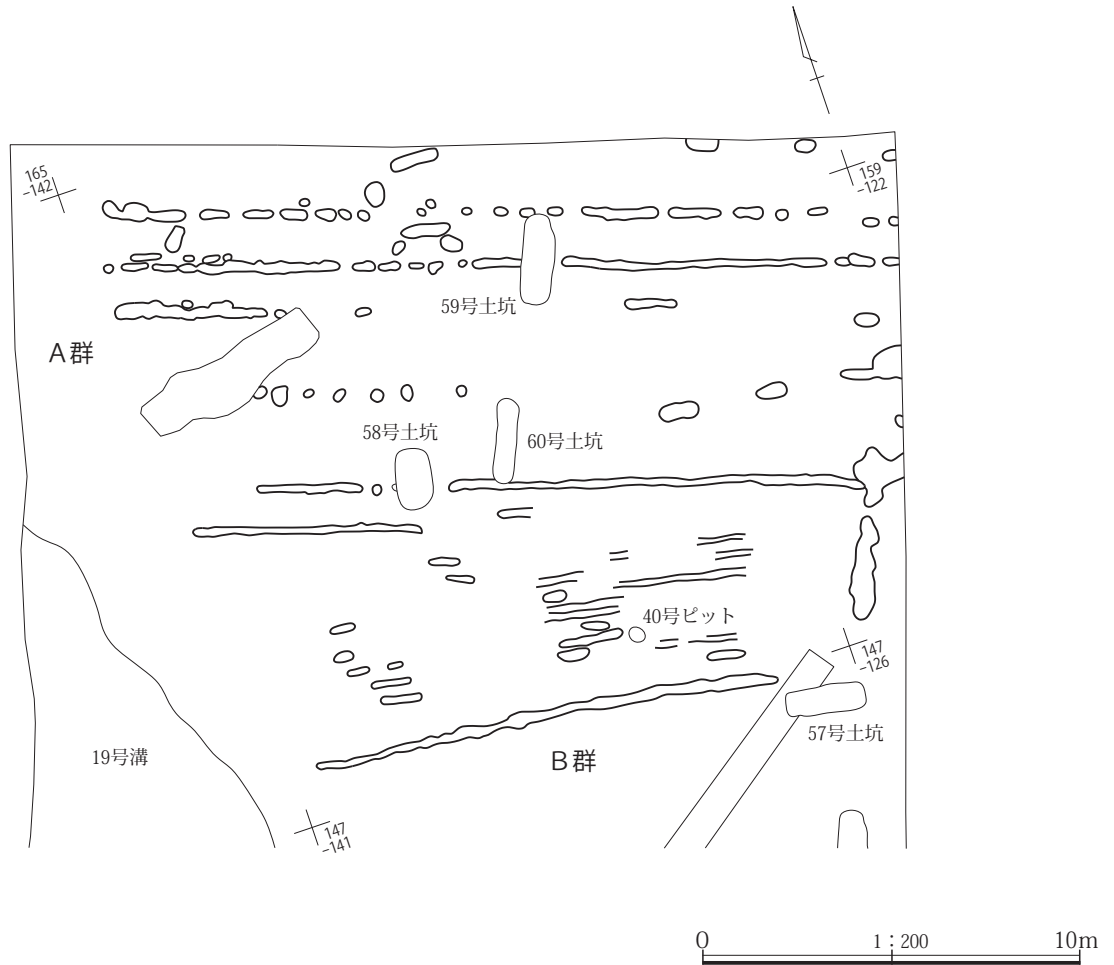
- (19号溝) B-B'
- 1 A-A' 4層と近似。径1~5mmの軽石少量含む。
 - 2 A-A' 5層と近似。黒色と黄褐色の混土層。



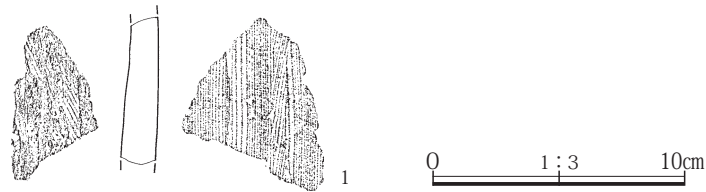
- (19号溝) C-C'
- 1 黒褐色土(10YR2/2) A-A' 1層と近似。少し灰ばいくすんだ色。径2~10mmの軽石大量に含む。
 - 2 粕川テフラの純層 A-A' 2層と近似。所々に灰層が軽石の上にある(2-A)。
 - 2-A 粕川の灰層(5BG5/1) 青灰色。
 - 3 黒褐色土(10YR2/2) A-A' 3層と近似。径2~10mmの軽石少量含む。径5~50mmの礫。
 - 3-1 黒褐色土(10YR2/2) 径200~300mm大の礫を多量に含む。最深部に特に多く含む。
 - 4 黒褐色土(10YR2/2) A-A' 4層と近似。砂混じりの径5~200mmの礫多量に含む。
 - 4-1 礫が少量含む。
 - 5 黒褐色と黄褐色の混土層 A-A' 5層と近似。



第34図 2区19号溝と出土遺物



第35図 2区耕作痕



第36図 2区遺構外の出土遺物

表11 2区土坑一覧

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
52	137・138-125・126	隅丸長方形	171×97×71	N11°E
53	131・132-140・141	方形	85×84×29	N41°E
54	133・134-138・139	楕円形	85×68×40	N58°E
55	140・141-135	楕円形	86×63×29	N5°W
56	142-137・138	隅丸長方形	114×62×50	N62°W
57	145・146-126~128	短冊形	211×76×82	N79°W
58	154・155-134~136	隅丸長方形	163×97×15	N9°E
59	158~160-129~131	短冊形	240×86×36	N21°E
60	153~156-132・133	短冊形	226×58×44	N21°E

表12 2区ピット一覧

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
38	122-141・142	楕円形	44×41×15	N60°W
39	125-139	楕円形	47×39×33	N29°E
40	148・149-131	楕円形	46×38×27	N37°W

第4節 3区の遺構と遺物

1. 3区の遺構(第37～50図、PL.17～23・24)

本節では、平成29年度調査区域のうち「3区」の遺構、遺物について報告する。

3区は、東側が現道を隔てて2区に接する。

また3区は、北西縁沿いの区画が、北部で3.43%、南西部で5.81%の勾配で、北西側方向に落ちている。また中部(南東部)では北東-南西9.3m、北西-南東4.8mを測る範囲で、長方形プランに0.5～1mほど削られ、その西側はさらに40cmほど低く、北東-南西10m、北西-南東5m以上を測る平坦面が設けられている。

3区では掘立柱建物3棟、竪穴状遺構2基、土坑16基、ピット10基があった。このうち掘立柱建物は3区南部、竪穴状遺構は南部と南部に近い中部、土坑は北部南端から中・南部、ピットは掘立柱建物周辺に確認された。

また、形態と走行の違いから6面を数える近世以降の新しい時期の耕作痕が、区全域で確認された。

2. 1号掘立柱建物・1号竪穴状遺構

(第38・39図、PL.19・20・24)

概要 1号掘立柱建物は、1×2間の掘立柱建物であり、1号竪穴は竪穴状遺構であるが、両者は位置的に単一の遺構である可能性を有するため、併せて報告する。

位置 1号掘立柱建物と1号竪穴状遺構は3区南西部中央に位置する。

1号掘立柱建物：104～109-205～210グリッド

1号竪穴状遺構：105～108-206～209グリッド

規模・主軸方位

[1号掘立柱建物][規模] 4.84×4.42m

[主軸方位] N87°W

[P1]径：0.3×0.27m 深さ：0.34m

[P2]径：0.37×0.33m 深さ：0.23m

[P3]径：0.28×0.26m 深さ：0.16m

[P4]径：0.3×0.27m 深さ：0.31m

[P5]径：0.36×0.34m 深さ：0.23m

[P6]径：0.3×0.28m 深さ：0.33m

[梁間] P1-P6：4.03m P2-P5：3.95m

P3-P4：3.93m

[桁間] P1-P2：2.25m P2-P3：2.21m

P4-P5：2.22m P5-P6：2.29m

[1号竪穴状遺構]長軸：2.84m 短軸：2.79m

深さ：0.45m

重複 1号竪穴状遺構は1号掘立柱建物の中に納まるように重複しているが、新旧関係は特定できなかった。

なお、1号掘立柱建物と1号竪穴状遺構は、新しい時期の耕作遺構と重複してこれに切られるが、共にその他の遺構との重複関係は認められなかった。

覆土 1号掘立柱建物の柱穴は、暗褐色土で覆われている。

また、1号竪穴状遺構は小礫を多く含む暗褐色砂質土で埋没しているが、小礫を含まない暗褐色砂質土がいわゆる三角堆積を形成していた。

構造 1号掘立柱建物は、梁間1間型の建物で、その柱穴の径は0.26～0.37mで平均0.305m、深さは0.16～0.34mで平均0.2667mを測る。また、梁間は3.93～4.03m、平均3.97m、桁間は2.21～2.29m、平均2.24mを測る。その間尺は、梁間の測定値が2間分であることを加味すれば、桁間が梁間に対して3割増しで長い。柱の配置は東縁を底辺とした台形を呈するが、ほぼ整った配置を示している。

一方、1号竪穴状遺構は、隅丸方形のプランを呈する。掘削形態は箱形で、底面は平底を呈する。

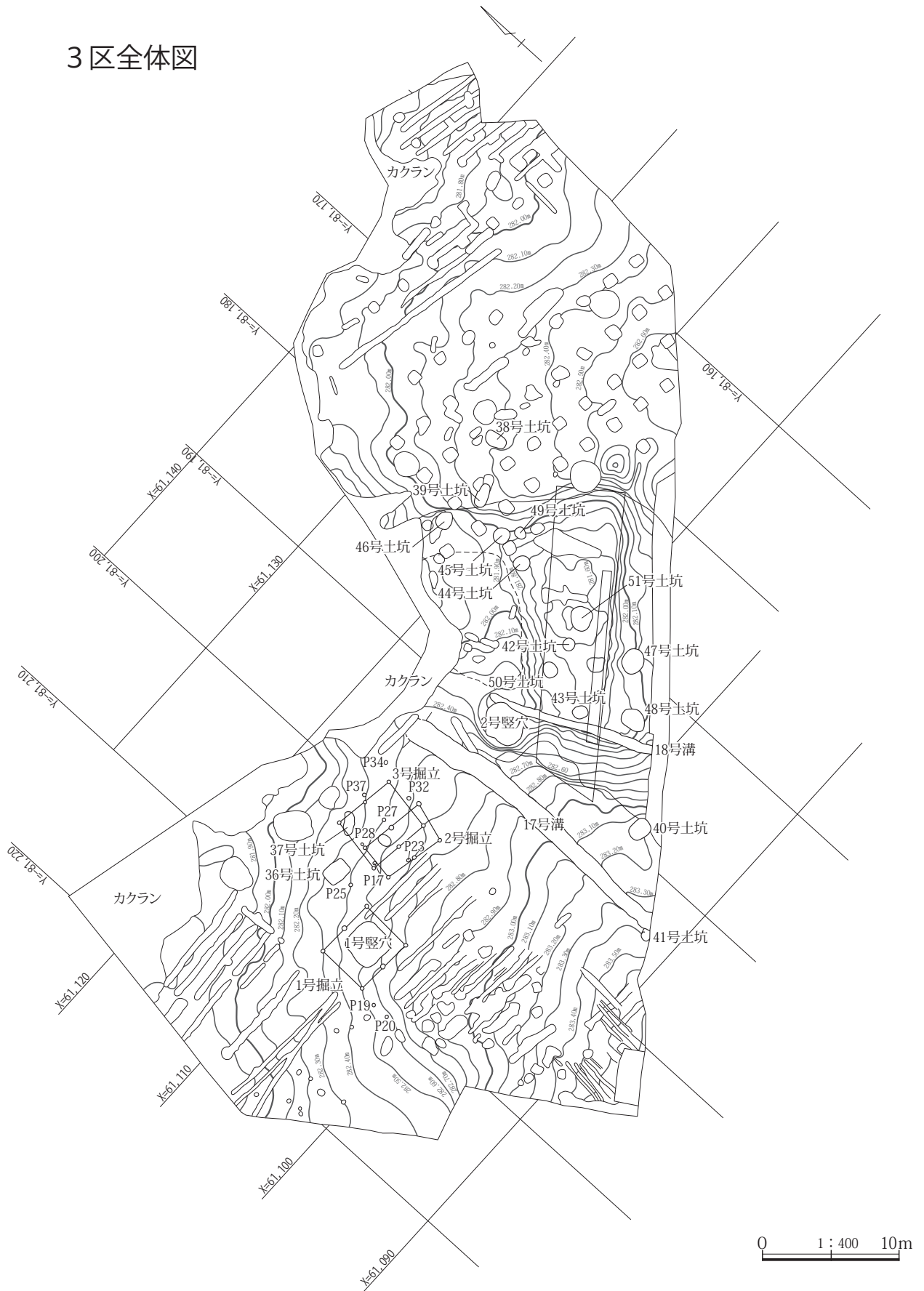
また1号竪穴状遺構の中心は、1号掘立柱建物の棟のライン上にあり、1号掘立柱建物の中心より0.35m東に寄る位置にある。また竪穴状遺構の壁のラインは、1号掘立柱建物の南北いずれの桁から0.4m、東の梁からは0.5m、西の梁からは1.2mほどの位置にある。

遺物 1号掘立柱建物からの出土遺物は得られなかった。また、1号竪穴状遺構からは在地系内耳鍋片(1)が出土した。

所見 1号掘立柱建物は梁間1間型の建物であり、柱穴の径が30cm前後であることから推して、中世の所産と認識される。また、1号竪穴状遺構は出土遺物から中世の所産の可能性があり、1号掘立柱建物と一括の遺構の可能性が認識されることから、本竪穴状遺構も中世の所産の可能性が考慮される。

また、1号掘立柱建物の棟方向と1号竪穴状遺構の主

3区全体図



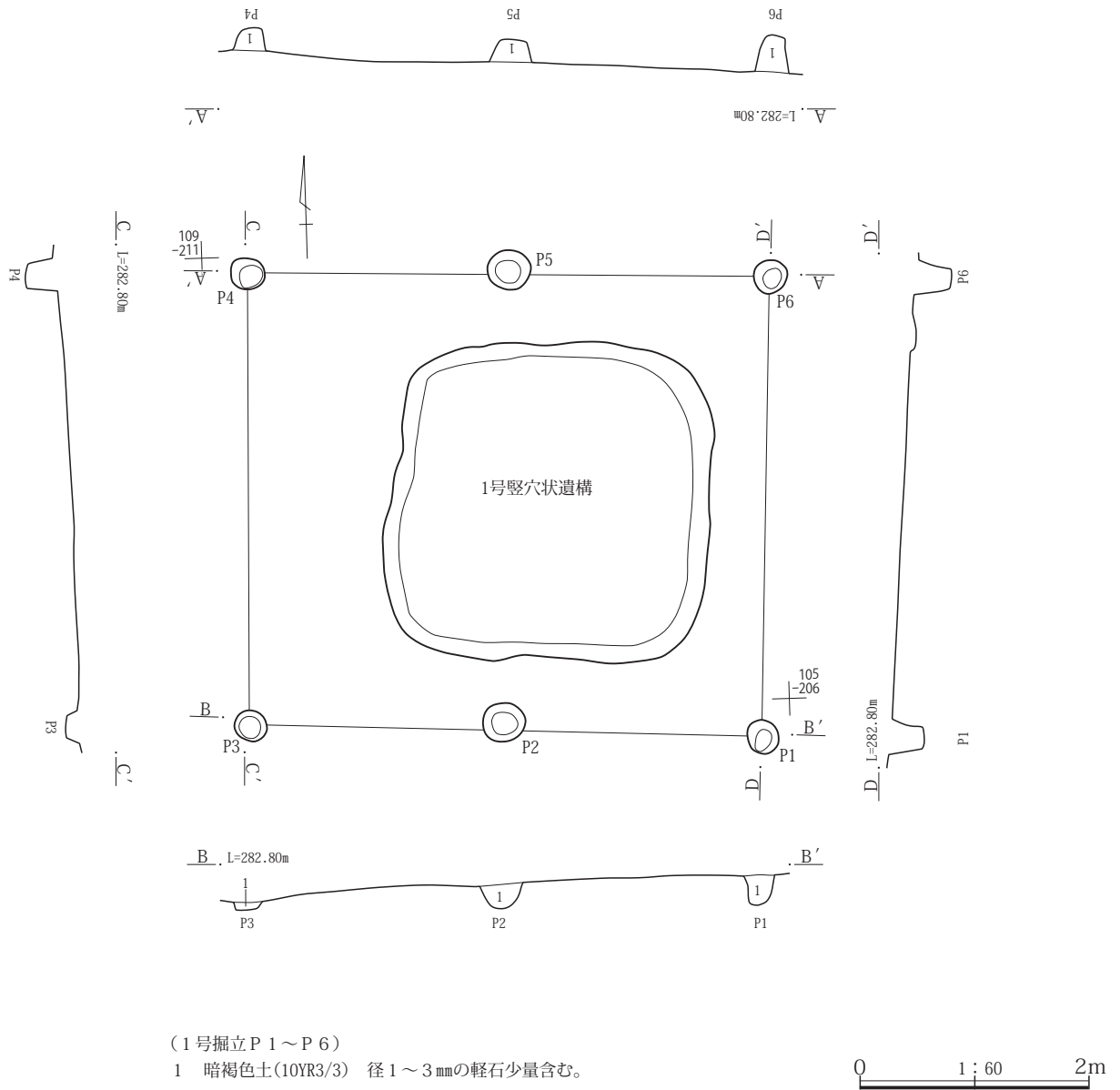
第37図 3区全体図

第3章 発見された遺構と遺物

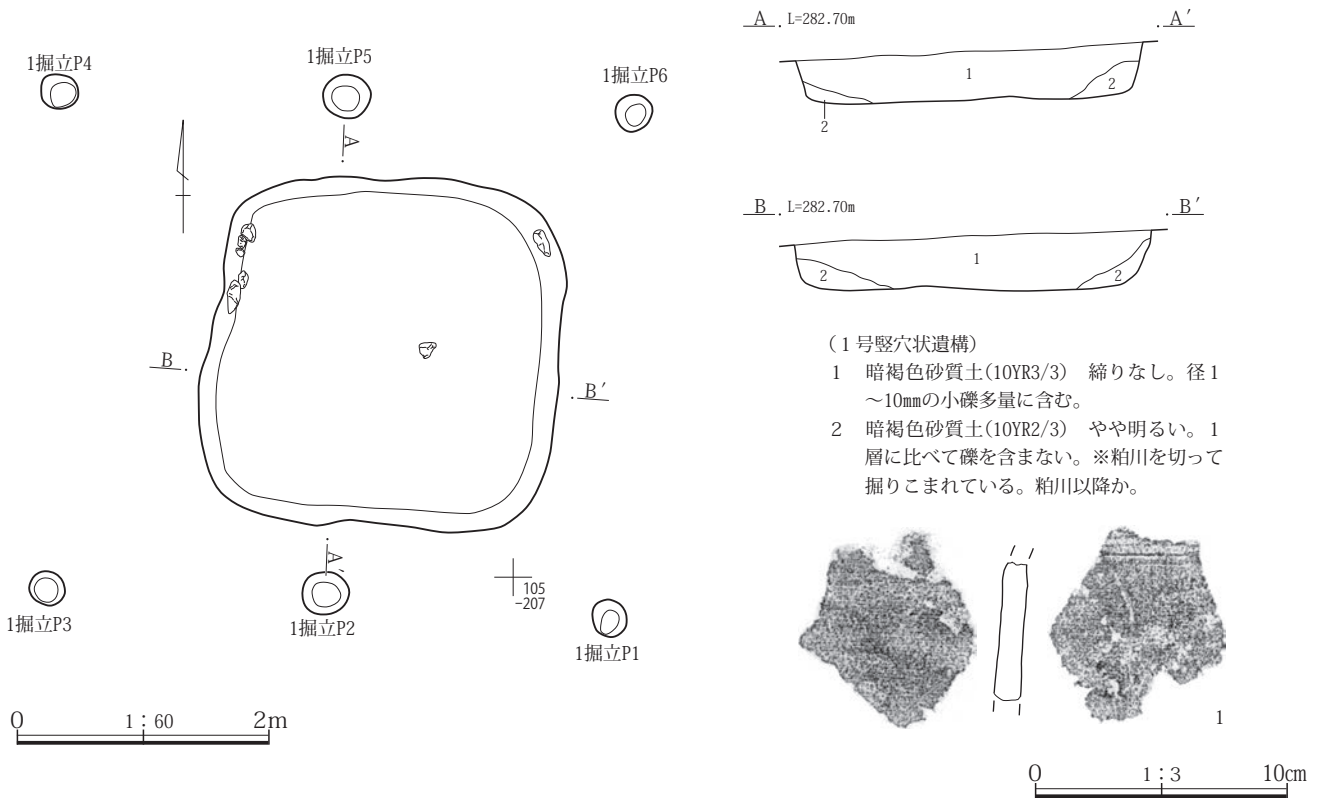
軸方向は、2・3号掘立柱建物の棟方向と近似した方位を示すことから、同時代の建物であった可能性が考慮される。

意図は特定できなかったが、竪穴状遺構が中世の竪穴建物であると考えれば、本竪穴状遺構は倉庫の可能性が考慮され、1号掘立柱建物はその上屋の可能性が考慮される。

1号掘立柱建物の建築意図と、1号竪穴状遺構の掘削



第38図 3区1号掘立柱建物



第39図 3区1号竪穴状遺構と出土遺物

3. 2号掘立柱建物(第40図、PL.19)

概要 2号掘立柱建物は、1×2間の掘立柱建物である。

本建物は、調査途中で掘立柱建物と認識されたもので、18号ピット(P3)、21号ピット(P4)、24号ピット(P2)、26号ピット(P5)、30号ピット(P1)、31号ピット(P6)で構成されている。

位置 本建物は3区南西部中央部のやや北東よりに位置する。

107～111-197～203グリッドに所在する。

規模・主軸方位

〔規模〕 5.36×3.36m

〔主軸方位〕 N78°W

〔P1〕径：0.28×0.25m 深さ：0.45m

〔P2〕径：0.29×0.29m 深さ：0.28m

〔P3〕径：0.29×0.27m 深さ：0.37m

〔P4〕径：0.3×0.24m 深さ：0.35m

〔P5〕径：0.35×0.35m 深さ：0.39m

〔P6〕径：0.35×0.31m 深さ：0.39m

〔梁間〕 P1-P6：3.06m P2-P5：2.69m

P3-P4：2.77m

〔桁間〕 P1-P2：2.25m P2-P3：2.39m

P4-P5：2.39m P5-P6：2.71m

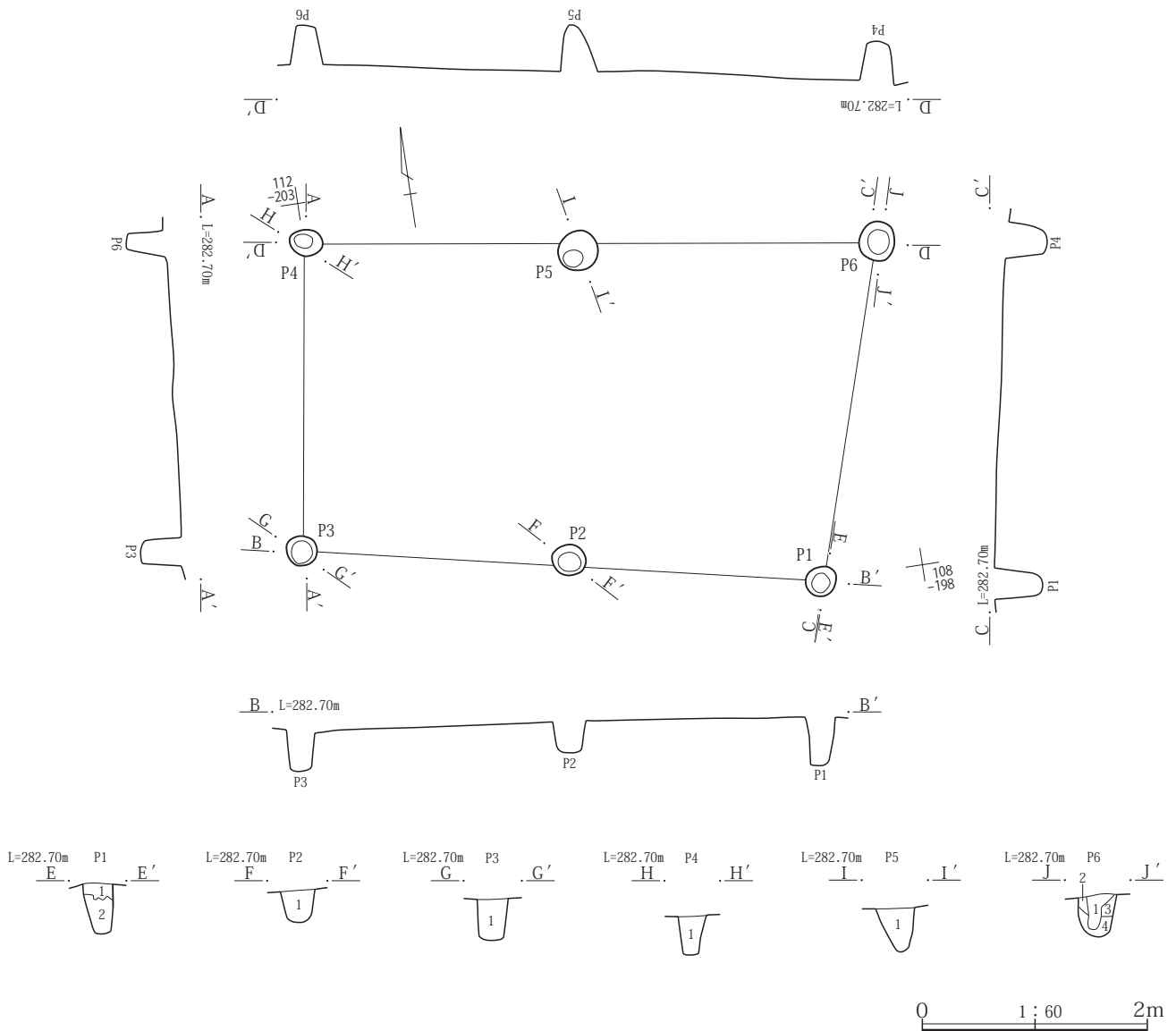
重複 本建物は3号掘立柱建物、17・23号ピットと重複するが、いずれに対しても新旧関係を特定することはできなかった。

覆土 各ピットの覆土は、P1は軽石少量含む暗褐色砂質土、P2・3は軽石多く含む暗褐色砂質土、P4・5は軽石多く含む黄褐色土を多く含む黒褐色土であり、P6は柱痕に暗褐色砂質土が入り、黄褐色砂質土と黒褐色が入る。

構造 2号掘立柱建物は、梁間1間型の建物で、その柱穴の径は0.24～0.35mで平均0.2975m、深さは0.28～0.45mで平均0.3717mを測る。また、梁間は2.69～3.06m、平均2.84m、桁間は2.25～2.71m、平均2.435mを測る。その間尺は、梁間の測定値が2間分であることを加味すれば、桁間が梁間に対して7割増しで長い。柱の配置は東縁を底辺とした台形を呈するが、東縁がやや開く。

遺物 いずれの柱穴も、出土遺物は得られなかった。

所見 本掘立柱建物は梁間1間型の建物であり、柱穴の径が30cm前後であることから、中世の所産と認識される。



(2号掘立 P 1)

- 1 暗褐色砂質土(10YR3/3) 径2~50mmの軽石少し含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色ブロック土多量に含む。

(2号掘立 P 2)

- 1 暗褐色砂質土(10YR3/3) 径2~10mmの軽石多く含む。

(2号掘立 P 3)

- 1 暗褐色砂質土(10YR3/3) 径2~10mmの軽石多く含む。

(2号掘立 P 4)

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 径1~10mmの軽石多量に含む。黄褐色ブロック多量。

(2号掘立 P 5)

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 径1~10mmの軽石多量に含む。黄褐色ブロック多量。

(2号掘立 P 6)

- 1 暗褐色砂質土(10YR3/3) 径30mmの炭化物1つ含む。径2~10mmの軽石混じり。
- 2 黄褐色砂質土(10YR5/6) 地山。2次堆積。
- 3 黄褐色砂質土(10YR5/6) 地山。2層に黒褐色ブロック大量に含む。
- 4 黒褐色砂質土(10YR2/3) 黄褐色ブロック大量に含む。径2~10mmの軽石少量含む。

第40図 3区2号掘立柱建物

また、本建物は1・3号掘立柱建物と近似した棟方向を有することから、同時代の建物であった可能性が考慮される。

2号掘立柱建物の建築意図は特定できなかったが、1・3号掘立柱建物に対して本建物は幅狭であることから、

厩としての使用の可能性が考慮される。

本建物は北東隅のP 6 (31号ピット)がやや北にずれているため、あるいはP 6 (31号ピット)は別遺構で、北東隅の柱穴が確認できなかったものである可能性も残される。

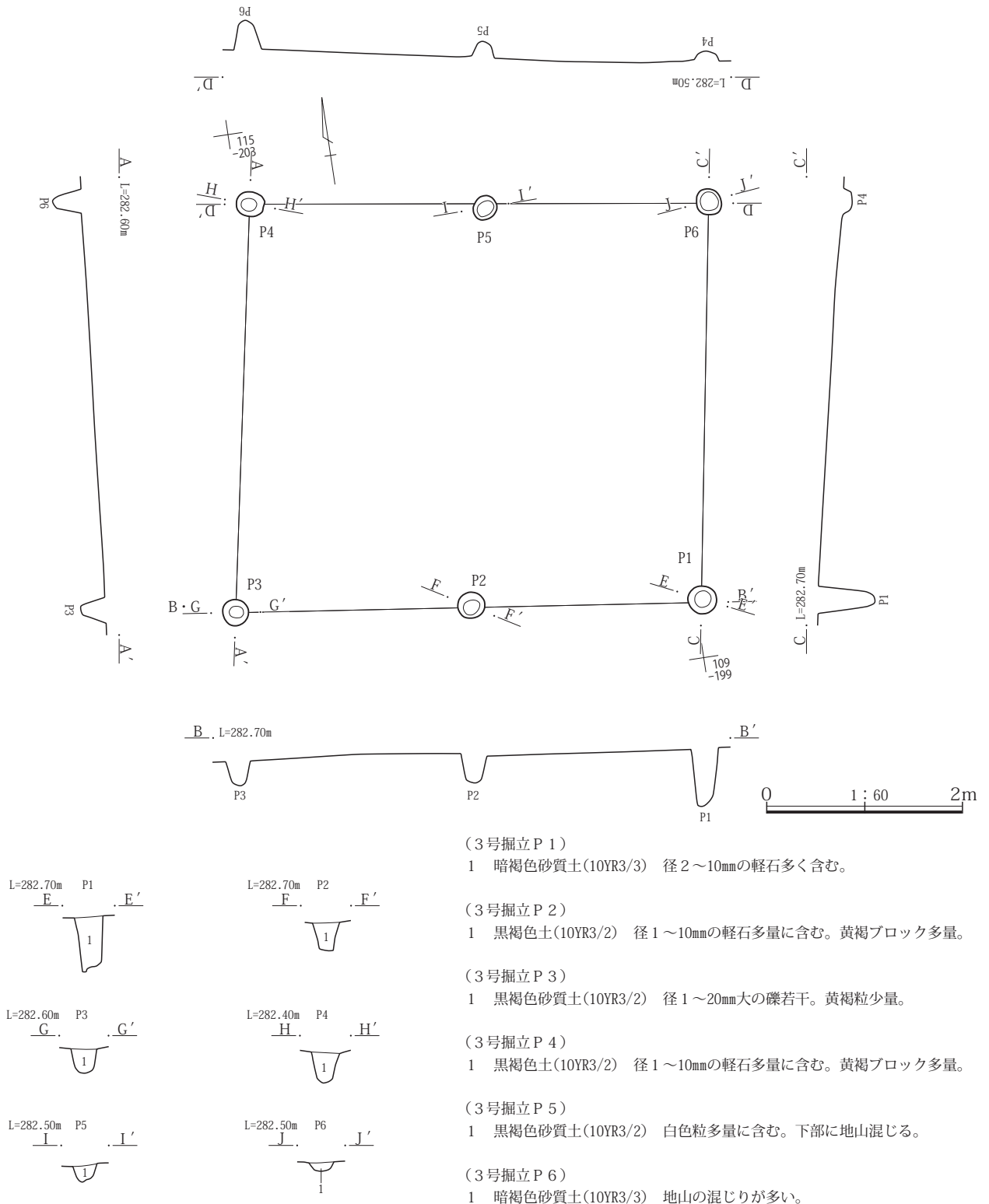
4. 3号掘立柱建物(第41図、PL.19)

概要 3号掘立柱建物は、1×2間の掘立柱建物である。
本建物は、調査途中で掘立柱建物と認識されたもので、
16号ピット(P 3)、22号ピット(P 2)、29号ピット(P

4)、33号ピット(P 1)、35号ピット(P 6)、36号ピット(P 5)で構成されている。

位置 本建物は3区南西部中央部のやや北東よりに位置する。

109～114-198～203グリッドに所在する。



第41図 3区3号掘立柱建物

規模・主軸方位

〔規模〕4.95×4.59m

〔主軸方位〕N80°W

〔P 1〕径：0.3×0.3m 深さ：0.55m

〔P 2〕径：0.27×0.26m 深さ：0.29m

〔P 3〕径：0.27×0.26m 深さ：0.25m

〔P 4〕径：0.28×0.25m 深さ：0.3m

〔P 5〕径：0.25×0.22m 深さ：0.17m

〔P 6〕径：0.26×0.25m 深さ：0.09m

〔梁間〕P 1－P 6：4.07m P 2－P 5：4.07m

P 3－P 4：4.17m

〔桁間〕P 1－P 2：2.35m P 2－P 3：2.42m

P 4－P 5：2.41m P 5－P 6：2.28m

重複 本建物は2号掘立柱建物、37号土坑、17・27・28号ピットと重複するが、いずれに対しても新旧関係を特定することはできなかった。

覆土 各ピットの覆土は、P 1は軽石多く含む暗褐色砂質土、P 2・4は軽石と黄褐色土多く含む黒褐色土、P 3は黒褐色砂質土、P 5は白色粒多く含む黒褐色砂質土、P 6は暗褐色砂質土であった。

構造 本掘立柱建物は、梁間1間型の建物で、その柱穴の径は0.22～0.3mで平均0.2642m、深さは0.09～0.55mで平均0.2642mを測る。また、梁間は4.07～4.17m、平均4.1033m、桁間は2.28～2.42m、平均2.365mを測る。その間尺は、梁間の測定値が2間分であることを加味すれば、桁間が梁間に対して1割5分増しで若干長い値を示す。柱の配置はほぼ長方形を呈する。

遺物 いずれの柱穴も、出土遺物は得られなかった。

所見 本掘立柱建物からの出土遺物は確認できなかったが、梁間1間型の建物であること、柱穴の径が25cm前後と小さいことから、中世の所産と認識される。

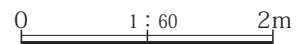
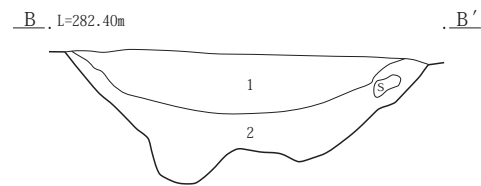
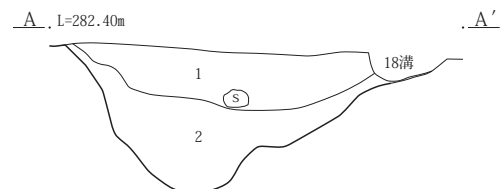
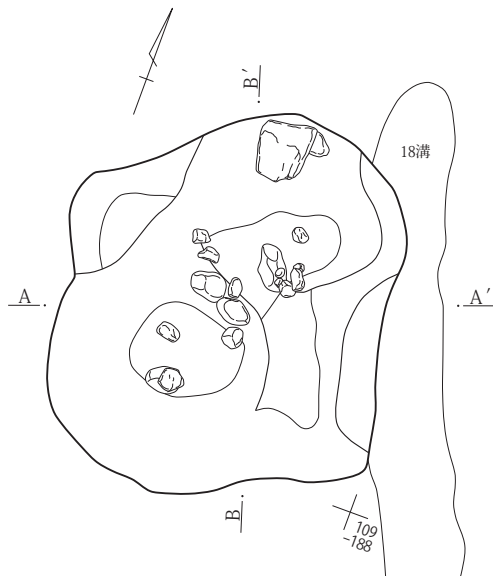
なお、3号掘立柱建物の建築意図は特定できなかった。

5. 2号竪穴状遺構(第42図、PL.20)

概要 2号竪穴は竪穴状遺構である。

位置 2号竪穴状遺構は南西部から中部の窪地に落ちる斜面に位置する。

108～111－188～191グリッドに所在する。



(2号竪穴状遺構)

- 1 黒褐色土(10YR2/3) 径5～200mm大の礫少量含む。
径5mmほどの黄橙色軽石(粕川テフラ?)を若干含む。
- 2 黄褐色土(10YR5/6) 砂層。黒色ブロック少量含む。
地山の崩れによる2次堆積か。

第42図 3区2号竪穴状遺構

規模・主軸方位 長軸：3.08m 短軸：2.76m

深さ：1.01m

重複 2号竪穴状遺構は18号溝と重複するが、本竪穴状遺構の方が古い。

覆土 地山崩落土とみられる黄褐色土とAs-Kkを含むとみられる黒褐色土で埋没する。

構造 本竪穴状遺構はやや不整な隅丸長方形のプランを呈し、すり鉢状の掘削形態を示す。底面形態は尖底に近い形状を呈している。

遺物 出土遺物は得られなかった。

所見 出土遺物はなく本竪穴状遺構の時期を特定することはできなかったが、覆土の状態から、おおむね古代の所産と推定される。

また、本竪穴状遺構の掘削意図は把握されなかったが、その形態から氷室の可能性も考慮される。

6. 長方形の土坑群(第43図、PL.20)

概要 本項では3区の土坑のうち、長方形、隅丸長方形プランを呈する36・37・38・39・40号土坑について報告する。

位置 3区北部に38・39号土坑、南西部に36・37・40号土坑が分布する。

なお、各土坑の所在グリッドは表13に記した。

規模・主軸方位 [規模]長径：1.61～1.84m

(平均：1.72m)

短径：0.77～1.4m(平均：1.068m)

深さ：0.14～0.43m(平均：0.306m)

[主軸方位]36・40号土坑がほぼ東西方向、37・39号土坑はほぼ北東-南西方向、38号土坑はほぼ北西-南東方向を向く。

なお、個々の土坑の規模と主軸方位は表13に記した。

重複 本土坑群のうち37号土坑は3号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は特定できなかった。また、39号土坑は近現代と思しき耕作痕に切られている他は、他の遺構との新旧関係は見られなかった。

覆土 覆土は、36号土坑は暗褐色砂質土、37号土坑は黒褐色・暗褐色砂質土、38・39号土坑は黒褐色土、40号土坑は黒褐色砂質土である。

構造 本土坑群の土坑のプランは、36・39号土坑は長方

形、37・38・40号土坑は隅丸長方形を呈する。掘削形態はいずれも箱形で、底面は平底状を呈する。

遺物 いずれの土坑からも、出土遺物は得ることはできなかった。

所見 本土坑群各土坑の時期は特定できなかったが、長方形プランで箱形を呈する掘削形態から、おおむね中近世所産の貯蔵穴と想定される。

7. 円形・楕円形・方形の土坑群

(第44・45図、PL.21・22)

概要 本項では3区の土坑のうち、円形・楕円形・方形のプランを呈する41～51号土坑について報告する。

位置 円形・楕円形・方形プランの土坑は3区北部には分布せず、南西部に41号土坑が分布する他は、北部境から東南にかけての中部に分布する。

なお、各土坑の所在グリッドは表13に記した。

規模・主軸方位 [規模]径：0.73～1.95m

(平均：1.229m)

深さ：0.28～0.83m(平均：0.54m)

なお、個々の土坑の規模と主軸方位は表13に記した。

重複 本土坑群の各土坑は全て単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

覆土 覆土は、41・49・50号土坑は黒褐色砂質土、42・43・46号土坑は黒褐色・黄褐色砂質土、44号土坑は黒褐色・にぶい黄褐色砂質土、45号土坑は礫多量に含む黒褐色土、47号土坑は黒褐色土・黄褐色砂質土、48号土坑は黒褐色土・にぶい黄褐色砂質土、51号土坑は礫多量に含む黒褐色・暗褐色土等である。

構造 本土坑群の土坑のプランは、43号土坑が方形、42・45号土坑が円形を呈する他は、楕円形を呈する。底面形態は41号土坑が平底、44号土坑が尖底を呈する他は丸底を呈する。

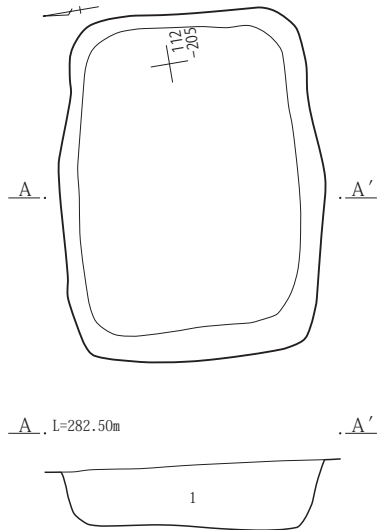
また、本土坑群の土坑は大型のものと小型のものに大別されるが、大型のものは47・48・51号土坑であり、他は小型である。その規模は大型のものは径1.48～1.95m、平均1.705m、深さは0.45～0.83m、平均0.62mを測り、小型のものは径0.73～1.36m、平均1.038m、深さは0.28～0.75m、平均0.51mを測る。径は小型1に対し大型1.64の規模の違いがある。

第3章 発見された遺構と遺物

遺物 いずれの土坑からも出土遺物は得られなかった。
 所見 本土坑群各土坑は古代以降の所産であるが、覆土

から中世の早い時期の可能性が考慮されるものの、正確な時期を特定することはできなかった。

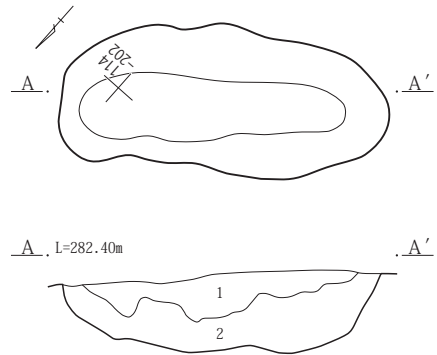
36号土坑



(36号土坑)

- 1 暗褐色砂質土(10YR3/3) 締りなし。
 径1～5mm大の軽石少量含む。

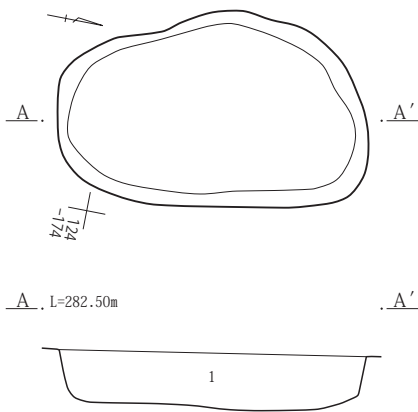
37号土坑



(37号土坑)

- 1 黒褐色砂質土(10YR2/2) 1～10mm大の軽石少量含む。
 2 暗褐色砂質土(10YR3/4) 径10～300mmの礫多量に含む。
 下部に黄褐色砂質ブロック土多量に含む。

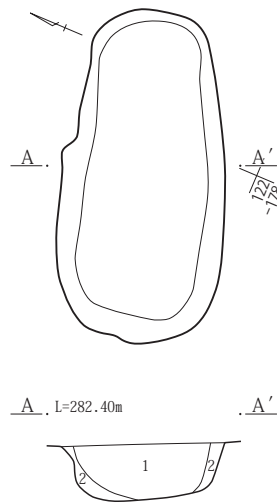
38号土坑



(38号土坑)

- 1 黒褐色土(10YR3/1) 径1～7mm浅間軽石、径1～10mm前後の円礫少量含む。

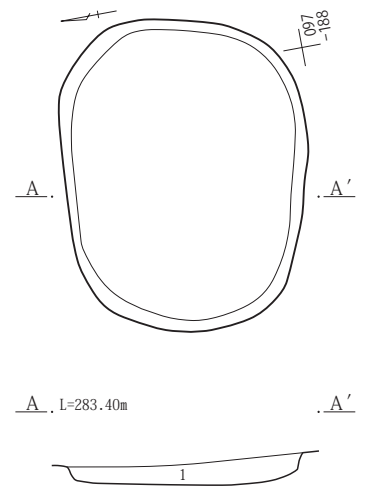
39号土坑



(39号土坑)

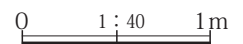
- 1 黒褐色土(10YR3/1) 38号土坑に類似。
 2 黒褐色土(10YR3/1) 1層の土に地山の砂礫層の土混じる。

40号土坑



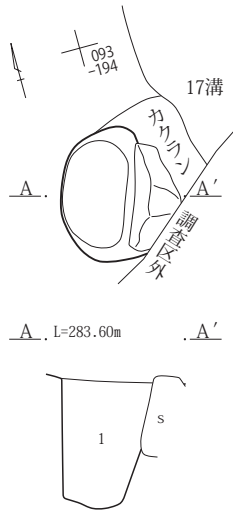
(40号土坑)

- 1 黒褐色砂質土(10YR3/2) 締りなし。径10mmの小礫若干含む。径1～5mmの軽石少量含む。



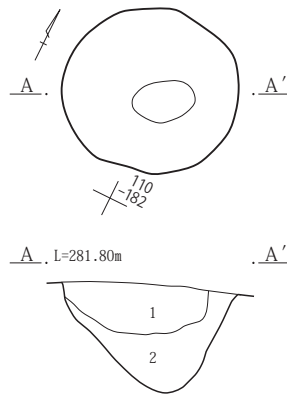
第43図 3区36～40号土坑

41号土坑



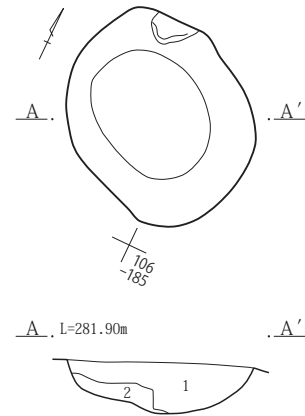
A. L=283.60m A'

42号土坑



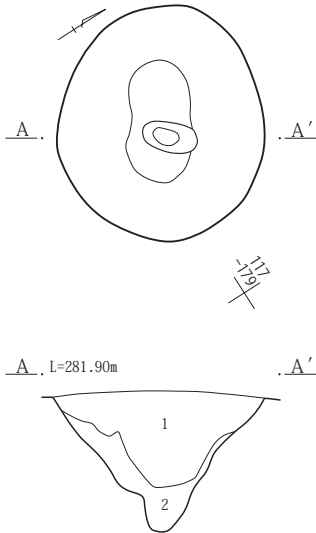
A. L=281.80m A'

43号土坑



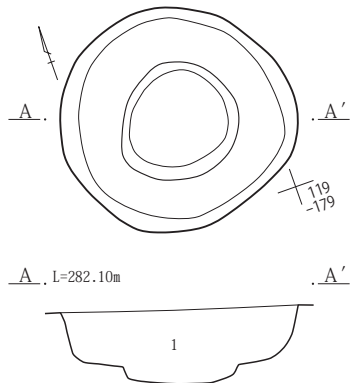
A. L=281.90m A'

44号土坑



A. L=281.90m A'

45号土坑



A. L=282.10m A'

(41号土坑)

- 1 黒褐色砂質土(10YR3/2) 径10~20mmの礫少量含む。

(42号土坑)

- 1 黒褐色砂質土(10YR2/2) 径1~10mmの軽石多量に含む。
- 2 黄褐色砂質土(10YR5/6) 径1~5mmの黄橙軽石少量含む。黒褐色ブロック若干含む。下部に径10cm大の軽石あり。

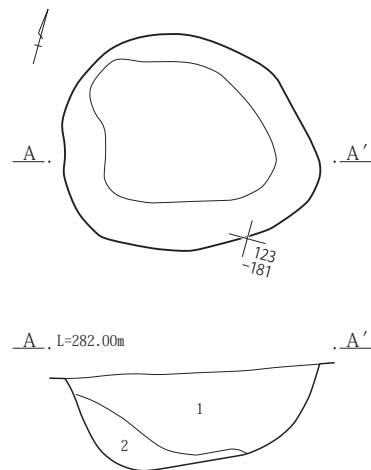
(43号土坑)

- 1 黒褐色砂質土(10YR2/3) 径1~5mmの軽石多量に含む。
- 2 黄褐色土(10YR5/6) 地山の2次堆積。径10~20mmの礫少量含む。

(44号土坑)

- 1 黒褐色砂質土(10YR2/2) 径2~10mmの軽石多量に含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) 黄褐色、白色粒を多量に含む。

46号土坑



A. L=282.00m A'

(45号土坑)

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 径1~10mmの礫多量に含む。人為的埋没か。下部が2段になっている。

(46号土坑)

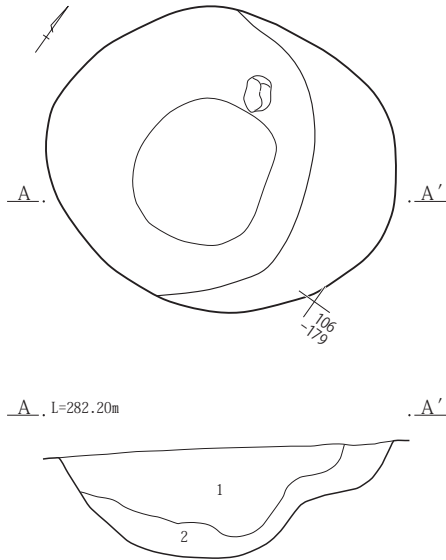
- 1 黒褐色砂質土(10YR2/3) 径3~50mmの礫多量に含む。下部に径1mmの軽石のブロックを少量含む。
- 2 黄褐色土(10YR5/6) 黒褐色混じり。白色粒多量に含む。砂質。

0 1:40 1m

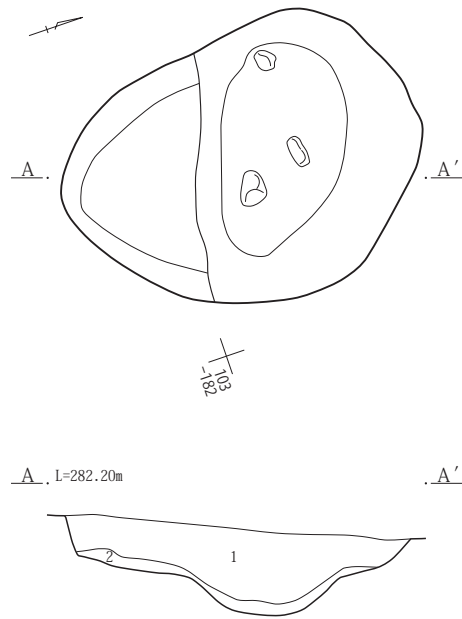
第44図 3区41~46号土坑

第3章 発見された遺構と遺物

47号土坑



48号土坑



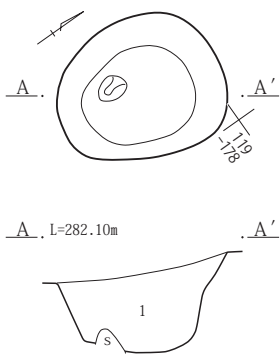
(47号土坑)

- 1 黒褐色土(10YR2/3) 径3~20mmの礫少量含む。
- 2 黄褐色土(10YR5/6) 黒褐色混じり。砂質。

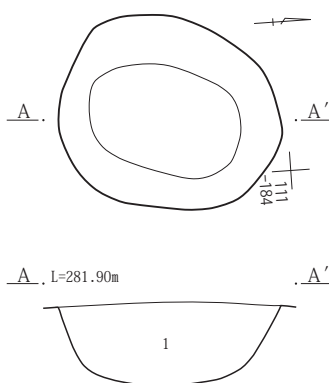
(48号土坑)

- 1 黒褐色土(10YR2/3) 径2~10mmの小礫少量含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) 径30mm大の礫を若干含む。

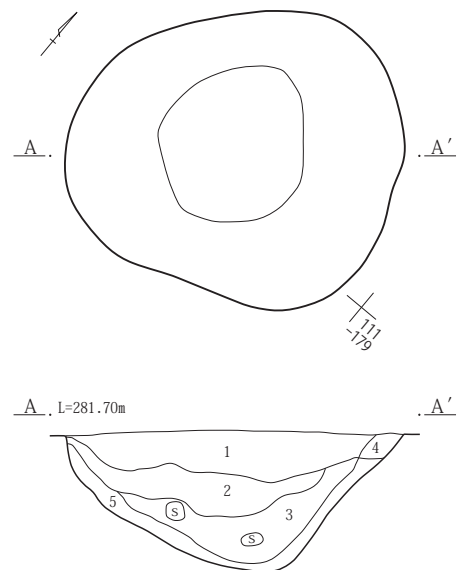
49号土坑



50号土坑



51号土坑



(49号土坑)

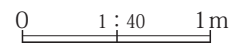
- 1 黒褐色砂質土(10YR3/2) 径5~7mmの浅間起源の粕川テフラ? を少量含む。

(50号土坑)

- 1 黒褐色砂質土(10YR3/2) 径5~7mmの浅間起源の粕川テフラ? を少量、F P 軽石径60mmを僅かに含む。

(51号土坑)

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 径2~100mm大の礫を多量に含む。
- 2 暗褐色土(10YR2/3) 径1mmほどの軽石をブロック状に多量に含む。
- 3 黒褐色土(10YR2/2) 径10~200mm大の礫を少量含む。
- 4 黒褐色土(10YR2/3) 径1~5mmの軽石を多量に含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 白色軽石粒を少量含む。底部には径50mm大の軽石若干。



第45図 3区47~51号土坑

8. ピット(第46・47図、PL.19・22)

概要 本項では3区のピットのうち、2・3号掘立柱建物を構成すると判断されたものを除く、10基のピットについて報告する。

位置 本ピット群の各ピット、いずれも3区南西部に位置するが、19・20号ピットが3区南西部中央やや南西寄りにある他、同区域の北東寄り、2・3号掘立柱建物周辺に分布する。

なお、各ピットの所在グリッドは表14に記した。

規模・主軸方位〔規模〕径：0.19～0.3m

(平均：0.2605m)

深さ：0.11～0.26m(平均：0.20m)

なお、個々のピットの規模と主軸方位は表14に記した。

重複 本ピット群のピットのうち23号ピットが2号掘立柱建物跡、27・28号ピットが3号掘立柱建物と重複する

が、いずれも新旧関係は特定できなかった。

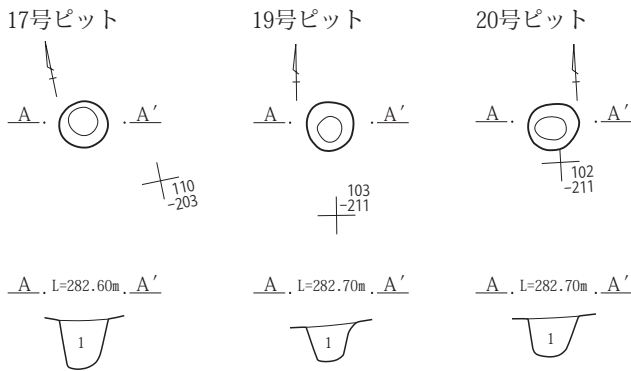
なお、上記以外の17・19・20・25・32・34・37号ピットは他遺構との重複は見られなかった。

覆土 各ピットの覆土は、17・23・25号ピットは軽石多く含む暗褐色砂質土。19号ピットは軽石を多く、20号ピットは川砂を含むにぶい黄褐色砂質土。27・28・32号ピットは軽石と黄褐色ブロック多く含む黒褐色土。34・37号ピットは暗褐色砂質土であった。

構造 本ピット群のピットのプランは、17・19・25・28・32・34号ピットは円形、20・23・27・37号ピットは楕円形を呈する。掘削形態はいずれも柱穴状で、底面の形態は34号ピットが平底、19号ピットが平底気味であるが、他のピットはいずれも丸底を呈する。

遺物 いずれのピットからの出土遺物はなかった。

所見 本ピット群各ピットは、覆土と規模から推して、いずれも中世の所産と考慮される。



(17号ピット)

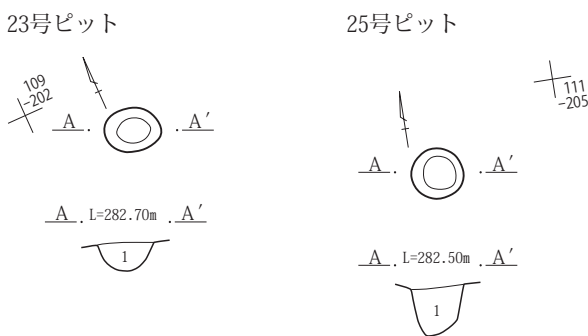
- 1 暗褐色砂質土(10YR3/3) 径2～10mmの軽石多く含む。

(19号ピット)

- 1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 川砂のような砂。径20mmの軽石1つ含む。

(20号ピット)

- 1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 川砂のような砂。

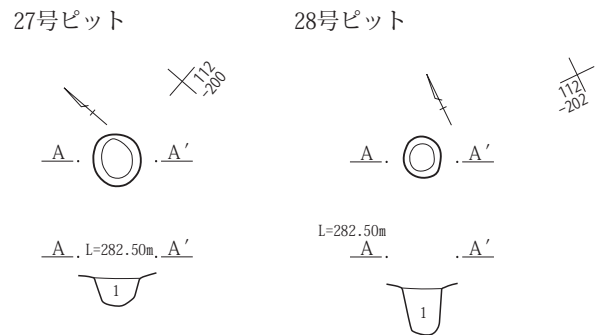


(23号ピット)

- 1 暗褐色砂質土(10YR3/3) 径2～10mmの軽石多く含む。

(25号ピット)

- 1 暗褐色砂質土(10YR3/3) 径2～10mmの軽石多く含む。

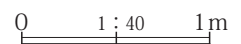


(27号ピット)

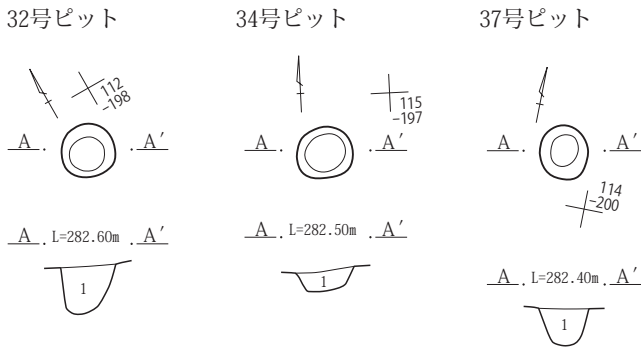
- 1 黒褐色土(10Y3/2) 径1～10mmの軽石多量に含む。黄褐色ブロック多量。径30mmの軽石1つ含む。

(28号ピット)

- 1 黒褐色(10YR3/2) 径1～10mmの軽石多量に含む。黄褐色ブロック多量。



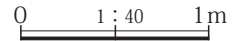
第46図 3区17・19・20・23・25・27・28号ピット



(32号ピット)
1 黒褐色土(10YR3/2) 径1~10mmの軽石多量に含む。
黄褐ブロック多量。

(34号ピット)
1 暗褐色砂質土(10YR3/3) 地山混じり。

(37号ピット)
1 暗褐色砂質土(10YR3/3) 地山混じり。
径1~3mmの軽石少量含む。



第47図 3区32・34・37号ピット

9. 17号溝(第48図、PL.22)

概要 本溝は直線的にほぼ南北方向に走行する溝遺構である。

北側は攪乱により削平されているが、底面は端部であることを示している。一方、南側は調査区外に出ているため、溝としての全容はつまびらかでない。

位置 本溝は3区南西部東寄りに位置し、091~115-192~194グリッドに所在する。

規模・主軸方位〔規模〕確認長：22.7m 幅：1.36~1.82m 深さ：0.45~0.77m

〔主軸方位〕N0°

重複 本溝は単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

覆土 本溝は灰黄褐色川砂、黒褐色土、川砂を含むにぶい黄褐色砂質土等で埋没する。

構造 本溝は南側からN16°W方向で調査区に入り、0.3mで直ぐ北に走行を転ずる。その後曲僅かに東に膨らむもののほぼ直線的に北行して16.8m進み、僅かに反時計周りに屈曲してN14°Wに走行を転じ、1.2m走行したところで更にN3°Wに走行を転ずる。ここから2.6m走行したところで底面は端部となり、更に北側へ1.6m進んだ地点で上場は削平され失われる。

掘削形態は箱堀状を呈するが、底面の横断面形は丸底の箇所と平底の箇所がある。また、溝底面の勾配は北側に向かい傾斜し、その勾配率は6.29%を測る。

遺物 本溝からの出土遺物は得られなかった。

所見 本溝の掘削意図は、覆土に川砂を含み流水の痕跡が確認されるため、水路の可能性も考慮されるが、北端で止まることから、土地を東西に分割する区画溝であっ

たものと思慮される。また、その走行がほぼ南北に向くことから、条里制に伴うものである可能性も考慮される。

本溝時期は特定できなかったが、覆土から推して中世前期以前の所産と想定されるが、条里制に伴う可能性を考慮すれば、律令期までさかのぼる可能性も考慮される。

また土層断面の観察から、中北部(A-A')では2回(1-1・1-2・1-4層 | 1-3・1-4層 | 2層)、中南部(B-B')では1回(1・2層 | 2-1・3層)、南部(C-C')でも1回(1-2・1-3層 | 2・4層)の掘り直しの痕跡が見られることから、本溝は2回以上の掘り直しが行われたことが確認される。

10. 18号溝(第48図、PL.23)

概要 本溝は、ほぼ北北西-南南東に走行する溝遺構である。

本溝の南側は調査区外に出ているため、全容はつまびらかにできなかった。

位置 本溝は3区中部南西寄りにあり、3区中部の窪地の南西縁に沿って掘削されており、099~112-183~188グリッドに位置する。

規模・主軸方位〔規模〕確認長：12.38m 幅：0.56~0.62m 深さ：0.26~0.62m

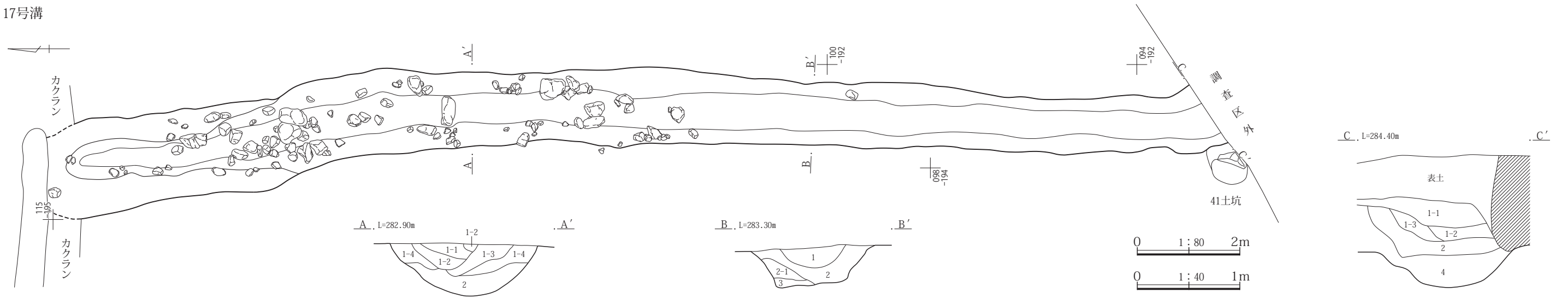
〔主軸方位〕N28°W

重複 本溝は2号竪穴状遺構と重複するが、本溝の方が新しい。

覆土 本溝はAs-Kkを多く含む黒褐色砂質土と黒褐色土で埋没する。

構造 本溝は南側から調査区に入り、曲ゆるやかに蛇行を以て、ほぼ北北西方向に走る。

17号溝



(17号溝) A-A'

- 1-1 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) B-B' 1層に似た層。川砂混じり。
径1~10mmの軽石多量に含む。最近の水の流れの層。
- 1-2 1-1層の川砂が多量に含まれる層。多量の小礫含む。
- 1-3 川砂が少し混じる砂質土層。砂が細かい。(端)
- 1-4 1-3層より川砂が少し混じる砂質土層。砂が細かい。(端)
- 2 黒褐色土(10YR2/3) 径1~5mmの軽石多量に含む。

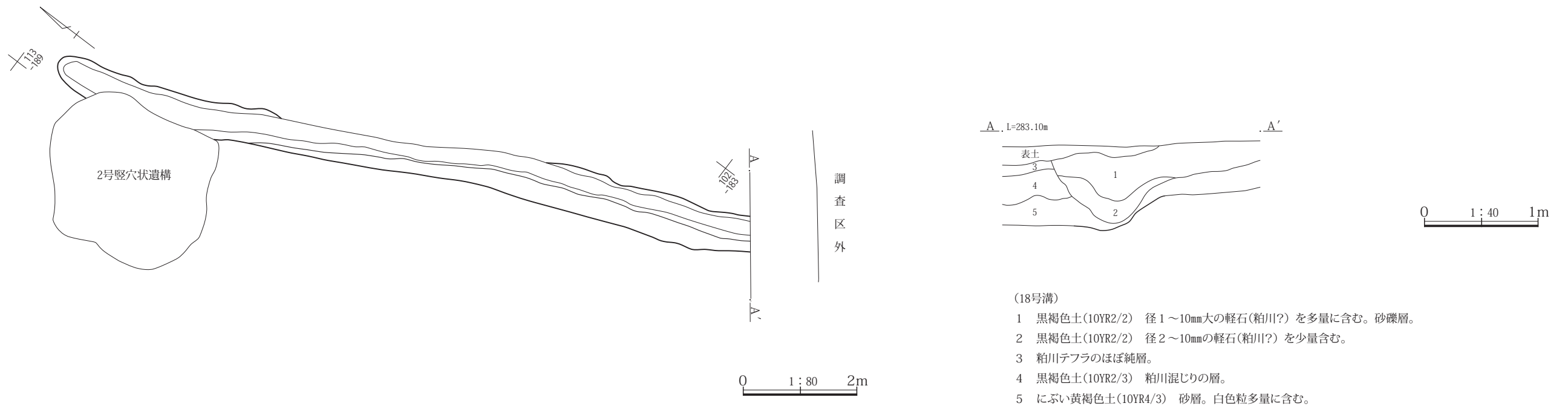
(17号溝) B-B'

- 1 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) 川砂混じり。
径1~10mmの軽石多量に含む。最近の水の流れの層。
- 2 黒褐色土(10YR2/3) 径1~5mmの軽石多量に含む。
径10mm大の礫を2つ含む。
- 2-1 2層から3層への漸移層。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 川砂層。

(17号溝) C-C'

- 表土 現耕作土
- 1-1 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) B-B' 1層に近似。
径1~10mmの軽石多量に含む。最近の水の流れの層。
川砂混じりの層。
- 1-2 川砂を多く含む。
- 1-3 川砂を少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/3) B-B' 2層に近似。径1~5mmの
軽石多量に含む。
- 4 黄褐色土(10YR5/6) 径2~5mm大の円礫多量含む。
上部はB-B' 3層と同じ川砂含む。

18号溝



(18号溝)

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 径1~10mm大の軽石(粕川?)を多量に含む。砂礫層。
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 径2~10mmの軽石(粕川?)を少量含む。
- 3 粕川テフラのほぼ純層。
- 4 黒褐色土(10YR2/3) 粕川混じりの層。
- 5 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂層。白色粒多量に含む。

第48図 3区17・18号溝

掘削形態は箱堀状を呈するが、底面の横断面形は丸底を呈する。また、溝の底面は中ほどが低くなり、南端より0.3m、北端より0.45mほど低い。

遺物 本溝からの出土遺物は得られなかった。

所見 本溝の時期は特定できなかったが、土層観察からは、中世の早い段階で埋没したものと認識される。

また、本溝の掘削意図は特定されなかったが、流水の痕跡もなかったが、3区中部の窪地の縁辺に沿って掘削されることから、土地の区画、あるいは排水溝としての機能が考慮される。

11. 耕作痕(第49図、PL.23・24)

概要 3区では6群を数える耕作痕が確認された。これらは近・現代に係わる可能性を有するものである。

位置 (A群) 3区北部の北部に位置する。

133～144-155～178にグリッド

(B群) 3区北部の南部

115～132-157～183グリッド

(C群) 3区西南部の中北部

096～108-200～210グリッド

(D群) 3区西南部の中南部

089～102-196～213グリッド

(E群) 3区西南部の南部

086～094-198～205グリッド

(F群) 3区西南部の西端部

104～116-211～223グリッド

規模 (A群)〔規模〕ほぼ南北：12.0m ほぼ東西：22.4m

〔サク長さ〕1.49～14.64m(平均：4.8543m)

〔サク幅〕0.44～0.66m(平均：0.5379m)

〔サク間〕1.0～1.22m(平均：1.129m)

(B群)〔規模〕ほぼ南北：12.5m ほぼ東西：25.9m

〔壺径〕0.72～3.87×0.44～1.5m

(平均：1.077×0.9407m)

〔壺間〕東西：1.68～3.01m(平均：2.569m)

南北：1.97～6.9m(平均：3.3215m)

(C群)〔規模〕ほぼ南北：12.0m ほぼ東西：22.4m

〔サク長さ〕1.4～7.72m(平均：4.3487m)

〔サク幅〕0.27～0.65m(平均：0.443m)

〔サク間〕0.4～2.38m(平均：1.165m)

(D群)〔規模〕ほぼ南北：11.9m ほぼ東西：10.1m

〔壺径〕0.75～4.2m(平均：1.092m)

〔サク間〕1.15～4.45m(平均：2.31m)

(E群)〔規模〕ほぼ南北：11.4m ほぼ東西：7.9m

〔サク長さ〕1.49～14.64m(平均：4.8543m)

〔サク幅〕0.44～0.66m(平均：0.5379m)

〔サク間〕1.0～1.22m(平均：1.129m)

(F群)〔規模〕ほぼ南北：12.2m ほぼ東西：11m

〔サク確認長〕0.55～10.81m(平均：5.3286m)

〔サク幅〕0.3～0.98m(平均：0.541m)

〔サク間〕0.49～3.39m(平均：1.129m)

主軸方位 (A群)N73°W (B群)N81°W

(C群)N86°W (D群)N83°W

(E群)N4°E (F群)N89°E

重複 本耕作痕のうちA群とB群、C群とD群は重複するが、共に新旧関係を特定できなかった。

またB群は29・38・45・46・49号土坑と、C群は1号掘立柱建物と重複するが、いずれに対しても本耕作痕群の方が新しい。

覆土 サクの覆土の記録は残せなかったが、いずれのサク、あるいは壺も表土層土に似た土壌で覆われる。

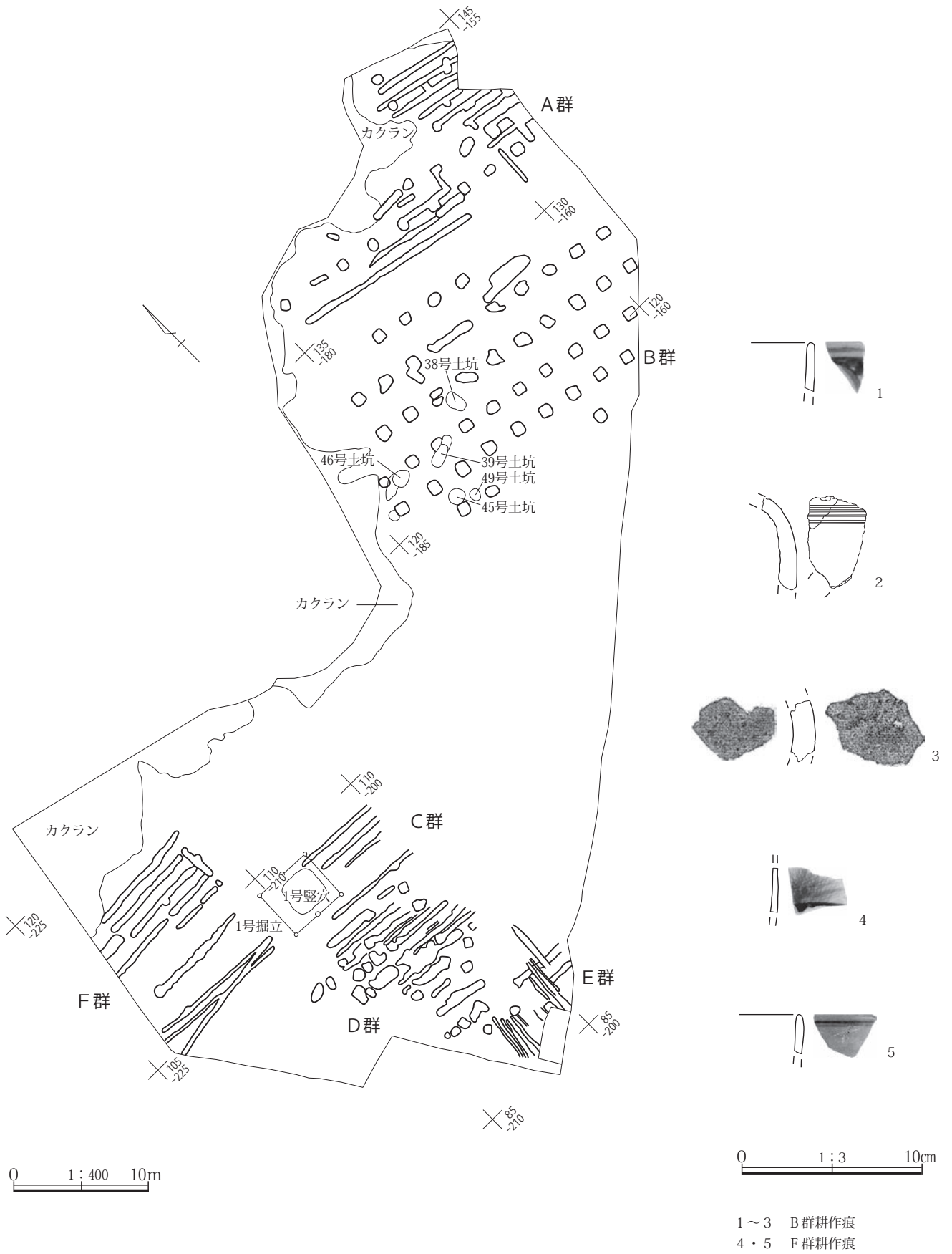
構造 本耕作痕のうちA・C・E・F群は並列したサクにより、B・D群は方形プランの壺堀状の耕作痕からなる。

また耕作痕跡の規模は、サク状のものではF群、A・C群、E群の順に小さく、サクの間隔はA・C・F群は近似するがE群は狭い。一方、壺堀状のB・D群の規模は近似する。遺存状態は良好とは言い難く、その構造はつまびらかにできなかった。

遺物 B群からは肥前陶器陶胎染付碗(1)、瀬戸美濃産瓶(2)、搬入系の土管(3)、F群(あるいはC群)からは製作地不詳の碗(4)、肥前陶器陶胎染付碗(5)の出土があった。

所見 本耕作痕群の時期は、出土遺物からB・F(あるいはC)群は近・現代、他の耕作痕跡は、近・現代に近い時期の所産と想定されるが、E群は規模が小さいことから、近世の所産の可能性が考慮される。

また本耕作痕群は畠等の耕作痕と判断されるが、B・D群は桑等の植栽によるものと判断される。



第49図 3区耕作痕と出土遺物

12. 遺構外の出土遺物(第50図、PL.24)

概要 3区からは平安時代の須恵器椀か杯(1)が出土した。その他、土師器甕片50片が出土している。



第50図 3区遺構外の出土遺物

表13 3区土坑一覧 寸法内()は残存値

番号	所在グリット	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
36	111・112-204~206	長方形	184×140×36	N82°W
37	113・114-201~203	隅丸長方形	175×77×43	N49°E
38	123~125-174・175	隅丸長方形	161×103×30	N11°W
39	121~123-177~179	長方形	176×85×30	N67°E
40	097・098-187~189	隅丸長方形	164×129×14	N80°W
41	091・092-193・194	楕円形	72×(39)×67	N21°E
42	110・111-181・182	円形	93×88×58	N54°E
43	106・107-184・185	方形	110×91×28	N62°W
44	116・117-179・180	楕円形	125×109×75	N51°W
45	118~120-178~180	円形	122×115×45	N64°W
46	122・123-180~182	楕円形	136×114×51	N75°E
47	105~107-178~180	楕円形	183×162×58	N54°E
48	102~104-182・183	楕円形	195×148×45	N8°E
49	118・119-178	楕円形	89×73×41	N15°E
50	109・110-183・184	楕円形	118×102×43	N17°E
51	110~112-179・180	楕円形	179×156×83	N50°E

表14 3区ピット一覧 寸法内()は残存値

番号	所在グリット	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
17	110-203	円形	26×23×26	N0°
19	103-210・211	円形	26×24×19	N0°
20	102-210・211	楕円形	27×25×21	N61°E
23	108-201	楕円形	30×24×15	N66°W
25	110-205	円形	29×27×25	N0°
27	111・112-200	楕円形	28×25×15	N47°E
28	111・112-202・203	円形	22×20×24	N0°
32	111-198	円形	28×28×25	N0°
34	114-197	円形	30×29×11	N0°
37	114-200	楕円形	29×25×20	N21°W

第5節 縄文時代の遺物

1. 本遺跡と縄文時代遺物との関係

本遺跡は6世紀初頭の榛名山二ッ岳の噴火に伴い噴出した火砕流堆積物で厚く覆われているため、本来、表土に近い位置で、古墳時代中期以前の遺構、遺物を確認することは不可能である。

しかしながら、本遺跡においては少量であるものの、縄文時代の遺物を確認しているが、これらは本遺跡に元々存したものではなく、古墳時代後期以降の流れ込みにより、本遺跡より出土したと判断されるものである。

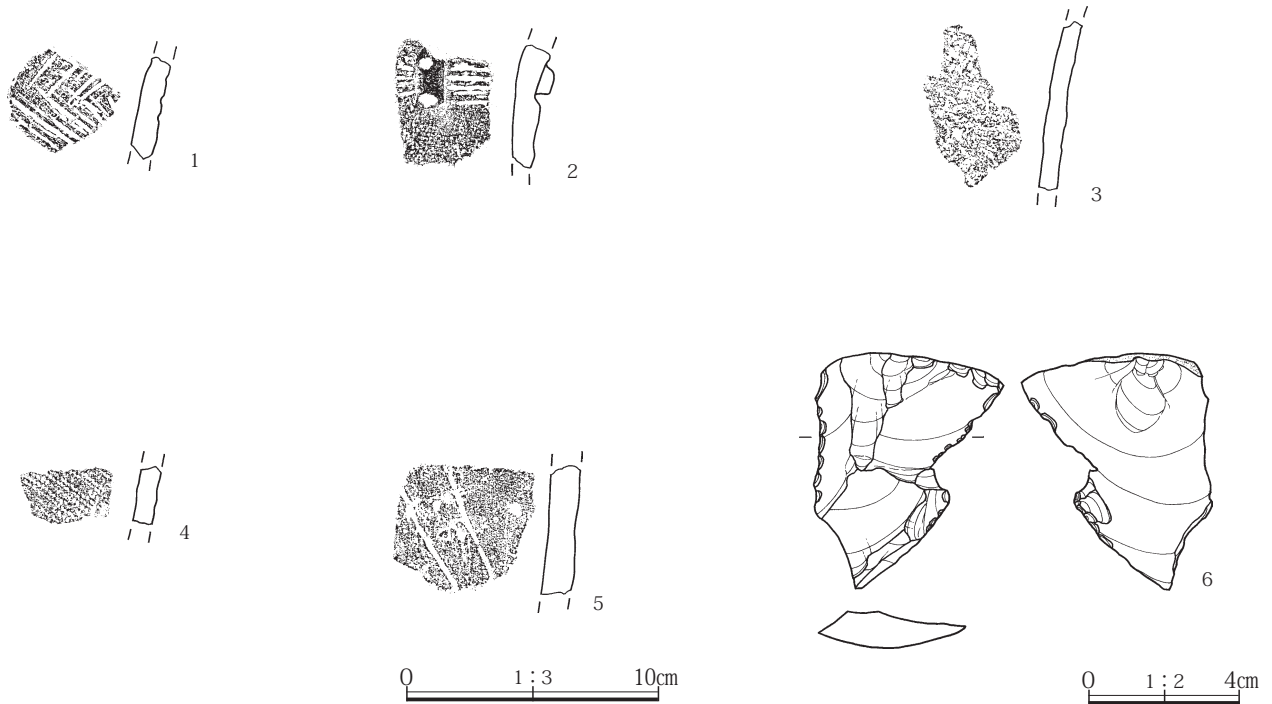
2. 本遺跡出土の縄文時代遺物

(第51図、PL.24)

本遺跡における縄文時代の遺物は2区で縄文土器5点が出土し、剥片石器1点と3区で縄文土器9点が出土している。

縄文土器はいずれも小破片であり、その時期は早期から後期に属するものであった。これらは早期後半に属するもの1点(3)、前期の諸磯a式2点(4)、中期の焼町式1点、加曾利E式1点、後期の加曾利B2式1点(1)、堀之内I式4点(2・5)、時期不明のものが5点であった。

また、剥片石器は、微細剥離痕のある剥片(6)であった。



第51図 縄文時代の出土遺物

第4章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の委託

1. 自然科学分析資料

宮貝戸遺跡出土の2号竪穴建物および北部埋没谷では、覆土中から明確な層状を呈する灰白色軽石・火山灰等が出土している。本自然科学分析の対象資料は、これらの灰白色軽石・火山灰である。

2. 自然科学分析の目的

本遺跡では竪穴建物覆土及び埋没谷に火山灰及び若干の間層を挟んでアッシュと軽石層が部分的に堆積していた。これまでの諸研究から、これは浅間粕川テフラ(As-Kk)または浅間B軽石(As-B)、あるいはそれらの両方と考えられる。両者の分布は当遺跡付近では重なるとされてきたが、周辺に同様の遺跡の調査・報告事例が少ないので、今回、この軽石等の自然化学分析をすることによってこれを明らかにする重要な資料が得られるものと考えられる。

3. 自然科学分析の委託

こうした自然環境を理解することは遺跡立地や生業等を考えるうえで欠かせないため、これらについて専門家に同定を依頼することとした。

4. 委託の成果

委託の報告書は、本章第2節に掲載したが、竪穴建物覆土及び埋没谷に堆積したアッシュ及び軽石は、下層のアッシュがAs-Bに伴うアッシュであること、間層を挟んで堆積した上層のアッシュ及び軽石がAs-Kkに伴うものであることが明らかにされた。

5. 所見

確認された竪穴建物は平安期後半のものである。その他の遺構は時期判定することができる遺物に恵まれていないが、おおむね中・近世のものが中心である。地山となった火山性堆積物については明らかにすることができなかったが、いずれにしても榛名火山に由来する古墳時代の堆積物であることは確実で、山麓の谷を埋めるように扇状地堆積したのち、その先端を吾妻川が侵食、段丘地形を形成したと見られる。

第2節 宮貝戸遺跡火山噴出物 分析業務

1. はじめに

関東地方北西部吾妻川流域に位置する東吾妻町とその周辺には、浅間、榛名、草津白根をはじめとする北関東地方とその周辺の火山のほか、御岳や妙高、さらには中国地方や九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く挟在されている。これらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ(町田・新井、2011ほか)などに収録されており、露頭や考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古学的な遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

宮貝戸遺跡の発掘調査の際にも、起源や年代が不明なテフラ層やテフラ粒子が認められたことから、地質調査を実施してテフラ層を含む土層の層序や、テフラ粒子の岩相の記載を行うとともに、高純度で採取した試料を対象に、仕様で指示されたテフラ分析(テフラ検出分析)を実施して指標テフラとの同定を行い、土層の層位や年代を明らかにすることになった。調査分析の対象は、試掘トレンチおよび1号谷の2地点である。

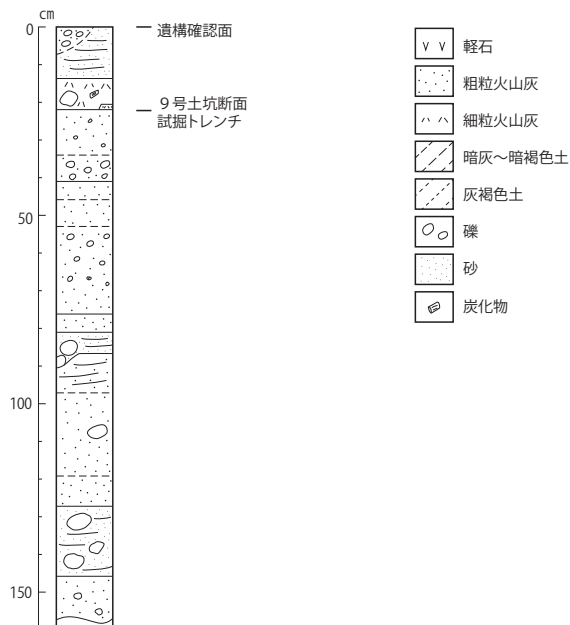
2. 土層の層序

(1) 試掘トレンチ

宮貝戸遺跡の基盤の堆積物を観察できた試掘トレンチでは、下位より岩片を含む灰色砂質堆積物(層厚12cm以上、岩片の最大径37mm)、粗粒の礫を含む成層した灰色砂礫層(層厚19cm、礫の最大径238mm)、主体部が桃灰色の砂質堆積物(層厚42cm)、層理が発達した礫混じり灰色砂層(層厚5cm、礫の最大径191mm)、褐色砂質火山灰層(層厚5cm)、主体部がやや桃色がかった砂質堆積物(層厚35cm)、下部7cmが粗粒で灰～白色の軽石を含む灰色砂質堆積物(層厚19cm、軽石の最大径47mm、岩片の最大径28mm)、黄色砂質細粒火山灰層(層厚2cm)、褐色細粒火山灰層(層厚5cm)が認められる(図52)。

このうち、主体部が桃灰色の砂質堆積物は、最下部8cmが灰色粗粒火山灰層で、上部10cmにはかすかに層理が形成されている。また、主体部がやや桃色がかった砂質堆積物は、主体部がやや桃色がかった灰色火砕流堆積物(軽石の最大径28mm、岩片の最大径9mm)で、その上位に下位より灰色火山灰に富む部分(層厚7cm)と黄灰色粗粒火山灰に富む部分(層厚5cm)が認められる。

試掘トレンチに近接した9号土坑断面では、試掘トレンチ最上部の褐色細粒火山灰層中に粗粒の白色軽石(最大径78mm)や炭化物が含まれている。その上位には層理をもつ灰色砂層(層厚13cm)が認められ、それを切って円

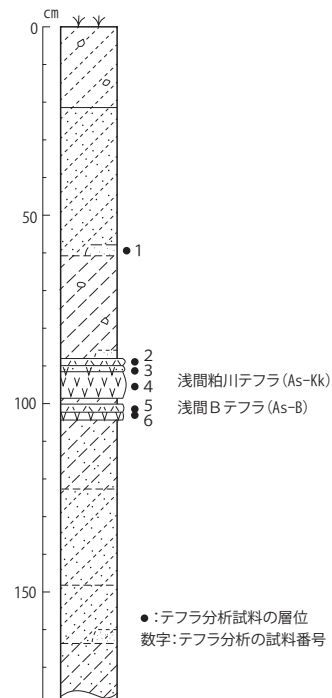


第52図 試掘トレンチ・9号土坑断面の総合地質柱状図

磨された白色軽石に富む黄色砂層(最大層厚16cm、軽石の最大径47mm)が堆積している。

(2) 1号谷

宮貝戸遺跡の基盤の堆積物を浸食してできた谷は、おもに腐植質の堆積物により埋没している。1号谷におけるこの埋積堆積物は、下位より、暗灰褐色砂質土(層厚14cm以上)、黄褐色砂層(ブロック状、最大層厚3cm)、やや暗い灰褐色砂質土(層厚16cm)、灰褐色砂質土(層厚25cm)、砂混じりでとくに色調が暗い暗灰色土(層厚18cm)、成層したテフラ層(層厚4cm)、暗褐色土(層厚1cm)、成層したテフラ層(層厚11cm)、灰褐色砂質土(層厚2cm)、灰褐色軽石混じり暗灰褐色土(層厚25cm、軽石の最大径16mm)、やや暗い灰色砂層(層厚3cm)、灰褐色軽石混じりでやや暗い灰褐色砂質土(層厚36cm、軽石の最大径16mm)、表土(層厚22cm)が認められる(図53)。



第53図 1号谷の地質柱状図

このうち、下位のテフラ層は、下部の黄灰色軽石層(層厚2cm、軽石の最大径29mm、石質岩片の最大径4mm)と、上部の黄灰色砂質細粒火山灰層(層厚2cm)からなる。一方、上位の成層したテフラ層は、下位より褐色軽石混じり黄灰色軽石層(層厚7cm、軽石の最大径12mm、石質岩片の最大径3mm)、褐色軽石混じりで石質の暗灰色粗粒火山灰層(層厚2cm、軽石の最大径6mm、石質岩片の最大径3mm)、灰色砂質細粒火山灰層(層厚2cm)からなる。

3. テフラ検出分析

(1)分析試料と分析方法

1号谷で認められた2層の成層したテフラ層(試料6、試料4)と、その上位の砂層(試料1)に含まれるテフラ粒子の特徴を明らかにするために、テフラ検出分析を行って、テフラ粒子の量や特徴を定性的に把握した。分析方法は次のとおりである。

- 1)試料6 gを電子天秤で秤量。
- 2)超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3)恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
- 4)実体顕微鏡下で観察。

(2)分析結果

テフラ検出分析の結果を表15に示す。試料6には、淡灰色のほかに、淡褐色や褐色の比較的良く発泡した軽石(最大径29mm)や、それらの細粒物である淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型火山ガラスが非常に多く含まれている。強磁性鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

試料4には、淡灰色、淡褐色、褐色、白色、さらにそれらが斑状に入り混じった比較的良く発泡した軽石(最大径10.6mm)や、それらの細粒物である同系色のスポンジ状軽石型火山ガラスが非常に多く含まれている。強磁性鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

試料1には、比較的良く発泡した淡灰色の軽石(最大径4.2mm)や、さほど発泡の良くない白色の軽石(最大径3.6mm)、さらにそれらの細粒物である淡灰色や白色のスポンジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれている。強磁性鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石、角閃石、単斜輝石が認められる。淡灰色の軽石の班晶鉱物としては斜方輝石や単斜輝石、白色の軽石の班晶鉱物としては斜方輝石や角閃石が認められる。

表15 1区南深掘地点南壁におけるテフラ検出分析結果

試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物
	量	色調	最大径	量	形態	色調	
1	**	淡灰、白	4.2	**	pm (sp)	淡灰、淡褐、褐、白	opx、am、cpx
4	****	淡灰、淡褐、褐、白	10.6	**	pm (sp)	淡灰、淡褐、褐、白	opx、cpx
6	****	淡灰、淡褐、褐	29.1	**	pm (sp)	淡灰、淡褐、褐	opx、cpx

****:とくに多い、***:多い、**:中程度、*少ない、最大径の単位はmm。

sc:スコリア型、bw:バブル型、pm:軽石型、md:中間型、sp:スポンジ状、fb:繊維束状。

ol:カンラン石、opx:斜方輝石、cpx:単斜輝石、am:角閃石。○内は量がとくに少ない鉱物。

4. 考察

試掘トレンチおよび9号土坑断面で認められた堆積物のうち、粗粒の礫を含む砂礫層や成層した砂層は、おもに火砕流堆積物に由来する水成堆積物と考えられる。一方、砂質堆積物に関しては、吹き抜けパイプ構造が認められないことから泥流堆積物の可能性も否定はできないが、層相や一部には炭化物が含まれていることを考慮すると、火砕流堆積物の可能性の方が高いようにみえる。

この堆積物に関しては、地表面に近いことや遺跡近傍の沼尾川沿いの地層の堆積状況から、まず6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP、新井、1962、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992)を構成する二ツ岳第2軽石流堆積物(FPF-2、新井、1979)に関係した堆積物の可能性が指摘される。

ただし、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992)を構成する二ツ岳第1軽石流堆積物(FPF-1、新井、1979)の最上部には軽石に富むフロー・ユニットがあること(Soda、1996・早田、1998など)や、観察地点で認められる細粒の褐色火山灰層の存在などは、観察した砂質堆積物の多くがFPF-1である可能性が考えられる。

いずれにしても、今回観察できた堆積物の範囲が比較的狭いことから、周辺露頭などの地層観察を継続して堆積様式や堆積物の由来についての検討を継続する必要がある。

一方、1号谷で認められた2層の成層したテフラ層は、層位、層相、含まれるテフラの岩相などから、下位より順に、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B、荒牧、1968、新井、1979、町田・新井、1991、2003、2011)と、1128(大治3)年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間粕川テフラ(As-Kk、早田、1991、1996、2004)に同定される可能性が高い。下位

第4章 自然科学分析

のAs-Bは、層厚が薄いものの、粗粒の軽石が含まれており、テフラを生産した噴火の規模が、上位のAs-Kkより大きかったことを示唆している。

なお、試料1には、層位や層相から、1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A、荒牧、1968、新井、1979、町田・新井、1991、2003、2011)の混在が期待されたが、As-Aに特徴的なテフラ粒子は認められなかった。

5. まとめ

東吾妻町宮貝戸遺跡の発掘調査区において、地質調査とテフラ分析(テフラ検出分析)を実施した。その結果、古墳時代の榛名火山の噴火による火砕流や火山泥流に由来する堆積物を切って形成された谷の埋積土の中に、浅間Bテフラ(As-B、1108年)と浅間粕川テフラ(As-Kk、AD1128年)に同定される可能性が高いテフラ層を認めることができた。



写真1 1号谷・As-Kkの層相
主体部が褐色軽石を含む黄灰色軽石層からなる。

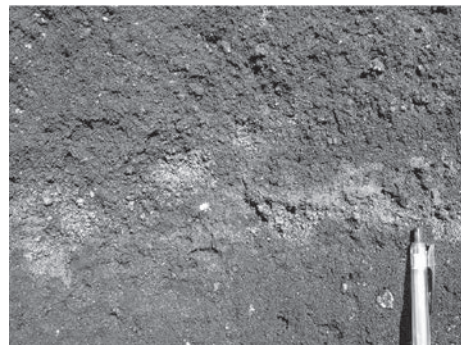


写真2 1号谷・As-BとAs-Kk
成層したAs-Bの上位にAs-Kkの主体部の堆積が認められる。

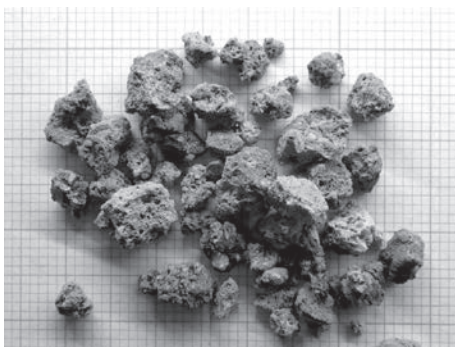


写真3 1号谷・試料4(As-Kk)
淡灰色、淡褐色、褐色、白色の、またそれらが斑状に入り混じった色調の軽石やスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。背景は1mmメッシュ。

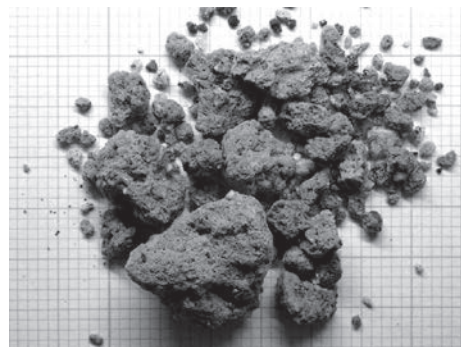


写真4 1号谷・試料6(As-B)
淡灰色、淡褐色、褐色の軽石やスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。背景は1mmメッシュ。

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編,10,p.1-79.
- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.53,p.41-52.
- 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質. 地函研専報, no.14,p.1-45.
- 町田 洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス」. 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫(2003)「新編火山灰アトラス」. 東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫(2011)「新編火山灰アトラス(第2刷)」. 東京大学出版会, 336p.
- 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53,p.2-7.
- Soda,T.(1996)Explosive activities of Haruna Volcano and their impacts on human life in the 6th century A.D. Geogr. Rept. Tokyo Metropol. Univ., no.31,p.37-52.
- 早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラ—について. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
- 早田 勉(1998)榛名火山—古墳時代の大噴火をさぐる. 高橋正樹・小林哲夫編「関東甲信越の火山I」, 築地書館, p.74-92.
- 早田 勉(2004)火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史—とくに平安時代の噴火について—. かみつけの里博物館編「1108—浅間火山—中世への胎動」, p.45-56.

第5章 まとめ

第1節 遺構、遺物の概要

以上のように、宮貝戸遺跡の発掘調査成果を報告してきたが、その成果は、ある意味で限定的なものではある。しかし、調査実績の希薄な東吾妻町箱島地区の埋蔵文化財の状況を示すに当たり、有用な事例になるものと考えられる。そこで本書のまとめとして、以下に本遺跡の調査成果を概述し、次節で若干の考察を試みることにする。

1. 遺構の時期的制約

既に述べてきたように、本遺跡周辺は、6世紀初頭の榛名山の噴火に伴う火砕流堆積物が厚く堆積している。この火砕流堆積層の下には古墳時代中期以前の埋蔵文化財の包蔵も想定されるが、本調査においては安全上の制約もあって、火砕流層下面の様相を確認することができなかった。したがって本遺跡で調査し得た遺構は理論上6世紀以降のものに限られるのであるが、実際に確認できた遺構は、おおむね律令期から近世以降のものであった。また、出土遺物も少なかったため、個々の遺構の時期を明確にすることもできなかった。

表16 宮貝戸遺跡遺構一覧

区	遺構種別	時 代						合計
		奈良・平安	古代～中世	古代以降	中世	中世～近世	近世	
1区	竪穴建物	1						1
	柵				1			1
	土坑	3		3	6	23		35
	ピット		9	5				14
	溝					1		1
	耕作痕						3	3
	谷	3						3
2区	土坑		3			6		9
	ピット		3					3
	溝	1						1
	耕作痕						2	2
3区	竪穴状遺構	1			1			2
	掘立柱建物				3			3
	土坑				11	5		16
	ピット				10			10
	溝		1		1			2
	耕作痕						1	5
合計	竪穴建物	1						1
	竪穴状遺構	1			1			2
	掘立柱建物				3			3
	柵				1			1
	土坑	3	3	3	17	34		60
	ピット		12	5	10			27
	溝	1	1		1	1		5
	耕作痕						1	10
	谷	3						3

2. 遺構と遺物の概要

本遺跡で調査した遺構は、竪穴建物1棟、竪穴状遺構2基、掘立柱建物3棟、柵1重、土坑60基、ピット27基、溝5条、耕作痕跡11面、谷3箇所であった。なお、時期ごとの遺構数量は下の表15を参照願いたい。

さて、これらの遺構は先に述べたように、奈良・平安時代に現れ、中世を経て近世以降に及ぶものであるが、その遺構量は中・近世にかけて増加する傾向にあり、全体として中世を中心とした時期の所産であるものと見られる。

一方、出土遺物は少なく、得られる所見も多くなかったが、土師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器が1・2・3区から出土し、2・3区では古墳時代後期以降に本遺跡に流入したと判断される早～後期の縄文土器の破片や石器の出土も見られた。

第2節 若干の考察

上述のように本遺跡の遺構は律令期以降のものに限らるが、律令期と中世の遺構について若干の所見を述べ、稿を閉じることとする。

1. 奈良・平安時代

奈良・平安時代(律令期)に属すると判断された遺構は竪穴建物1棟、竪穴状遺構1基、土坑3基、溝1条と自然地形ではあるが3箇所の谷があった。その分布は1区に集まり、2・3区では1遺構ずつを確認するに過ぎないものであった。

上述のように、竪穴建物は僅かに1棟を確認、調査

したに過ぎなかったが、この建物は併設すると判断される、2基の竈を有する特徴的な遺構であった。また本建物の周囲に他の竪穴建物あるいは同時期の掘立柱建物等が確認できなかったことから、本遺跡において集落が形成されていた可能性は小さいものと推量された。したがってこの建物はいわゆる「離れ国分」と称される、集落から離れて建てられた建物遺構であると判断される。なお、本建物は竪穴建物の減少する11世紀の所産であった。

また、19号溝は谷地形を溝状に整え、拡張したものと想定されるような構造を有するものであった。本溝の掘削意図は明確にはし得なかったが、現段階では榛名山からの湧水の処理に関連したものである可能性を提示したい。

2. 中世

中世に属すると判断された遺構は、竪穴状遺構1基、掘立柱建物3棟、柵1重、土坑17基、溝1～2条があった。

このうち、3区南西部に3棟の掘立柱建物が確認された。しかし2・3号掘立柱建物は重複し、1号掘立柱建物と2号あるいは3号掘立柱建物は棟方向に若干の相違が見られたことから、これらの掘立柱建物が併存していた可能性は低いものと判断された。換言すれば、掘立柱建物は3時期にわたって建てられた状況が確認されるのである。

また、これらの掘立柱建物群の東には、近接してほぼ南北走行の18号溝があり、その走行は1号掘立柱建物の棟方向にほぼ直行するものであり、やや南北両端で揺らぐものの直線的な走行を見せる。18号溝を堀と認識するならば、1～3号掘立柱建物は屋敷に伴う建物である可能性が考慮され、この場合18号溝以西側が屋敷の郭域となる。しかし調査範囲が限定的なこともあるが、これを屋敷遺構と認識した場合、母屋は南西の調査区外にあると想定され、1～3号掘立柱建物以外の建物も確認されていないため、これらの遺構群を屋敷遺構と断定するには至っていない。

一方1～3号掘立柱建物の構造は1×2間と簡易な構造を有する小規模なものである。したがってこれらの掘立柱建物は母屋等にはなり得ないものであり、屋敷であれば付属屋に分類されるものである。なお、1号掘立柱

建物は中に1号竪穴状遺構が掘削される特異な構造を呈することから、倉庫機能を有していたものと思慮されるが、近接した位置に建てられた2・3号掘立柱建物も同様の機能を有していた可能性が考えられる。

ところで、掘立柱建物の建てられた3区南西部を除く調査区の広い範囲、すなわち推定される屋敷の外側で、貯蔵穴としての使用が考慮されている短冊形や長方形プランの箱形の掘削形態を有する土坑の分布が見られた。これらの土坑は厳密に言えば中世、近世のいずれに属するかをつまびらかにし得ないものであるが、このような短冊形や長方形プラン土坑が比較的集中して掘削される例では屋敷や畠地である場合が多いが、本遺跡では18号溝以西に屋敷の可能性が考慮され、分布域に屋敷を示す遺構が確認されないことから推して、本遺跡における短冊形、長方形プランの土坑は畠地に掘削されたものであろうと思慮される。

3. 3区の段差遺構

第3章第3節冒頭に記したように、3区中南部には幅10m以下を測る、上下2段の段差が確認された。上段は周囲から1m、下段は上段から更に0.4mほど下がって掘削される。この段差の左右両側(北東-南西)の傾斜は鋭角であり、上段端部(南東)の傾斜は鈍角である。なお、この段差は自然地形とは思われず、人為的に造成されたものと判断されるものである。その時期は特定できないが、この段差面に掘削される土坑、溝は古代から中世の早い段階の所産と想定されることから、古代に掘削された可能性を考慮することができる。

その掘削意図は明らかではないが、19号溝のように谷地形を意識したものではなく、階段状の土地区画造成を意図して掘削されたものと判断される。しかし、その掘削範囲は幅10mほどと限定的で、棚田のような建造物の築造とは考えられず、また山林の造成に伴う平坦面の築造とも考えにくい。一方、その掘削方位は、想定される条里方眼とは1/8周ほど回転した方向にあるため、条里制に依拠したものではなく、むしろ周囲の土地傾斜の方向に段差の進行方向は一致している。このような所見から、現時点では掘削意図を想定することはできないのである。

表17 遺物観察表(古墳時代以降)

1 区南2号竪穴建物											
挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第10図 PL.24	1	須恵器 皿	2号竪穴建物 完形	口底	8.0 4.5	高	1.7 黒色鈹物/酸化炎 焼成/にぶい褐 7.5YR5/4	体部から口縁部は直線的に開く。底部左回転糸切り無調整。整形時もロクロ左回転。	11世紀。		
1 区南7号土坑											
第14図 PL.24	1	灰釉陶器 碗	7号土坑 底部1/2	口底	7.4	高	— 白色鈹物微量/良 好/灰白10YR7/1	体部内面から高台外面に灰釉。高台内回転篋削り。	大原2号窯 式、10世紀前 半。		
1 区南16号溝											
第27図 PL.24	1	瀬戸・美濃 磁器 碗	16号溝 口縁部片	口底	—	高	— 白//	口縁部内面から外面に型紙による染付。	近現代。		
1 区南耕作遺構群											
第28図 PL.24	1	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	6号溝 体部上位片	口底	—	高	— 灰白//	内外面錆釉。	江戸時代。		
第28図 PL.24	2	瀬戸・美濃 陶器 碗	15号溝 口縁部片	口底	—	高	— 灰白//	内外面灰釉。	江戸時代。		
2 区60号土坑											
第31図 PL.24	1	瀬戸・美濃 陶器 碗	60号土坑 体部片	口底	—	高	— 灰白//	内面から体部外面下位に長石釉。高台脇回転横撫でにより窪む。釉厚は薄い。	17世紀か。		
2 区19号溝											
第34図 PL.24	1	土師器 甕	19号溝 口縁部片	口底	—	高	— 黒色鈹物/良好/明 赤褐5YR5/6	「コ」の字状口縁の上部片。	9世紀。		
2 区遺構外											
第36図 PL.24	1	埴輪 円筒か	2区カクラン 体部片	口底	—	高	— 礫/良好/にぶい黄 橙10YR6/4	外面は縦位ハケ目。内面は縦位ナデで、一部ハケ目が残る。			
3 区1号竪穴状遺構											
第39図 PL.24	1	在地系土器 内耳鍋	1号竪穴状遺構 体部片	口底	—	高	— 灰//	還元炎焼成。	中世。		
3 区耕作痕											
第49図 PL.24	1	肥前陶器 陶胎染付碗	3区方形耕作 痕 口縁部片	口底	—	高	— 灰白//	外面染付。貫入入る。	江戸時代。		
第49図 PL.24	2	瀬戸・美濃 陶器 瓶	3区方形耕作 痕 体部上位片	口底	—	高	— 灰白//	肩部外面に横線内外面に黄瀬戸釉、肩部外面に銅緑釉流す。下部に焼成前の円坑1カ所あり。	江戸時代。		
第49図 PL.24	3	搬入系土器 土管	3区方形耕作 痕 筒部片	口底	—	高	— 明赤褐//	無釉の土焼き土管。	近現代。		
第49図 PL.24	4	製作地不詳 磁器 碗	3区西側耕作 痕 体部片	口底	—	高	— 白//	内面無文。外面は黒色、茶色、オリーブ灰色の釉下彩。	近現代。		
第49図 PL.24	5	肥前陶器 陶胎染付碗	3区西側耕作 痕 口縁部片	口底	—	高	— 灰白//	外面染付。貫入入る。	江戸時代。		
3 区遺構外											
第50図 PL.24	1	須恵器 碗か杯	3区表土 口縁部片	口底	—	高	— 礫微量/還元炎焼 成/灰黄2.5YR7/2	口縁端部小さく外反。焼き締まりは弱い。	平安時代。		

表18 遺物観察表(縄文時代)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				残径	厚	重			
第51図 PL.24	1	縄文土器 深鉢	2区19溝 胴部破片	3.6 4.1	厚	0.9	A//	沈線文を斜位・異方向に施文して羽状意匠を構成。内外面共に風化。	加曾利B2式
第51図 PL.24	2	縄文土器 深鉢	2区19溝 胴部破片	3.8 5.0	厚	1.0	D//	RL縄文を縦位施文し、括れ部に複数状の横位沈線文や上下に刺突を加えた8字状貼付文を施す。	堀之内I式
第51図 PL.24	3	縄文土器 深鉢	3区西側耕作痕 胴部破片	3.6 6.6	厚	0.8	C//	RL縄文を横位に施文。内外面共にやや風化。	早期後半
第51図 PL.24	4	縄文土器 深鉢	3区東側表土 胴部破片	3.6 2.3	厚	0.7	E//	やや繊細なRL縄文を横位に施文。内外面共にやや被熱風化。	諸磯a式
第51図 PL.24	5	縄文土器 深鉢	3区FP泥流、 2区堅穴付近 胴部破片	5.3 5.4	厚	1.0	B//	細い棒状具により斜位の沈線区画文を施す。内外面共にやや被熱風化・僅かな煤状炭化物付着。	堀之内I式
第51図 PL.24	6	微細剥離痕 ある剥片	黒色土中 完形	長幅 5.0	厚 重	1.0 28.9	黒色頁岩//	打面は自然面であり円礫を利用する。左右両側面の背腹両面に微細剥離痕が認められる。	

宮貝戸遺跡 縄文土器の胎土分類

分類	特徴
A	少量の円磨度の進んだ珪質乳白色岩片礫・粗砂や赤色岩片・長石・輝石の粗・細砂を含む緻密な胎土。
B	少量の円磨度の進んだ軽石の礫・粗砂や中量の輝石と少量の長石・角閃石・石英・赤色岩片の粗・細砂を含む緻密な胎土。
C	少量の円磨度の進んだ軽石・チャートの礫・粗砂や珪質乳白色岩片・輝石・長石・角閃石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。
D	多量の円磨度の進んだ灰白色・珪質乳白色岩片の礫・粗砂や輝石粗・細砂と少量の長石・石英・赤色岩片・雲母の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。
E	中量の円磨度の進んだ長石・輝石・灰白色岩片や少量の石英・珪質乳白色・角閃石の粗・細砂を含む緻密な胎土。

※各分類はルーペ等を使用した肉眼観察による相対的なものである。

※夾雑物の粒径分類については「新版 標準土色帳」の「土壌調査用チャート」に準拠した。

表19 土師器甕非掲載遺物集計表

区	遺構番号	遺構名	点数	重量(g)	備考
1	2	堅穴建物	4	28	
	15	土坑	1	82	
	37	土坑	1	9	
	1	谷	1	1	
2	19	溝	7	32	
	19	溝(黒色土層内)	4	9	
		表土	2	6	
		攪乱	1	6	
3		黒色土層内	3	33	
		表土	2	17	
		計	26	223	

表20 縄文土器非掲載遺物集計表

区	遺構番号	遺構名	点数	重量(g)	備考
2	19	溝(黒色土層内)	1	9.9	堀之内I式
		表土	1	24.5	焼町土器
			3	30.6	不明
3		表土	1	12.1	諸磯a式
			1	11.3	唐草文系土器(加曾利E式併行)
			2	72.0	堀之内I式
			2	9.2	不明
		計	11	169.6	

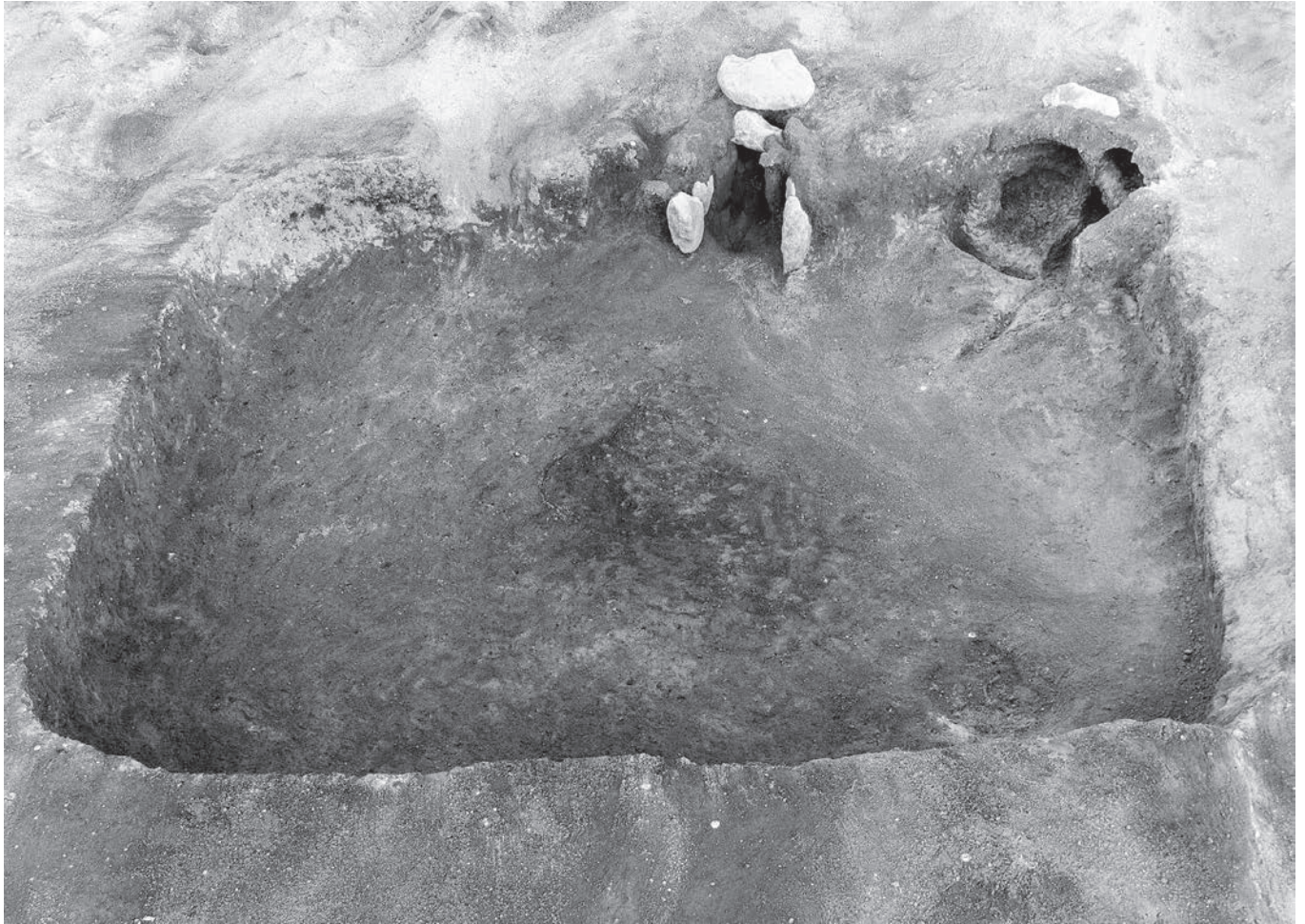
写真図版



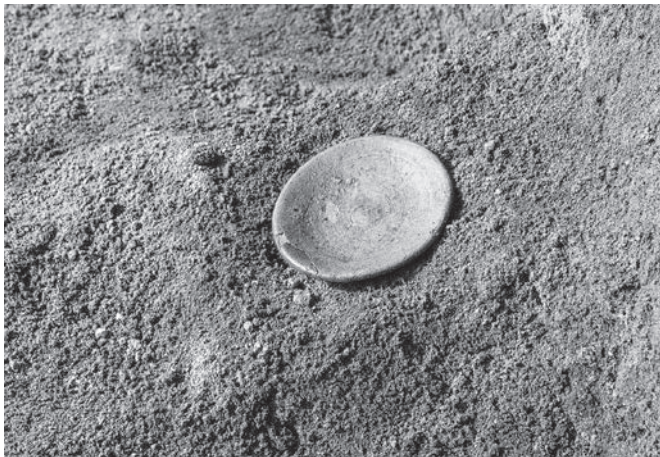
1 1区航空写真(東より、下蛇行部が鳴沢川)



2 1区航空写真(上南東)



1 1区南2号竪穴建物全景(北西より)



2 1区南2号竪穴建物遺物出土状況(東より)



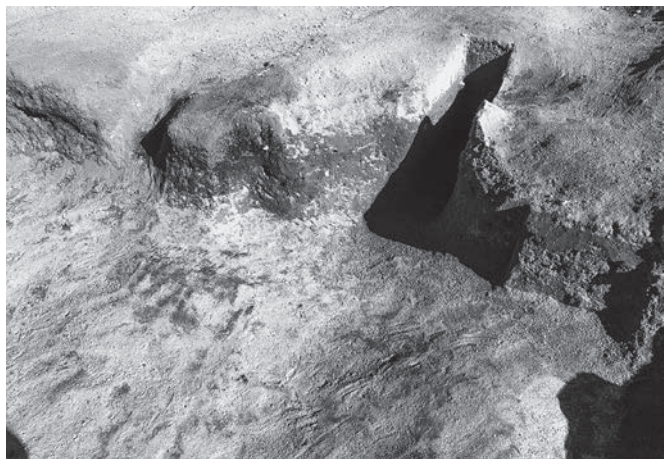
3 1区南2号竪穴建物全景(北西より)



4 1区南2号竪穴建物竈1・2(北西より)



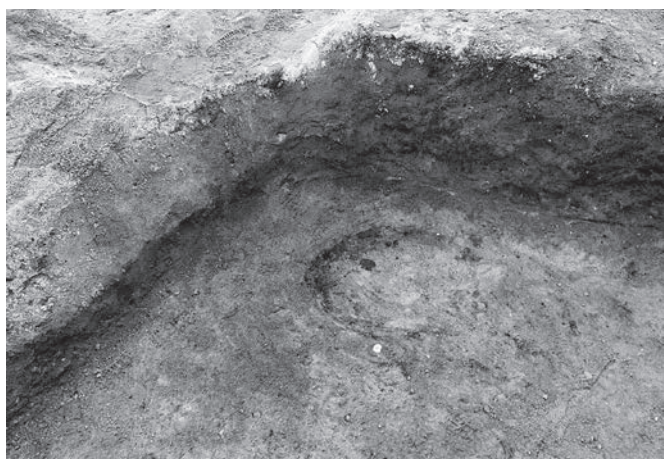
5 1区南2号竪穴建物竈1・2(西より)



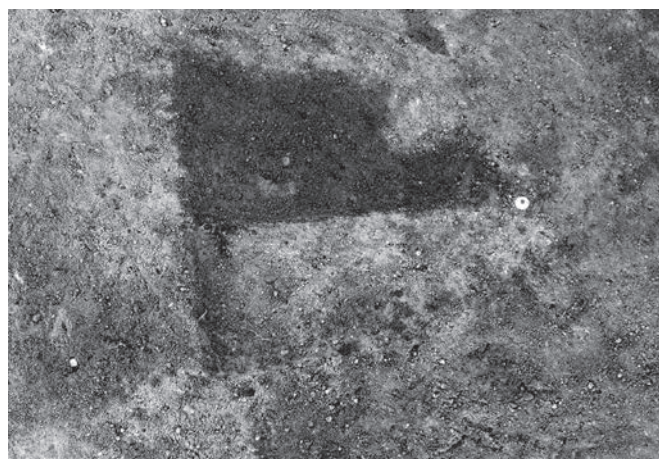
1 1区南2号竪穴建物竈1掘り方(南西より)



2 1区南2号竪穴建物竈2掘り方(北より)



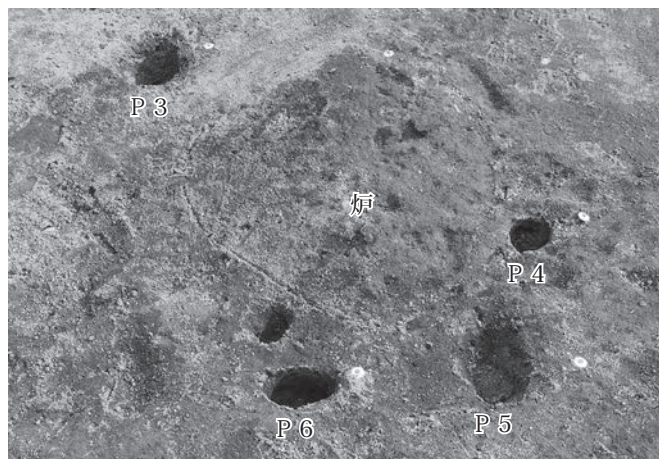
3 1区南2号竪穴建物ピット1(北東より)



4 1区南2号竪穴建物ピット2(南より)



5 1区南2号竪穴建物ピット3(北東より)

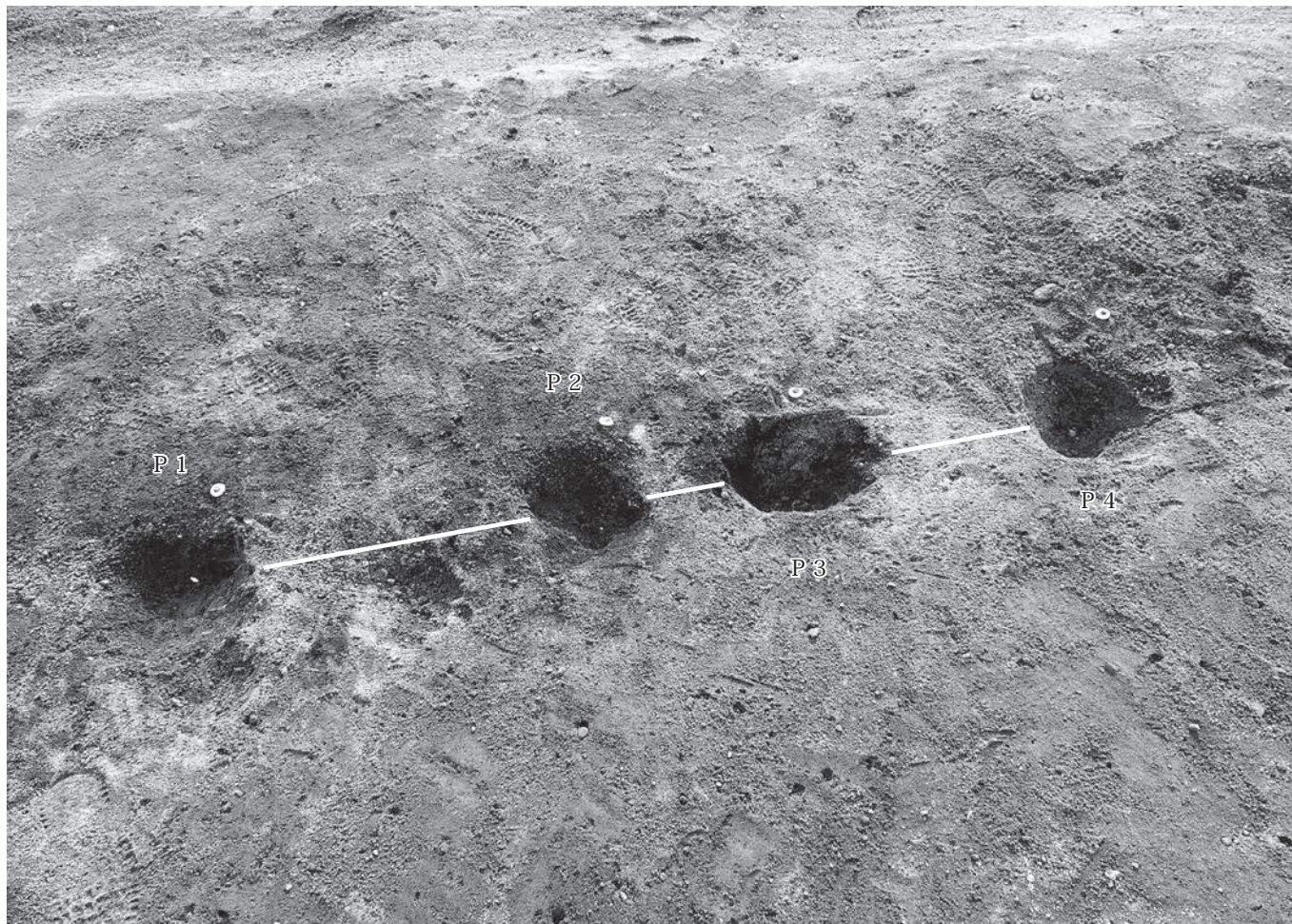


6 1区南2号竪穴建物ピット3～6、炉(北西より)

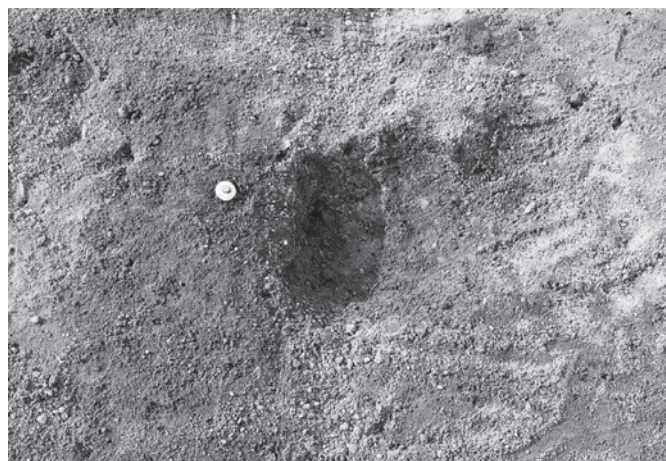


7 1区南2号竪穴建物掘り方全景(北西より)

PL.4



1 1区南1号柵全景(北より)



2 1区南1号柵ピット1(東より)



3 1区南1号柵ピット2(東より)



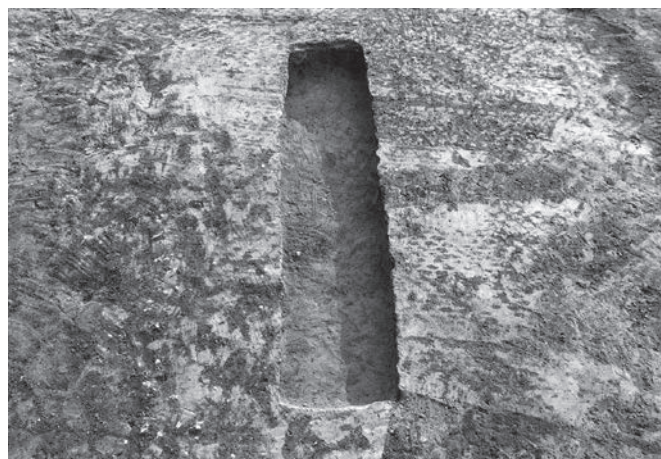
4 1区南1号柵ピット3(東より)



5 1区南1号柵ピット4(東より)



1 1区北1号土坑全景(南より)



2 1区南2号土坑全景(北より)



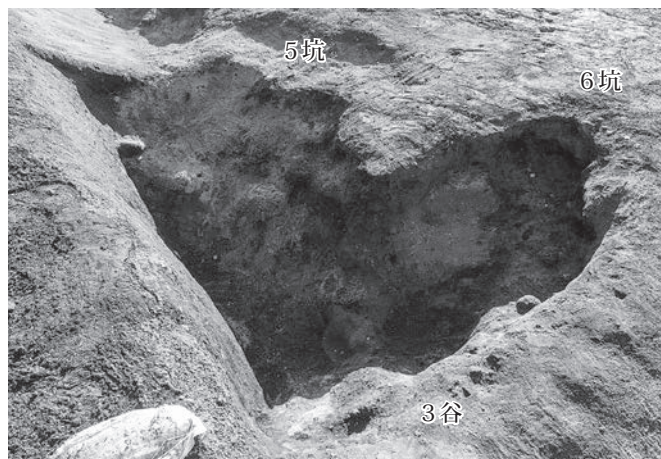
3 1区南3号土坑全景(南より)



4 1区北4号土坑、2号谷全景(北より)



5 1区南5号土坑全景(北東より)



6 1区南5・6号土坑、3号谷全景(北東より)



7 1区南7号土坑全景(北西より)



8 1区南7号土坑遺物出土状況(東より)

PL.6



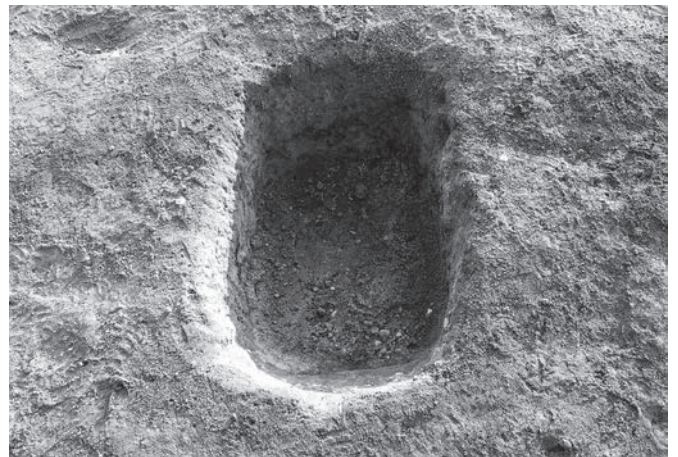
1 1区南8号土坑全景(北より)



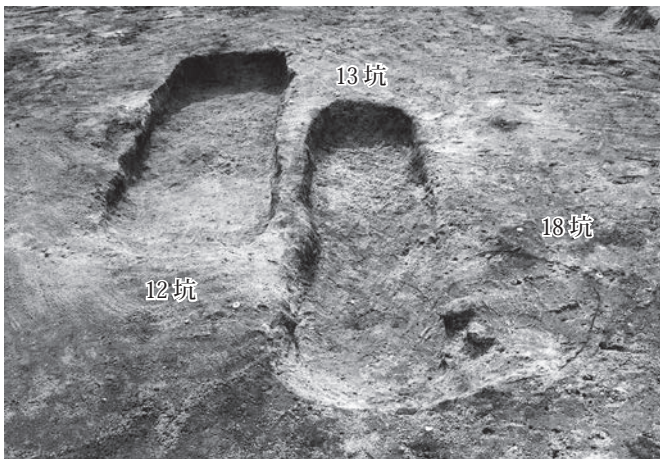
2 1区南9号土坑全景(北東より)



3 1区南10号土坑全景(北東より)



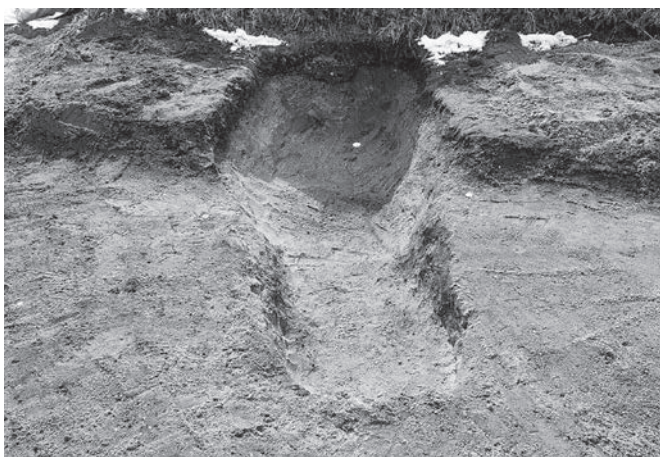
4 1区南11号土坑全景(西より)



5 1区南12・13・18号土坑全景(北より)



6 1区南18号土坑全景(東より)



7 1区南14号土坑全景(北より)



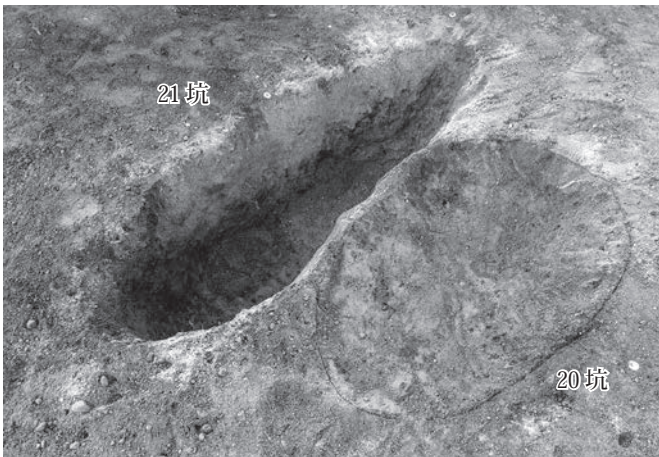
8 1区南15号土坑全景(北より)



1 1区南16号土坑土層断面(南より)



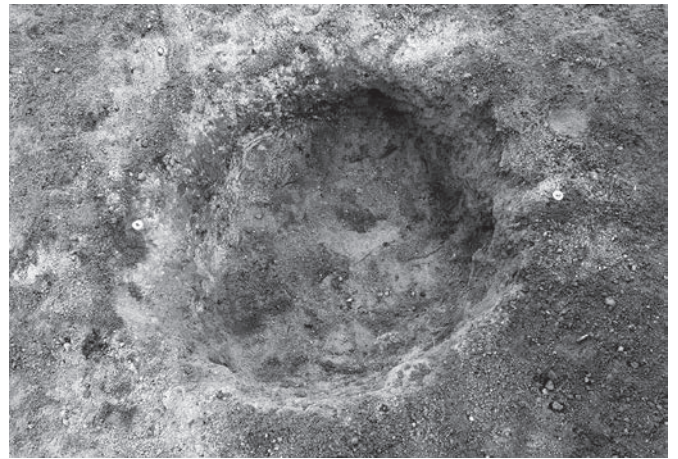
3 1区南8・17・19号土坑全景(北より)



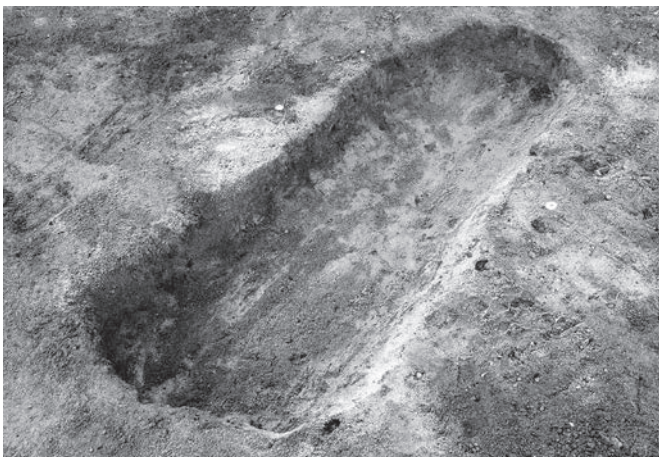
2 1区南20・21号土坑全景(北西より)



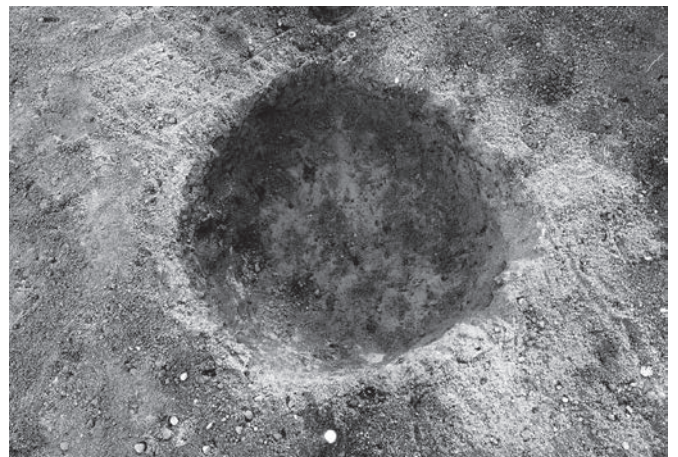
4 1区南22号土坑全景(北より)



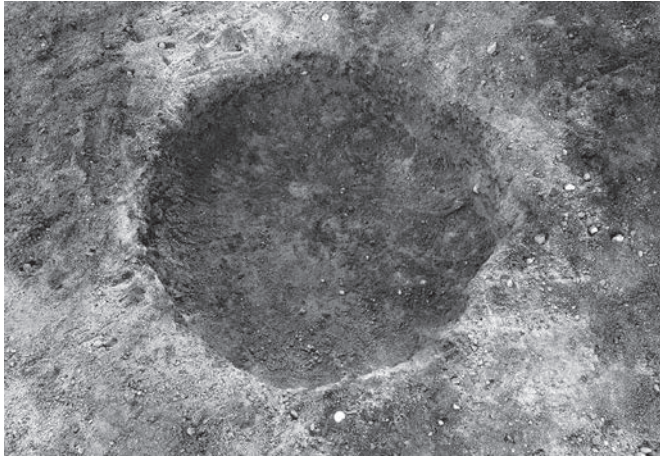
5 1区南23号土坑全景(南より)



6 1区南24号土坑全景(北東より)



7 1区南25号土坑全景(南西より)



1 1区南26号土坑全景(南西より)



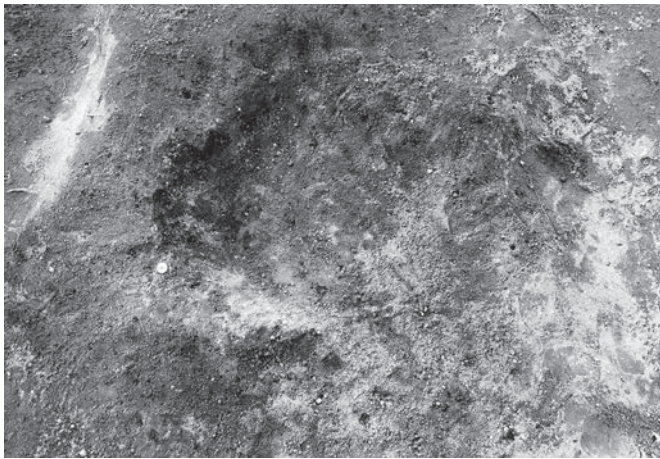
2 1区南27号土坑全景(西より)



3 1区南28号土坑全景(北より)



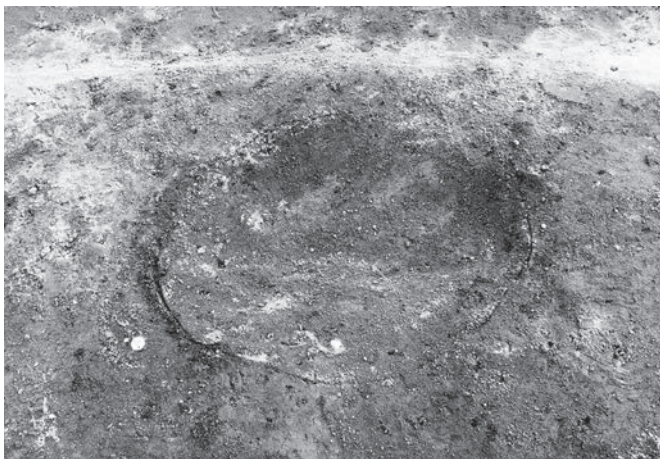
4 1区南29号土坑土層断面(南東より)



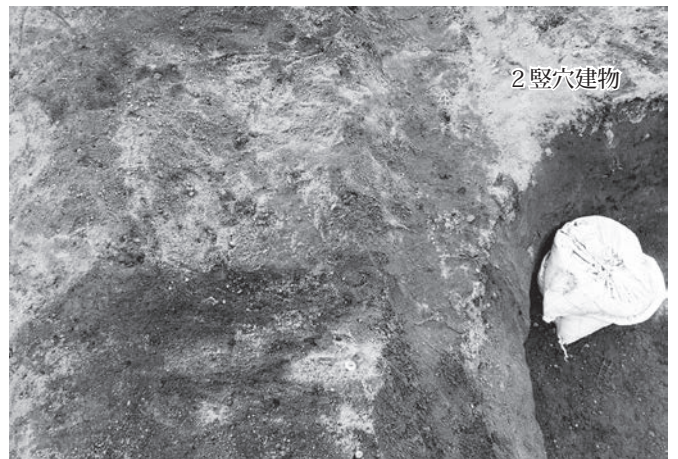
5 1区南30号土坑全景(東より)



6 1区南31号土坑全景(南東より)



7 1区南32号土坑全景(北より)



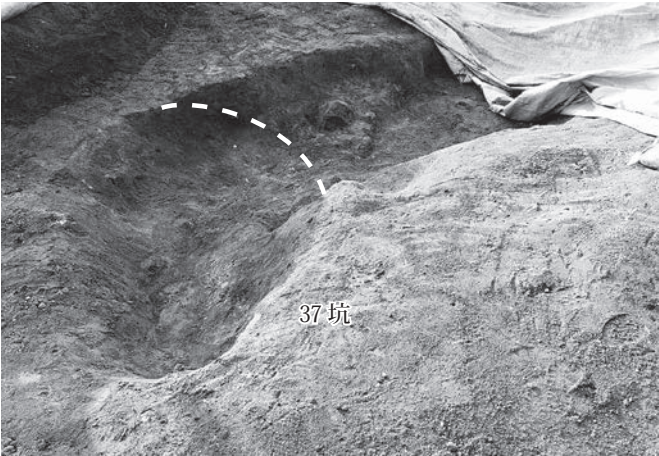
8 1区南33号土坑全景(東より)



1 1区南34号土坑全景(北東より)



2 1区南35号土坑全景(南東より)



3 1区北37号土坑全景(北東より)

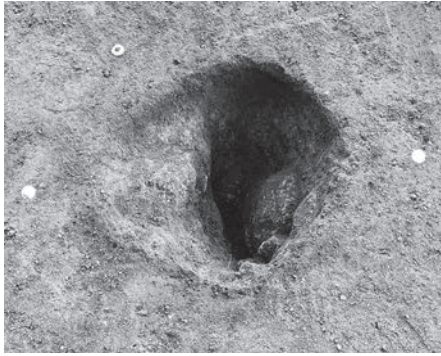


4 1区北37号土坑全景、1号谷土層断面(南東より)

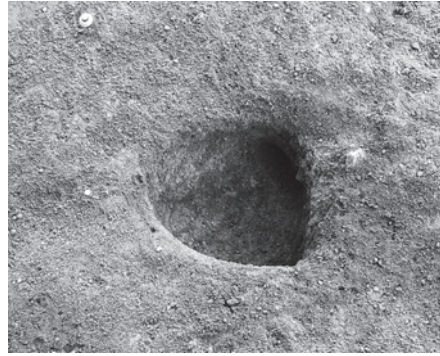


5 1区北37号土坑、1号谷全景(北西より)

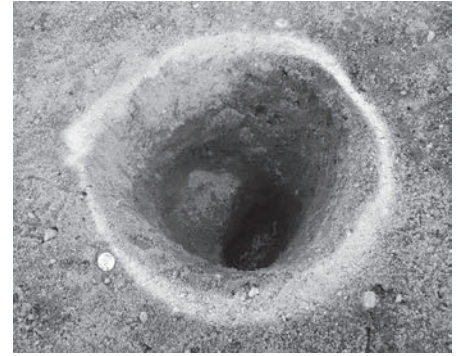
PL.10



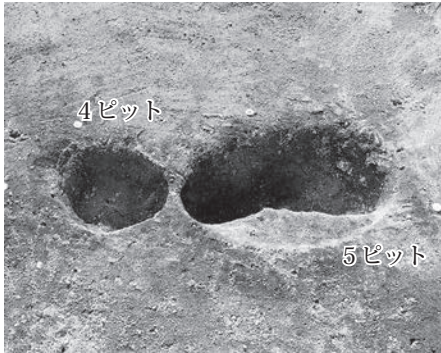
1 1区北1号ピット全景(北より)



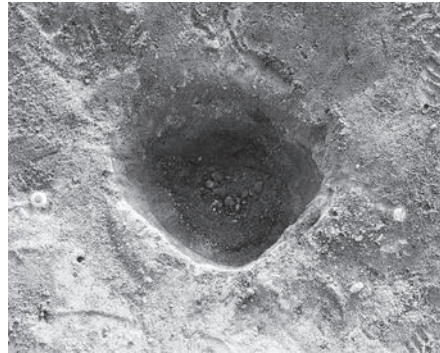
2 1区北2号ピット全景(北より)



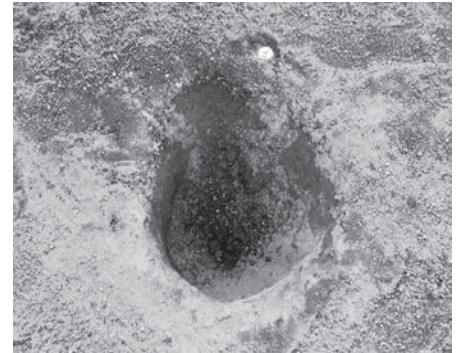
3 1区南3号ピット全景(北東より)



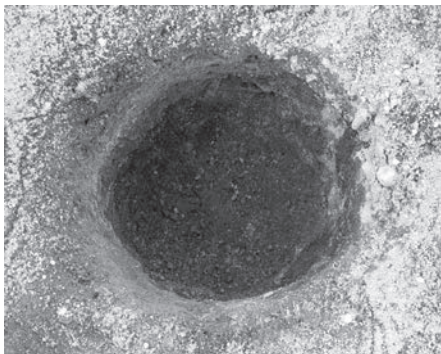
4 1区南4・5号ピット全景(北より)



5 1区南6号ピット全景(北より)



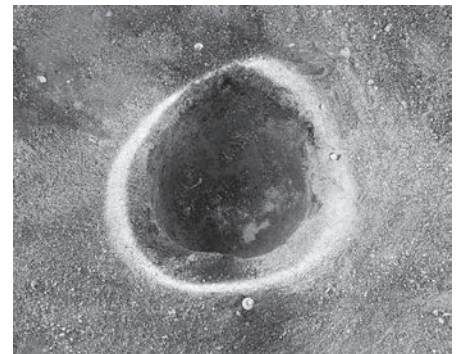
6 1区南7号ピット全景(北東より)



7 1区南8号ピット全景(東より)



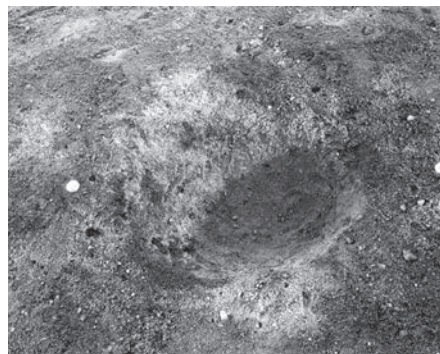
8 1区南9号ピット全景(北東より)



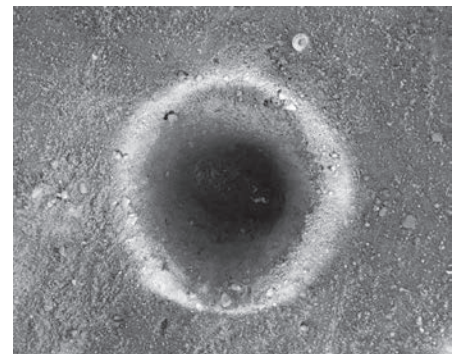
9 1区南10号ピット全景(南東より)



10 1区南11号ピット全景(北より)



11 1区南12号ピット全景(南西より)



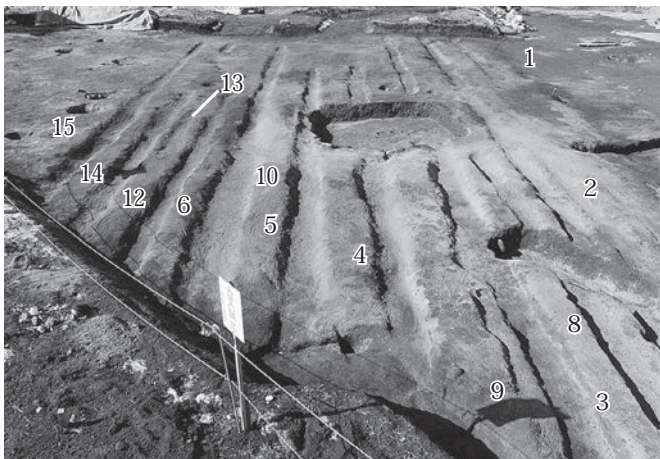
12 1区南13号ピット全景(東より)



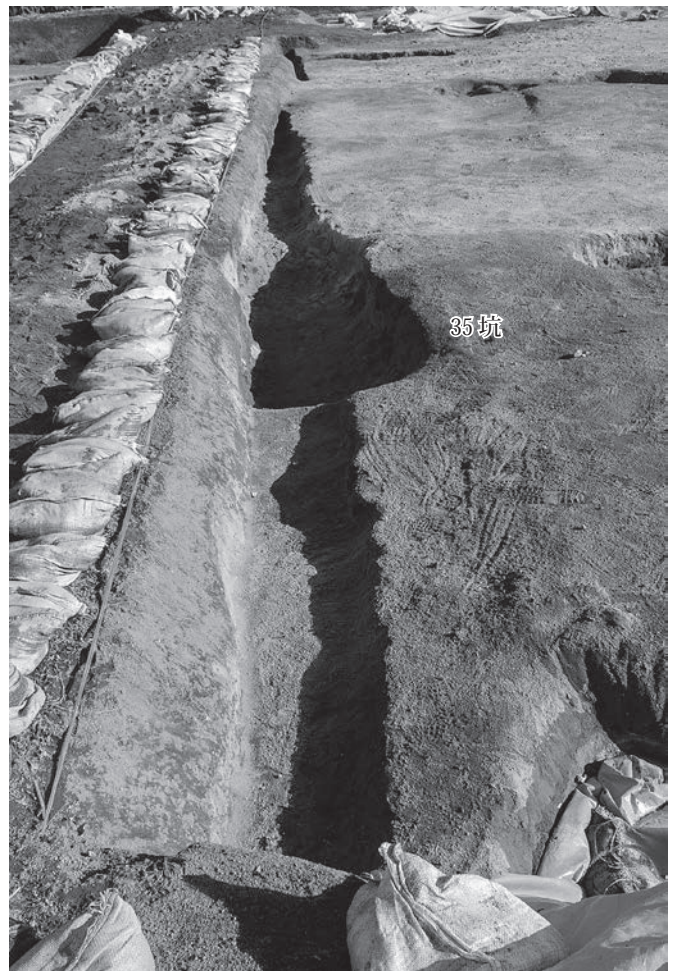
13 1区南14号ピット全景(北西より)



1 1区南耕作遺構群(1~10・12~15号溝)全景(北西より)



2 1区南耕作遺構群(1~10・12~15号溝)全景(南東より)



4 1区南16号溝(西より)



3 1区南11号溝全景(北より)



1 1区北1号島北部全景(北より)



2 1区北1号島南部全景(南より)



3 1区南2号島東部全景(北西より)



4 1区南2号島西部全景(南西より)



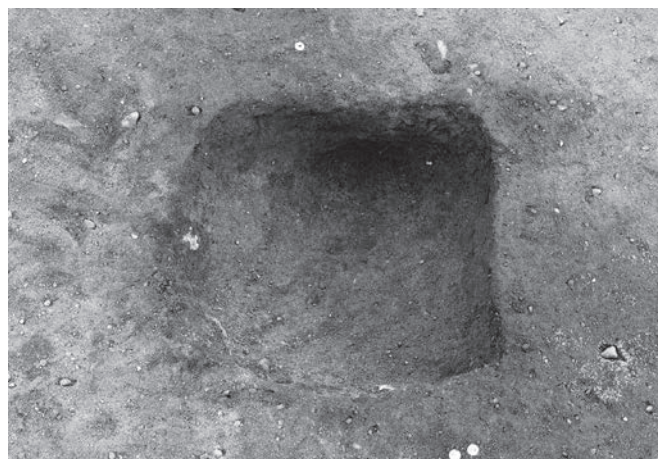
5 1区作業風景(南西より)



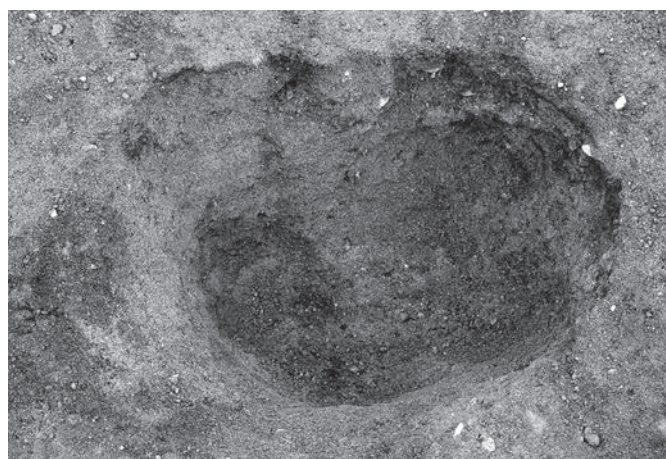
1 2区航空写真(左北)



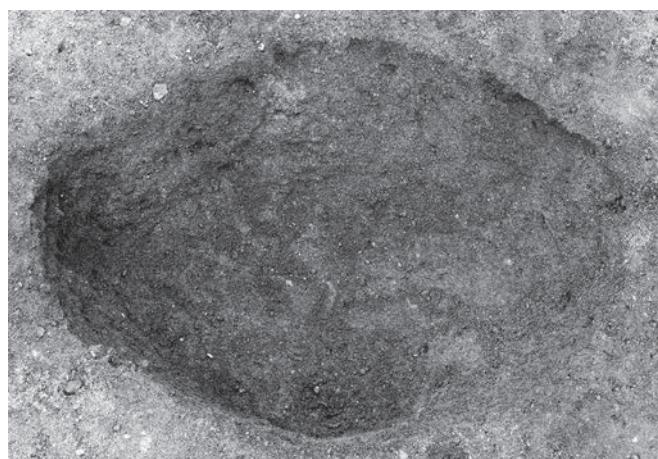
2 2区52号土坑全景(東より)



3 2区53号土坑全景(南東より)



4 2区54号土坑全景(北より)



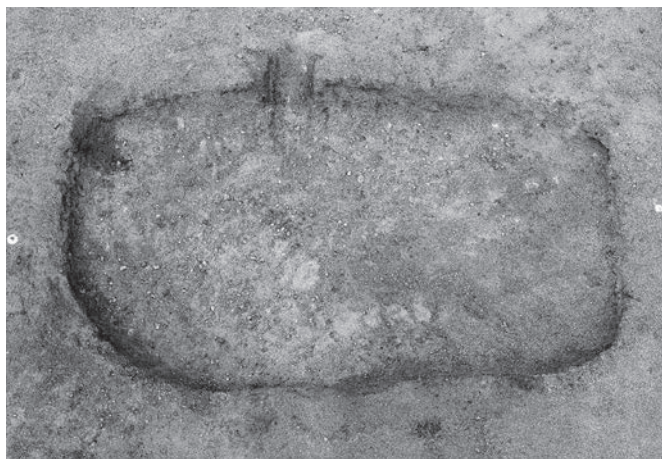
5 2区55号土坑全景(東より)



1 2区56号土坑全景(南より)



2 2区57号土坑全景(西より)



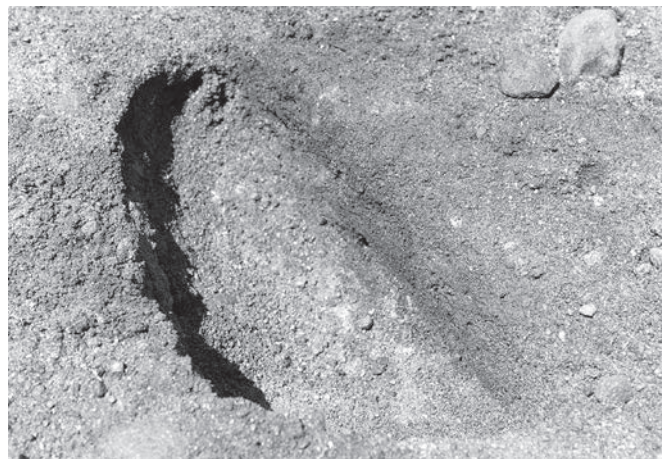
3 2区58号土坑全景(東より)



4 2区59号土坑全景(東より)



5 2区60号土坑全景(東より)



6 2区38号ピット土層断面(南より)



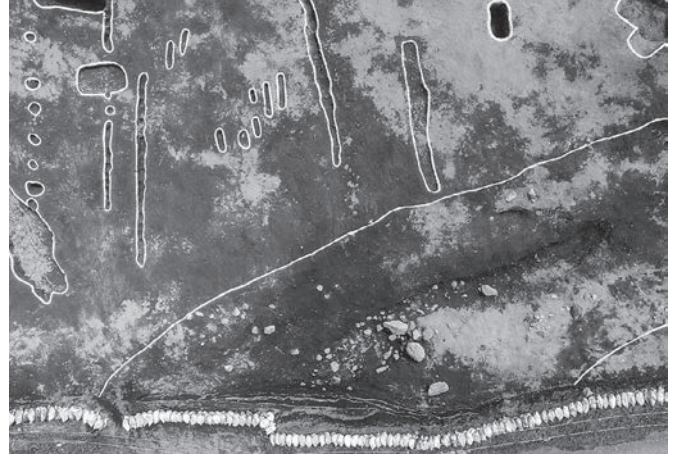
7 2区39号ピット土層断面(南より)



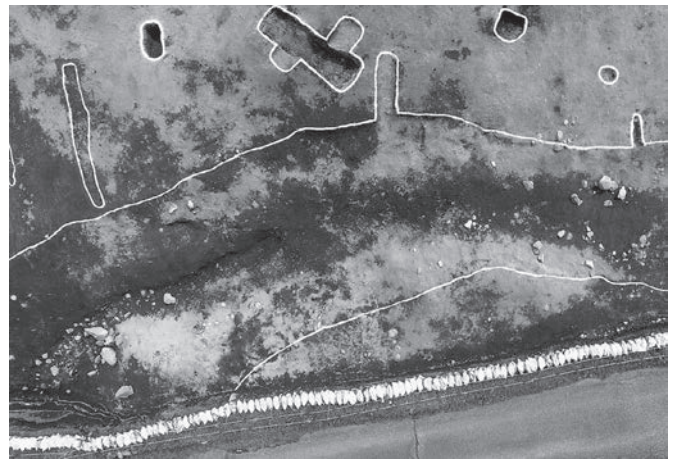
8 2区40号ピット土層断面(西より)



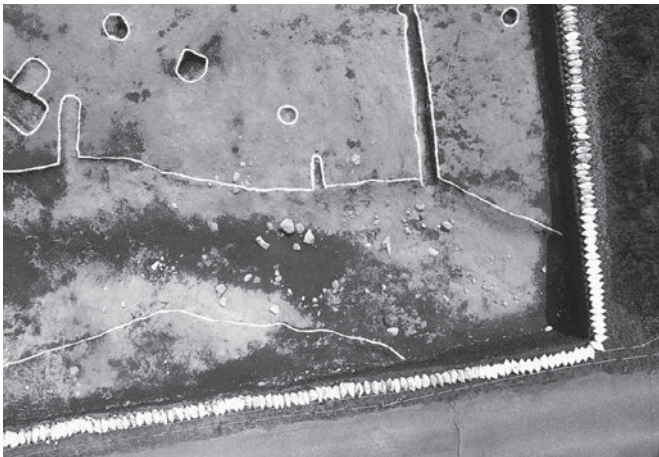
1 2区19号溝全景(北より)



2 2区19号溝北部全景(西側上空より)



3 2区19号溝中央部全景(西側上空より)



4 2区19号溝南部全景(西側上空より)



5 2区19号溝南西隅部全景(南東より)



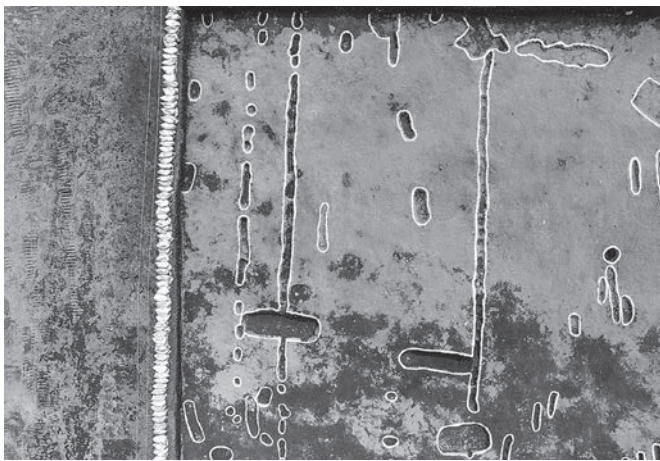
6 2区19号溝粕川堆積分布状況(南より)



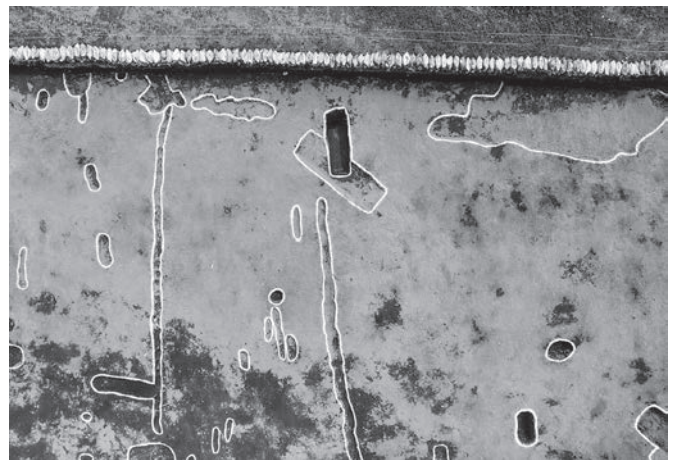
7 2区作業風景(東より)



1 2区耕作痕全景(東より)



2 2区耕作痕北東隅部全景(西側上空より)



3 2区耕作痕東部全景(西側上空より)



4 2区耕作痕北西隅部全景(西側上空より)



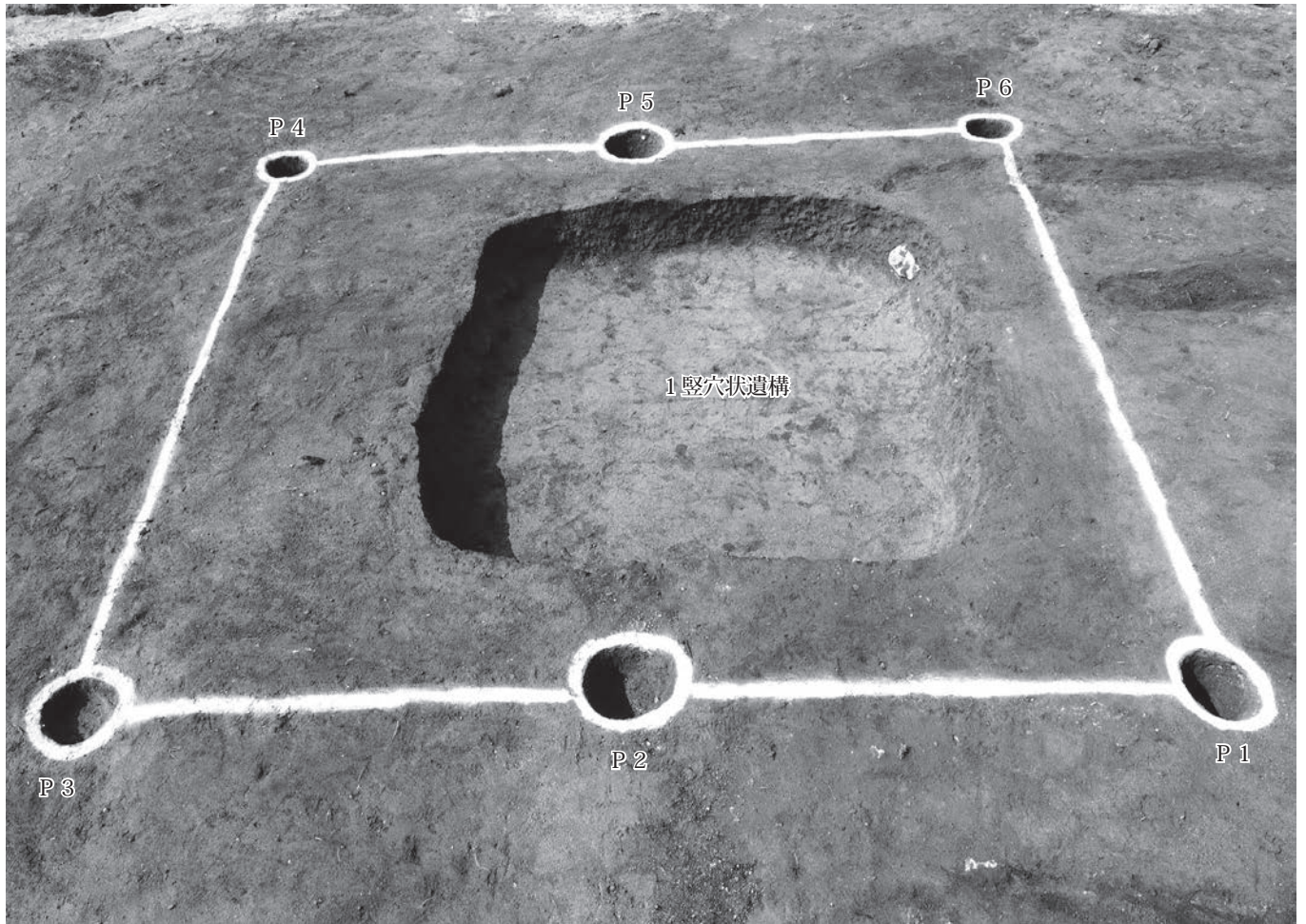
5 2区耕作痕西部全景(西側上空より)



1 3区全景(西より)



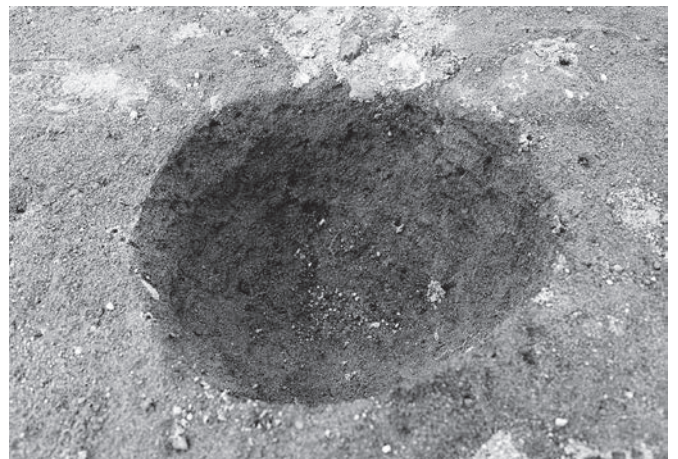
2 3区粕川堆積下窪地全景(西より)



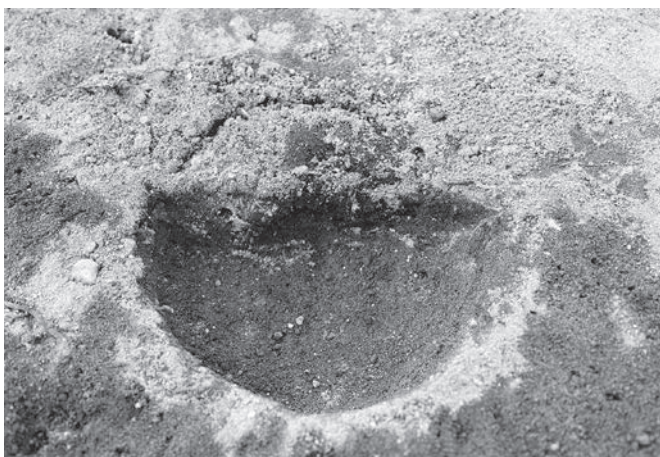
1 3区1号掘立柱建物全景(南より)



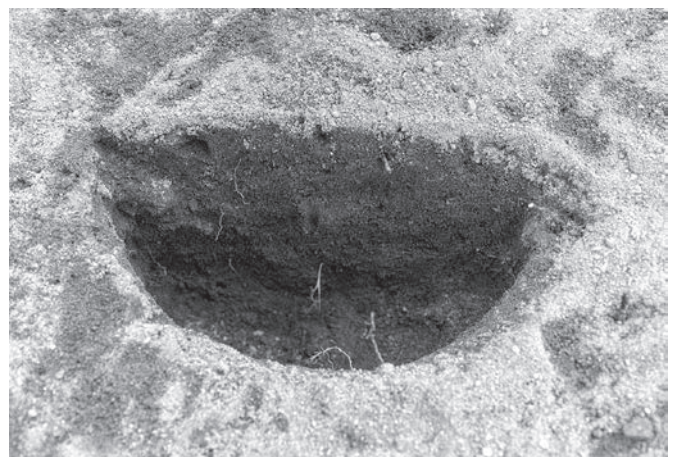
2 3区1号掘立柱建物ピット1土層断面(南より)



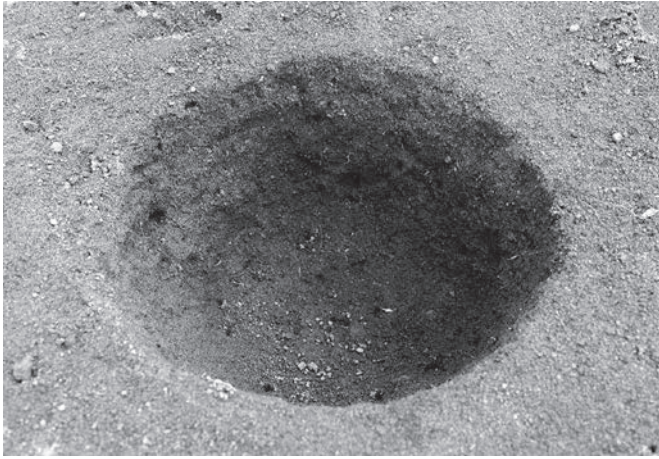
3 3区1号掘立柱建物ピット2土層断面(南より)



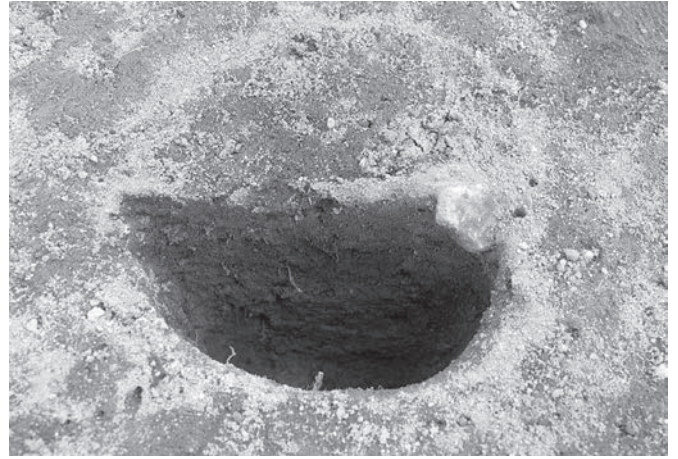
4 3区1号掘立柱建物ピット3土層断面(南より)



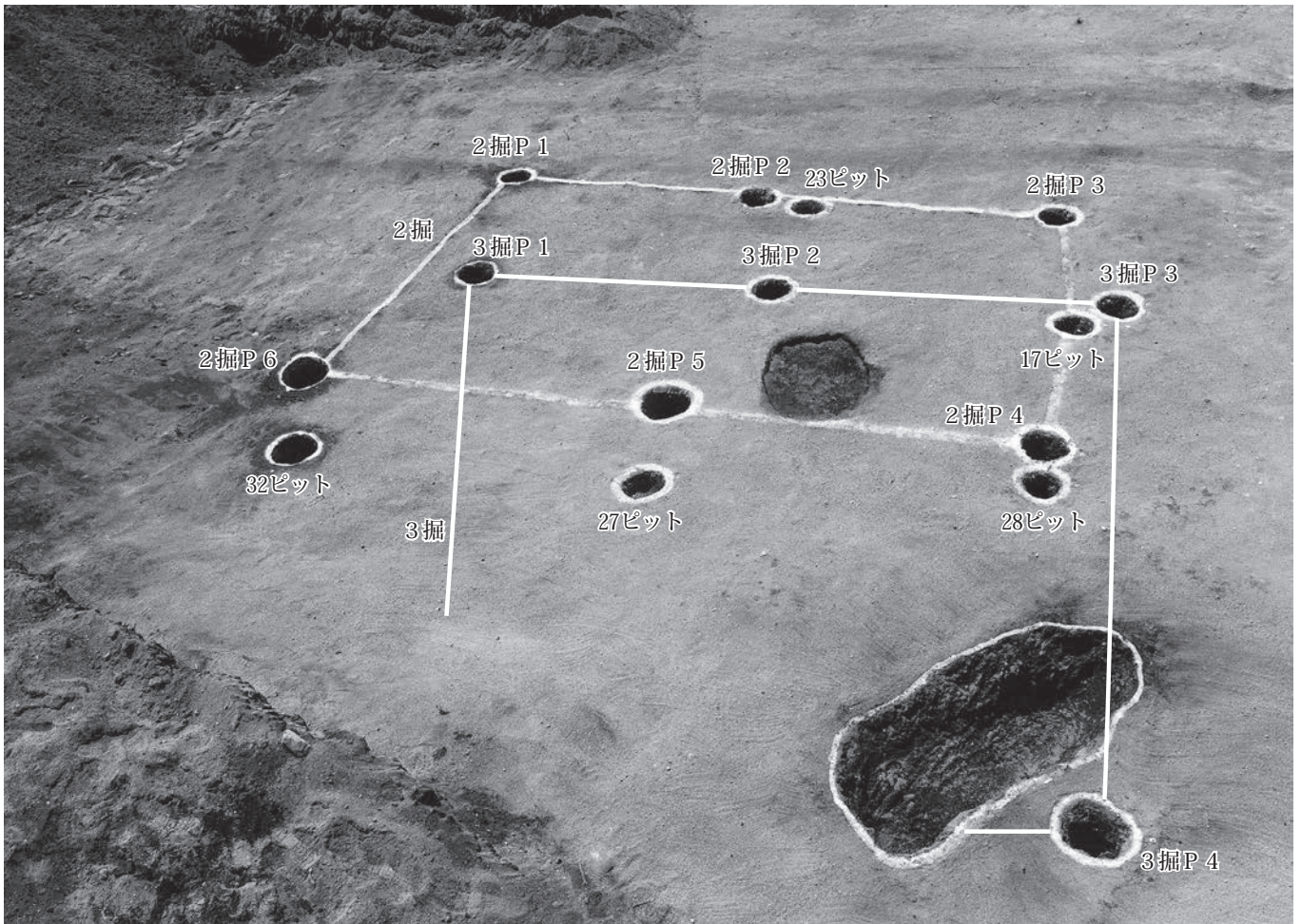
5 3区1号掘立柱建物ピット4土層断面(北より)



1 3区1号掘立柱建物ピット5土層断面(北より)



2 3区1号掘立柱建物ピット6土層断面(北より)



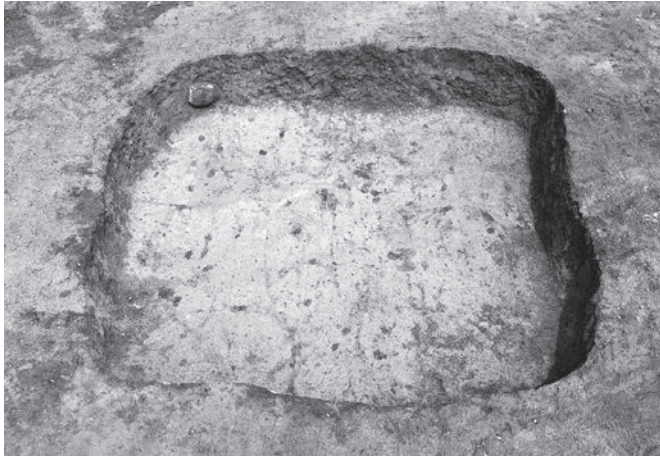
3 3区2・3号掘立柱建物、17・23・27・28・32号ピット全景(北より)



4 3区2号掘立柱建物ピット1土層断面(西より)



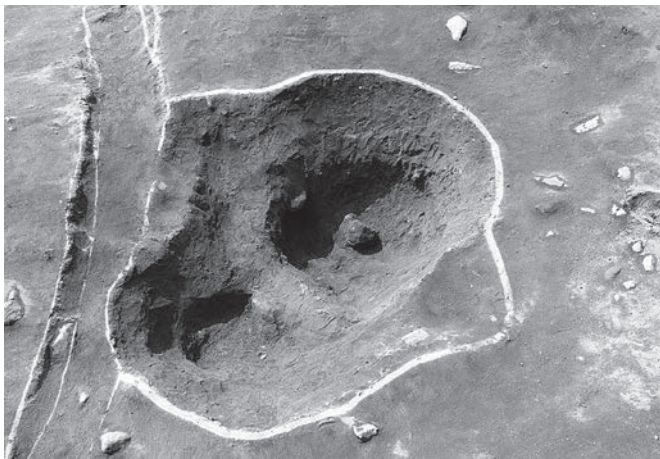
5 3区2号掘立柱建物ピット6土層断面(西より)



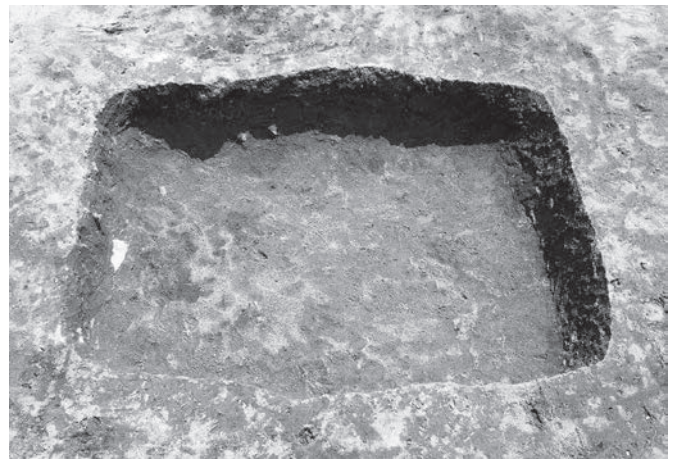
1 3区1号堅穴状遺構全景(西より)



2 3区2号堅穴状遺構礫出土状況(東より)



3 3区2号堅穴状遺構全景(西より)



4 3区36号土坑全景(北より)



5 3区37号土坑全景(北東より)



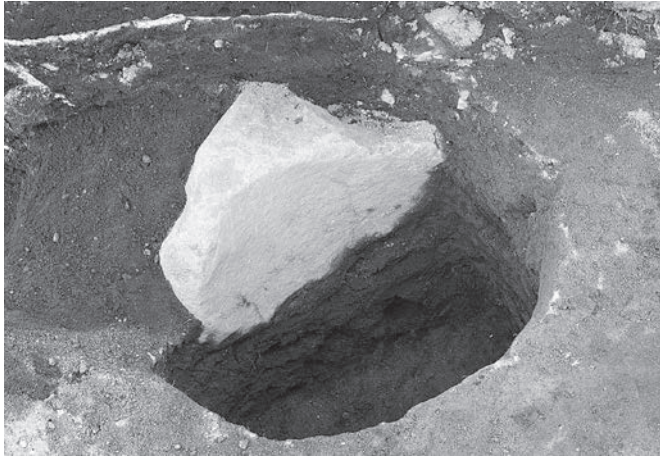
6 3区38号土坑全景(東より)



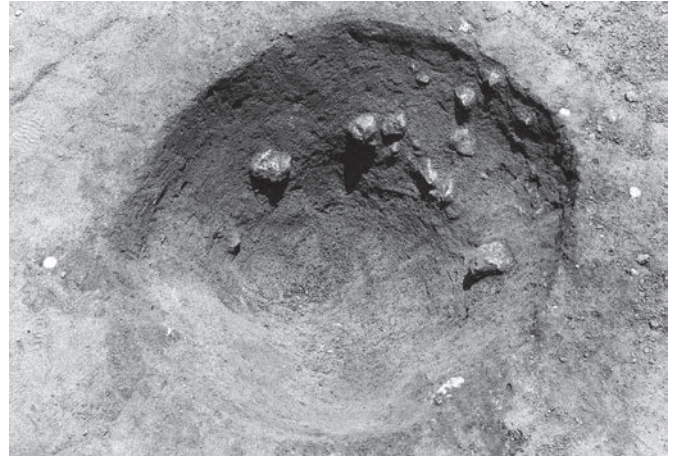
7 3区39号土坑全景(南東より)



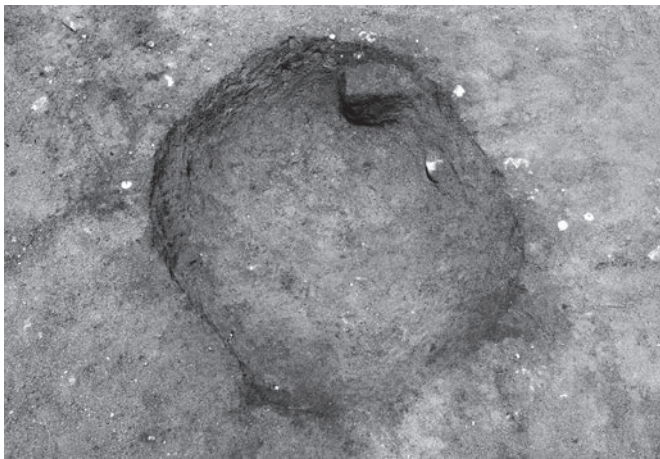
8 3区40号土坑全景(北より)



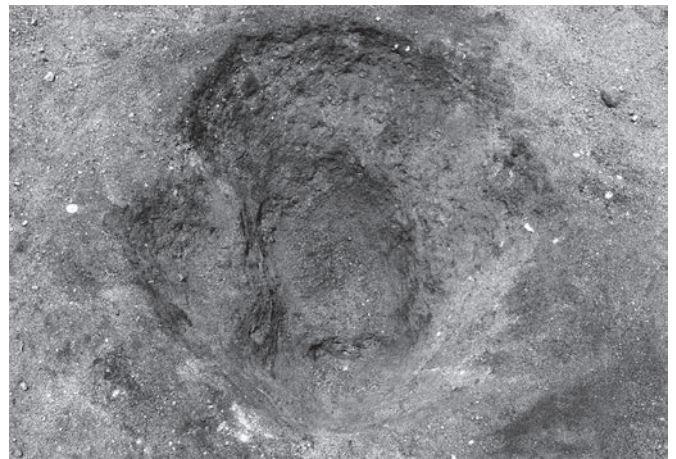
1 3区41号土坑全景(北より)



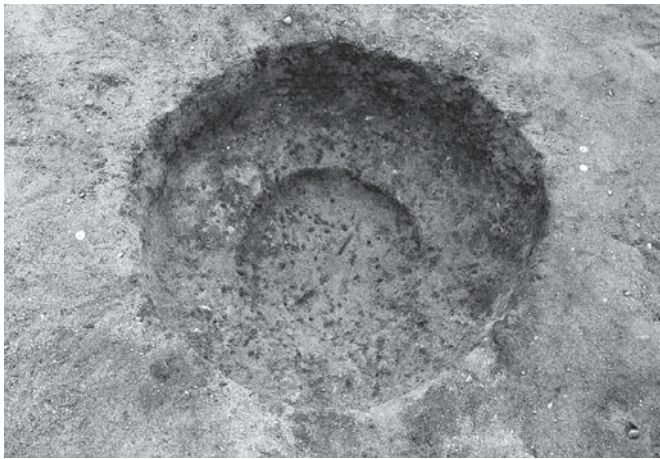
2 3区42号土坑全景(北より)



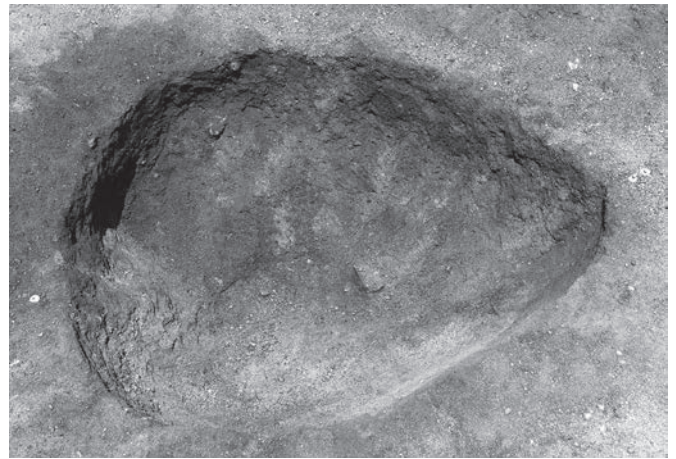
3 3区43号土坑全景(南より)



4 3区44号土坑全景(南東より)



5 3区45号土坑全景(南西より)



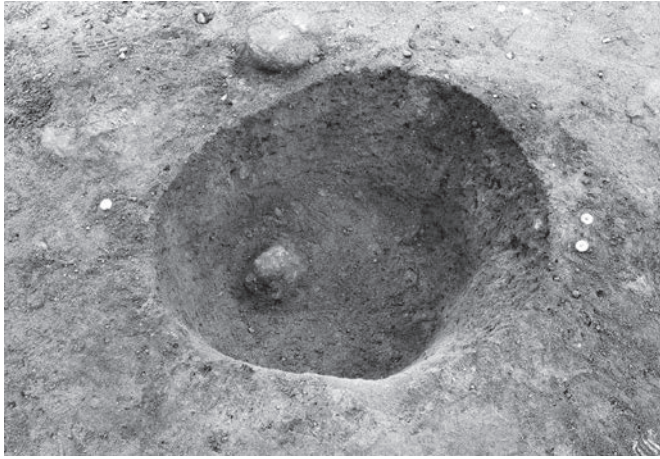
6 3区46号土坑全景(南より)



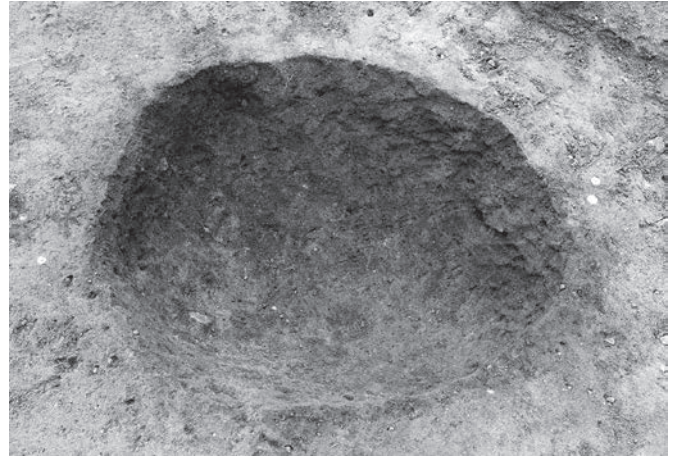
7 3区47号土坑全景(北西より)



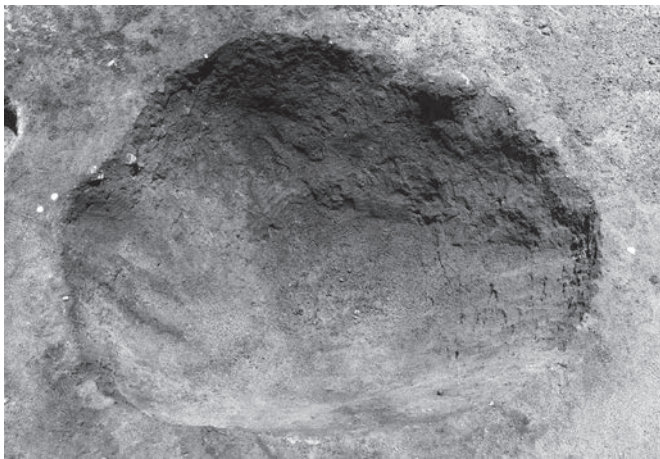
8 3区48号土坑全景(北より)



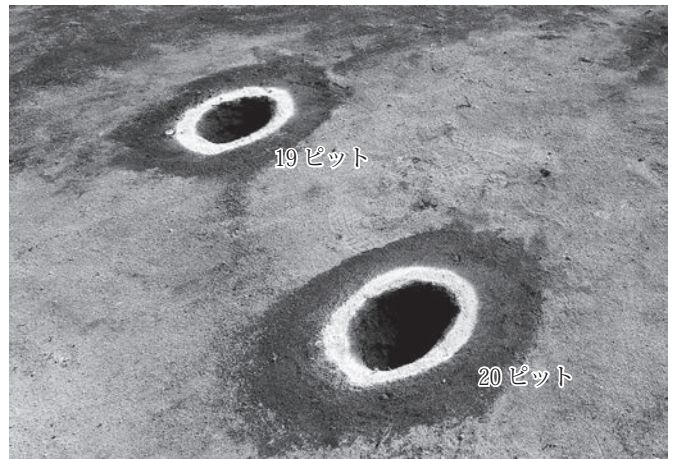
1 3区49号土坑全景(南東より)



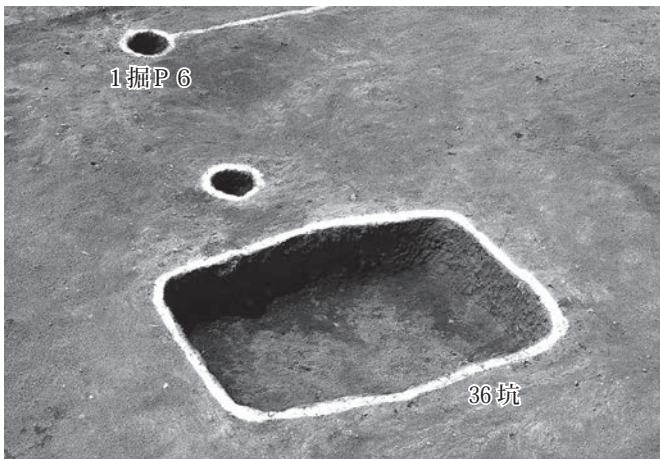
2 3区50号土坑全景(東より)



3 3区51号土坑全景(北西より)



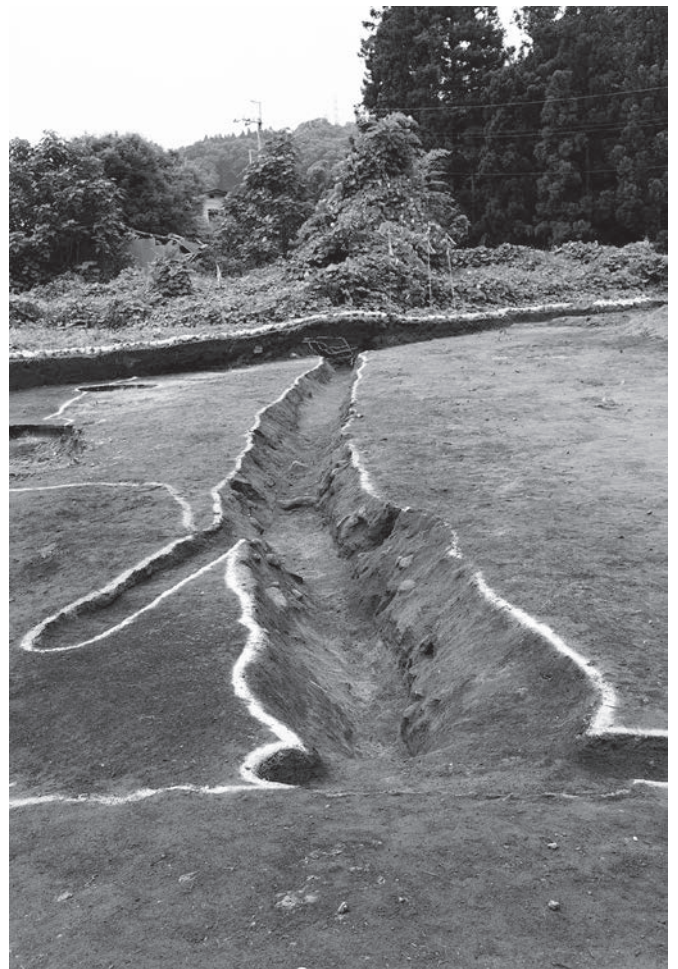
4 3区19・20号ピット全景(南東より)



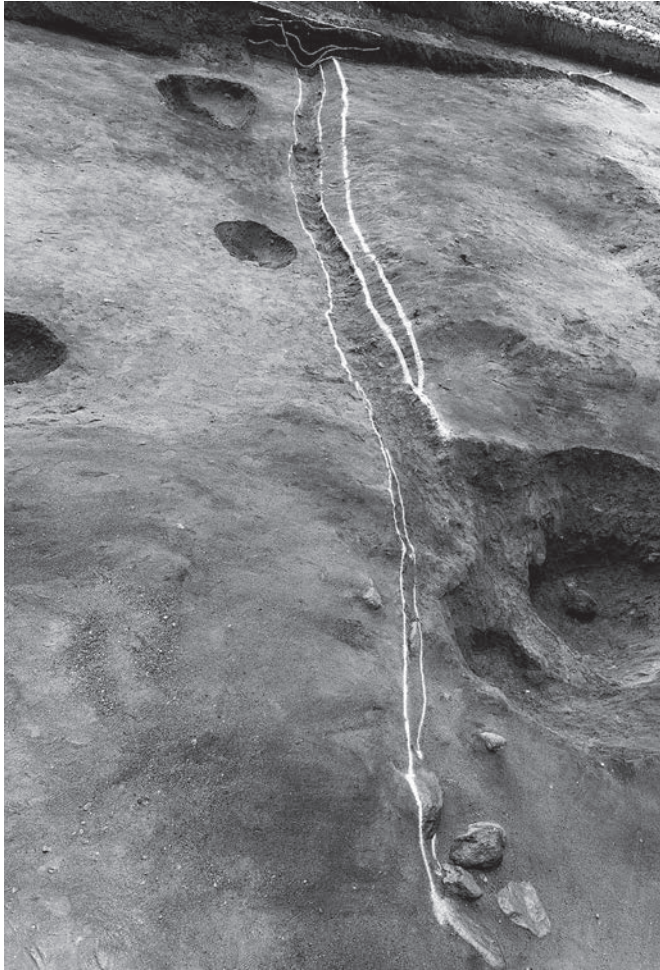
5 3区25号ピット全景(北より)



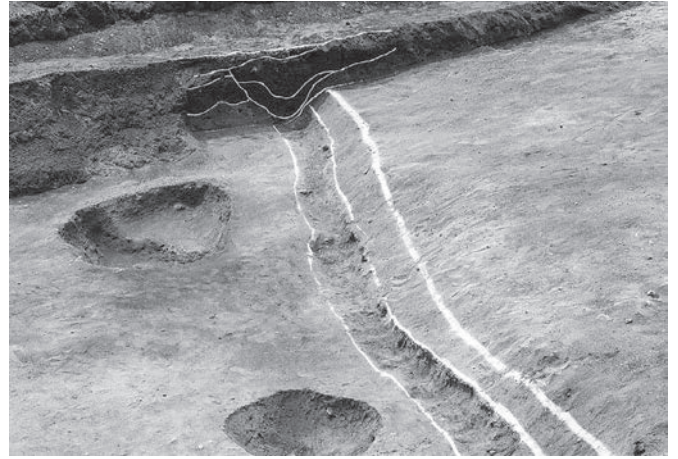
6 3区17号溝礫出土状況(北より)



7 3区17号溝全景(北より)



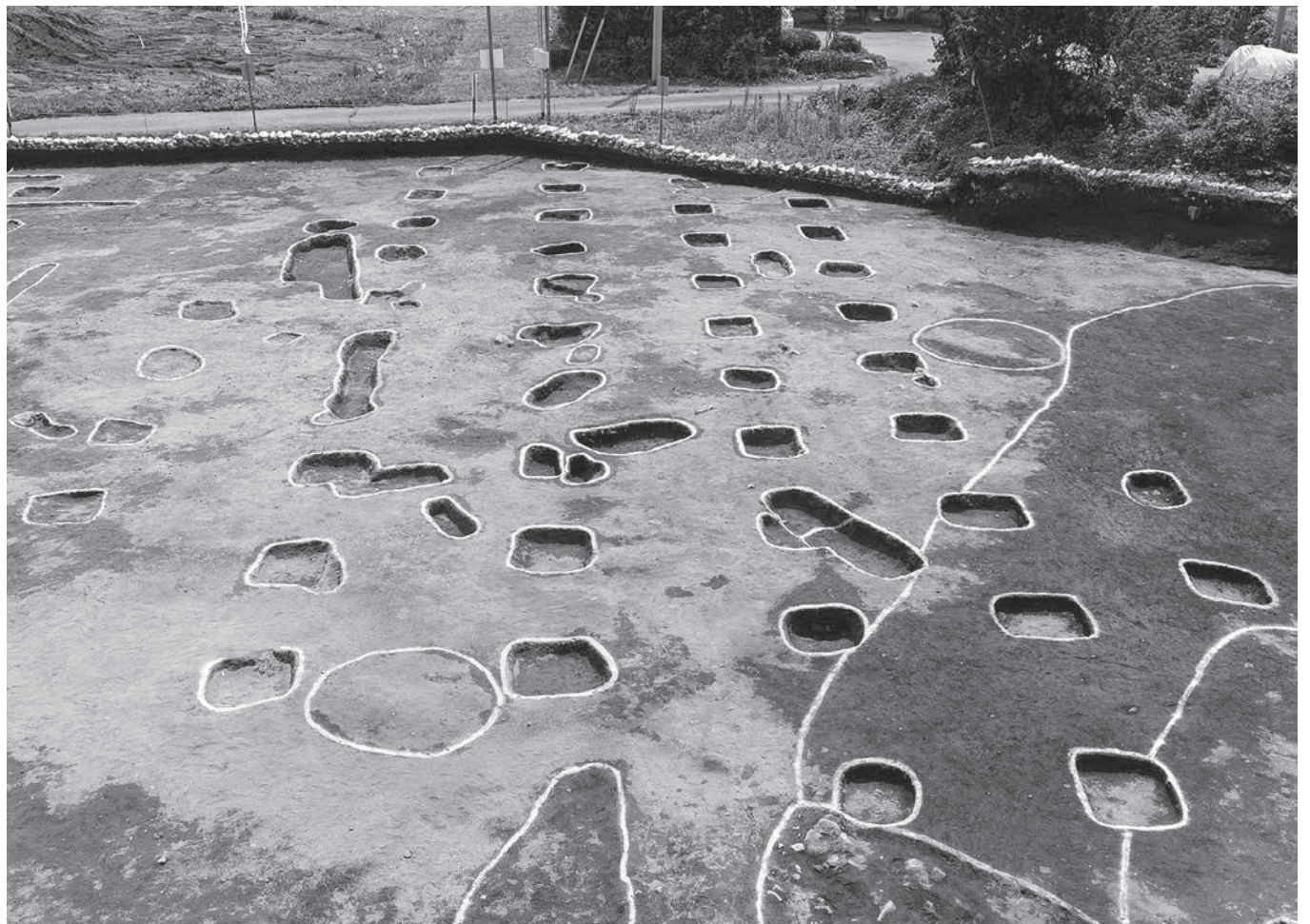
1 3区18号溝全景(北より)



2 3区18号溝南端部全景、土層断面(北より)



3 3区作業風景(南より)



4 3区耕作痕B群全景(西より)

PL.24

1区南2号竖穴建物



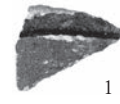
1

1区南7号土坑



1

1区南耕作遺構群



1 (A群耕作痕 6溝)



2 (B群耕作痕 15溝)

1区南16号溝



1

2区60号土坑



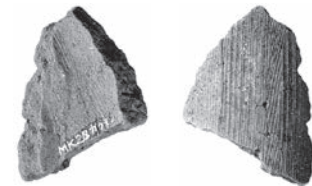
1

2区19号溝



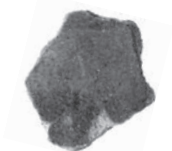
1

2区遺構外



1

3区1号竖穴状遺構



1

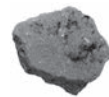
3区耕作痕



1



2



3



4



5

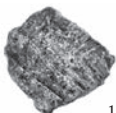
1~3 B群耕作痕
4・5 F群耕作痕

3区遺構外



1

縄文時代



1



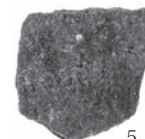
2



3



4



5



6

報告書抄録

書名ふりがな	みやがいといせき
書名	宮貝戸遺跡
副書名	上信自動車道祖母島箱島バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	646
編著者名	齊田智彦・石守晃・山本光明
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20181121
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田 784-2
遺跡名ふりがな	みやがいといせき
遺跡名	宮貝戸遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんひがしあがつままちおおあざはこじまあざみやがいと
遺跡所在地	群馬県吾妻郡東吾妻町大字箱島字宮貝戸
市町村コード	10429
遺跡番号	0127
北緯(世界測地系)	3633250.8
東経(世界測地系)	1385535.5
調査期間	20170101-20170131 / 20170701-20170831
調査面積	5,470.37
調査原因	道路建設
種別	集落、畑
主な時代	縄文／古代／中世／近世
遺跡概要	縄文：縄文土器／古代：竪穴建物 1＋竪穴状遺構 1＋土坑 3＋谷 3－土器／古代～中世：土坑 6＋ピット 12＋溝 1／中世：竪穴状遺構 1＋掘立柱建物 3＋柵 1＋土坑 17＋ピット 17＋溝 1／中世～近世：土坑 33＋溝 1＋耕作痕 1－陶磁器／近世：耕作痕 2／近世～近代：溝 1＋耕作痕 9
特記事項	竈を建物の一辺に 2 基併設する 11 世紀の竪穴建物と、掘立柱建物と竪穴状遺構の組み合わせによる建物遺構 1 か所を調査した。
要約	本遺跡は東を鳴沢川に画され、西を下位段丘に挟まれた、吾妻川右岸上位段丘面上に立地する。遺跡地周辺は、古墳時代後期初頭（6 世紀初頭）の榛名山を起源とする火砕流に埋没しており、火砕流層上に古代以降の遺構群が残る。平安時代の竪穴建物と中世の建物群や土坑群、近世以降の耕作遺構等が確認された。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第646集

宮貝戸遺跡

上信自動車道祖母島箱島バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成30(2018)年11月11日 印刷

平成30(2018)年11月21日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社開文社印刷所
